

---

# Chaos Blood

水々火々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chaos Blood

### 【Nコード】

N6483W

### 【作者名】

水々火々

### 【あらすじ】

千年前に「災禍の時」と呼ばれる大災害が起きた。人類の半分は死に絶え、苛酷な環境の中で人々は生きようとがく。

そんな折、世界に魔物が現れ、人類に牙を向くが環境への適応能力からか対抗するように能力者と呼ばれる人々が生まれる。

それから千年の時を経て、一人の青年と共に物語は加速する

## プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## プロローグ

いつも通りの代わり映えのない日常。  
ほとんどの人々はそう思っていただろう。

その日、一つの巨大な隕石とそれに連なる大小様々な複数の隕石が世界に衝突した。

衝突による影響は大きく、止むことのない地殻震動に津波、その後を訪れた大気汚染と氷河期の再来は生きとし生けるもの全ての脅威となった。

人類と動植物の生態系は乱れ、総人口の半分が一ヶ月で死に絶えた。

生き残った人類もただ死を待つだけ。それは救い難いほどに逃れることのできない事実だった。

しかし、何の因果か。墜落した隕石のいくつかには自浄作用があったらしく、空を閉ざしていた粉塵と有害物質をその身に取り込み、浄化していった。

大気汚染の軽減により半月ほどで氷河期も終わったが、人々にとって決して生活できる環境とまではいかなかった。

劣悪の環境の中で生きていかなければならないのである。衣食住はもとより、生き残った人類が猜疑心に溺れるのも無理のないことだった。

ただでさえ少なくなつた人口が日々争いによつて、また飢えによつて減少していく。

中にはコミュニティを形成し、その中だけで生活する術を模索する者もいたが、人の不満というのは際限なく、そのほとんどは内部の抗争で瓦解していった。

そんな中、一つの出来事によつて人類は再度協力し、生き残らねばならない境地に立たされる。

それは環境の変化からか、今までに見たことのない異種の生物が時折出現し、その生物の本能なのか人を襲い喰らう。

自衛のため、人々は集団での行動を取るようになった。一対一では殺される確率が高かろうが、集団戦、それも罾などの安全策を幾重にも張つた状態での戦いでは下手を打たない限り死ぬことは少ない。

戦い。改善。戦い。改善。と繰り返すうちに数年が経つた頃、またしても変化が訪れた。

苦境の中で新しく生まれた子供たちの中に常識では考えられない力が授けられてた者が確認されたのである。

のちにギフトと呼ばれる能力とそれを使役する能力者。彼らの能力は物理的なものからオカルト的なものまで様々で、これまでの戦いをより安定化してくれるものであったが、一つの大きな問題もあった。

能力の暴走。心身への負担がある一定レベルまでくると能力はその方向性を失い、周囲に脅威をもたらす。謂わば、ギフトとは諸刃の剣であり、いつ自分たちにその刃が向くか分からない状況では結果として仕方なかったのかもしれない。

次第に能力者たちは管理されていくようになる。

人が人を管理する。通常の社会的構成であればごく普通のことだが、この管理とは通常の意味合いとは大きく異なっていた。

彼らを一種の道具として管理することにしたのである。当初の能力持ちの人口は非常に少なく、それぞれのコミュニティにより管理されることで解決策を導き出した。

どれだけ非人道的であろうとギフトの効率的な運用により、人類という一つの種の生存率が飛躍的に向上したのが事実だ。

人々はゆっくりとだが仮初の平和を受け入れつつあった。

それから 千年の時が過ぎた。

## 第一話 始まりの都市（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第一話 始まりの都市

早朝、巨大な壁の前に数人の列が出来ていた。

そこには商業都市ブルドオムスの関所があり、一人、また一人と入っていく。

しばらくすると、一人の青年の番になった。

服装に関しては黒地の七分袖にジーンズといった一般的な服装。

唯一目を引くところがあるとすれば首にかかったいくつものネックレスぐらいで、そのネックレスの先端は服の中に隠れているためファッション性が高いとも言えない。

見た目は黒髪に若干蒼みがかかった黒い瞳。そして容姿はというと顔立ちはある程度整っており、百八十と身長はあるが体つきが細いため、一見優男に見えてしまう。

しかし、よくよく見ると分かるのだが、彼には無駄な肉がない。まるで俊敏な獣のような青年である。

「オウカ・ライゼス。歳は十八で間違いないな」

「ああ、間違いない」

「この都市への目的は？」

この都市へ来る者の目的など二通りしかないが役人は規則どおりの確認をした。

「腕試しのついでに『災禍の種』の破壊」

役人にとっては何度も聞いたことのある類の回答だったが、それでも尚そう答えたオウカに目を瞪る。

千年前のあの出来事は『災禍の時』として語り継がれており、この都市も復興する際に商業を基盤に大きく発展したモデルの一つだった。

しかしながら何故ここまで巨大な壁が存在するかというと、大都市というのはそれぞれが『災禍の時』に墜落した隕石『災厄の種』(通称、『種』と呼ばれている)の一つ一つを封印するといった役



割を担っているからでもあった。

都市を覆う巨大で頑丈な壁とそしてその都市以上に広大な範囲を覆っている巨大な特殊仕様の絶壁。まるで比率の合っていないアラビア数字の『8』のような形で都市は存在する。

この千年間、確かにいくつかの『種』は彼らのような開拓者（マインナーな呼び名では冒険者）によって破壊されたが、その規模は小さいものであった。しかし、それでも多くの犠牲と実力者の協力もあって成し遂げたことである。偉業といってもいいくらいの難事なのだ。

付け加えるとこの商業都市ブルドオムスが封印している『種』は決して小さくはない。それはこの都市の規模からも考えられることだった。都市の直径が一五キロに対して封印区域の直径は七十キロにも及ぶ。

都市と封印区域の門を潜ってもその道なりは一直線ではない。これは封印区域によって異なるのだが、地面が隆起していたり、熱帯または雪原などその種類は様々だ。

そして大半の『種』は地表よりもずっと下の位置に存在しており、一番厄介なのが墜落跡となる巨大な穴が何故か存在しないため、探索者はどう目的地に辿り着くかから考えねばならない。それはつまり地道に目的地までの道を探すか、作るしかないのが現状ということでもある。

またこの都市が抱える封印区域の内部は密林となっていた。まず一日では目的地に届くことはできるはずもなく、また何日かかけて無事辿り着くことができたとしても小さくて二トントラック一個分の大きさである『種』をどう破壊するかが問題なのだ。

それをこのオウカという男は特に気負うこともなく言っただけだ。真性の大馬鹿者なのか、よほどの自信家なのかどちらかだろう。

「ふむ。本気がどうかは知らんが、一人であそこを攻略するのははつきり言って無謀だ。門へ入るのもギルドでの手続きが必要になるし、そこで仲間でも集めてから行くんだな」

いくらこの場限りの付き合いでも目の前の男に死なれるのは目覚めが悪いのだろう。役人は扉の先を指差した。

「ここを抜けて真っ直ぐ行けばギルドだ。看板も出ているしすぐに分かるだろう」

そう言つと審査のために預かっていた二振りの剣をオウカに手渡した。

受け取つた本人はというと、黙って役人をじつと見ている。

「何だ。何か質問でもあるのか？」

するとそれまで退屈そうにしていたオウカの表情が悪がきのように微笑んで、

「いや、おっさんいい人なんだなって」

まるで友人のように話しかけてきた。初対面の人間に対しては些か無礼な発言であるが、この青年の表情から悪意は感じられない。

役人もそう思つたのか、盛大に溜め息をついて再度扉を指差した。

「質問はないんだな。だったらもう審査は終わりだから行け。さっさと行つてしまえ」

オウカは苦笑しながら「ありがと。助かったよ」と言つと、目の前の扉を開けた。

扉を開けると、オウカはその光景に目を奪われた。

目の前には乱立するビルや商店、そして出店などがそれぞれエリア分けして展開されており、その中を少なくない人々が行き来している。

千年前に総人口が半分以下になつたとはいえ、確かに現在人口は増えている。しかし、ここまで多くの人がいるのを見るのは初めてだつた。

オウカが今まで住んでいた場所や故郷では多く見積もっても百人に満たないくらいが普通である。祭りか、何かの行事でもない限りここまでの人を見る機会というのはなかったのだ。

「これがブルドオムス。確かに大都市に分類されるだけはあるな」  
やや呆れた感のある感想をつぶやくと、ふと思いついたように苦笑した。

これなら確かにあの子が一緒に付いていくと駄々をこねたのも分かる。

剣の修行でオウカが一年ほどお世話になった家に一人の少女がいて、彼にとつては姉弟子にあたるのだが、年齢やその言動から次第に本当の妹のように面倒を見るが多かった。

オウカとも年齢が近いお陰か、その子もこちらを兄のように慕ってくれていたのだが、一ヶ月前にこの都市へ行くことを話したところ「私も付いていきますっ！」と凄腕で懇願されたが、両親の必死の説得（最後は泣き落とし）ですったもんだの末、渋々ながらも同行を断念したという出来事があった。

それからオウカが旅に出るまでの間にも色々あったのだが、今はそれよりも早くギルドに登録をしなくてはここに来た意味がないと棒立ちだった足を進ませる。

実際関所からギルドまでの距離はそれほど離れておらず、少し歩いたところで看板が見えてきた。

ギルドの中に入ると、数人の開拓者たちがいくつかのグループに分かれて話し合っているのが見受けられる。

ベテランからアマチュアまで『種』の攻略やそれに関する依頼の作戦会議中というところだろう。ほとんどの者が、今入ってきたオウカに対して興味を持っていないようだった。

まるでそれが当たり前のことであるようにオウカはそのまま奥の受付に向かう。

「初めてギルドを利用するんだが、登録はここで問題ないか？」

「大丈夫ですよ。基本的には登録から依頼の請負までここで行っています」

オウカに声をかけられたのはギルドの制服を着こなした二十前半の女性職員で、胸元にはネームプレートでイリアと表示されていた。淡い栗色の髪が腰まであり、その瞳は琥珀色。美女といって申し分ない容姿をしている。

有体にいえば出るところは出て、引込むところは引込んだ体つきをしていた。

ちなみにこの都市に在中している開拓者の大半は彼女が目的で足しげく通っているのだが、今のところ彼女を振り向かせることが出来た者はいない。

そんな彼女に対して、まったく物怖じしないオウカはよほど肝の据わった男なのかもしれない。

「それなら早速で悪いが登録をお願いしたいんだが」

「では、こちらの書類を確認してから記入してください」

記入事項の内容は一般的なことから始まり、現在保有している能力も記入するようになっていた。

千年前とは違い、現在ではギフトというのはそれほど珍しくなくなっている。そのため、昔のように能力者＝道具としての扱いはなくなった。

そして、その珍しくなくなった大きな要因が人工的なギフトの取得である。それは技術の進歩のお陰であり、それまでに犠牲になった能力者たちのお陰でもあった。

具体的には誰もが適応能力さえあれば、後からギフトを追加することができなのだ。

といっても、その能力を得るためにはギルドにて購入しなければならぬ。もちろん、ギフトに応じて相応の金額が求められる。

例えば、探索者の生存能力を高める『解析』に関しては比較的安価で購入できるのに対して、戦闘的な意味合いで使用の多い『炎』

や『氷雪』など外因的効果を付与した能力は非常に高価な金額と共に制約が求められる。

制約とは、使用の用途やそれを違反したときに発生する罰則などの注意事項を了承した後、個人のプライベート情報を年に一度申請しなければならぬことを表す。

そのため、探索者の中でもそれなりに経験と金額を稼いだ者でないと、簡単には新しい能力を得ることができないのだ。

全ての記入が終わり、オウカは再度女性職員に声をかけた。

「はい、では確認させていただきます」

イリア・フオウントはその書類を見て、硬直してしまった。

一般事項の内容に関して問題らしい問題はなかったのだが、能力保有欄に記入されている種類が問題だった。

『俊敏』『高速思考』『解析』『見切り』そして、『蒼の守護』

四つのギフトは今まで見たことがあったが、この『蒼の守護』に関しては見たことも聞いたこともない。

偶に探索者という職業を楽しんで金銭の稼げるものとして冷やかしに来る者もいるが、目の前にいるオウカという人物はそれに該当しないだろう。あくまで憶測、いやそんな気がするというだけだが何故か間違っていないはずだ。

しかし、それならばこの技能に関していえば全て生まれ持ったギフトということになる。

そもそも五つものギフトを生まれながらに持つということは極めて稀だ。

一体、オウカという男は何なのだろう。

出口のない思考に耽っていると不安になったのか、当の本人が声をかけてきた。

「すまない、何か不備でもあったか？」

「あっ、いえ大丈夫です！ 気にしないでください！」

イリアは慌てて応えると同時に、つい柄にもなく大声を出してしまつたことに赤面してしまつた。

「ならいいんだが……」

オウカ自身はあまり気にしない様子だったが、これには周り（イリアファン）が黙っていなかった。

いつの間にか二人のやり取りは注目を受けていたようで、血の気の多い者は既に席を立てオウカに殺気を飛ばしている。

それに対してオウカはどこ吹く風で流していたが 周りの様子に気づいたイリアは営業スマイルをフルに発揮して周囲を落ち着かせる。

その効果は絶大で、こちらを見ていた全ての者が「でれっ」とした表情に変わり、先程のことなど忘れてしまつたぐらいだ。

まるで他人事のように眺めていたオウカは同類を見つけたように、「お前も苦労してるんだな」

と優しく労わるように言った。そう、言つてしまつた。

最初はその言葉が上手く理解できなかったのか、イリアはきよとんとしていたが、言われたことがだんだんと馴染んでくると先程とは違つた意味で顔を真っ赤にして怒鳴つた。

「あなたに言われたくありませんっ！」

顔を赤くして怒っている彼女を見てオウカは微笑んでしまつた。

「何を笑っているんです！ オウカ！」

「いや、わるい。何だかさっきまでと違つてこっちの方が話しやすいと思つて」

屈託なく笑いながらそういうオウカの顔を、イリアは今までこれ程まじまじと見たことがあるつかというほどに見つめてしまつた。

そんな二人の時間は、無粋な邪魔が入つたことで終わりを迎えた。

「ごほん、あゝイリア君。大きな声が聞こえたが大丈夫かね？」

イリアはその声に酷く緊張したが、声が出た方へ振り返るときには動揺の欠片も見えない笑顔を貼り付けた表情で迎えた。

「お騒がせして申し訳ありません、グラン副所長」

イリアに声をかけたのは、猫背で痩せおり、どこか神経質な雰囲気をかもした男だった。

「いや、問題ないのならいいんだよ。何かあったらすぐ僕に言うんだよ。僕は君の事が気に入っているからね」

「ありがとうございます。何かあったらご相談します」

あくまで事務的に答えるイリアに対して、グランという男は粘着質な視線を彼女に向けながら去っていった。

そして一瞬だけ、オウカに視線を移すときに蛇に酷似した絡み付く殺気に、イリアは気づくことはなかった。

溜め息を堪えつつ、イリアが再びオウカの方を見ると、彼は無表情でグランの去った方向を見つめていた。

「あの、オウカさん。どうかされましたか？」

するとオウカは先程の表情がまるで嘘のようにラフな感じで応えた。

「なんでもない。それよりも、さっきみたいにオウカと呼び捨てにしてくれ」

「あ、あれは、申し訳ありませんでした」

縮こまったようにしてイリアは謝罪したが、当の本人は不満げな表情を浮かべる。

「気にしないでくれ。というよりも、俺にはあっちの方が楽なんだから」

「そんなわけにはいきません。お客様に無礼なことではできません」

イリアがそう言うと、オウカは意地悪な表情になった。

「それなら仕方ないか。じゃあ、俺だけイリアを呼び捨てにするよ。イリアにとっては本当に珍しいことに三度硬直する。」

「……あの、オウカさんって結構意地悪ですか？」

「何を言うんだ。俺のようにこれ程清廉潔白という言葉が似合う男

はいないぞ」

我慢していた溜め息を盛大に吐き出すと、イリアは半眼でオウカを見据えた。

「分かりました。オウカ、あなたの言うとおりになりました。ただし、これ以上不真面目な態度でいるようなら分かっていますね？」

「もちろんだ」

オウカは嬉しそうに、まるでシツポを振る犬のように頷いた。

軽く頭痛を覚えるイリアだったが、表情を見る限り決して嫌そうには見えなかった。

まるで我侘な弟の面倒でもみる姉の心境というやつだろうか。

「ではオウカ、ここに記入されている内容に間違いはありませんか？」

「自分のことだ、間違えようがない」

「それでは確認なのですが、この『蒼の守護』というのはどういうギフトですか？」

「秘密だ」

「なるほどって……え、秘密？」

「そうだ、秘密だ。確か確認事項の中には記入の義務があったが、その詳細について答える義務はなかったはずだが？」

「そ、それはそうですね……」

オウカが言うようにギルドの登録では記入の義務はあっても、個人に不利な内容であれば黙秘権を行使することが出来る。

出来るといっても実際にそれを行う者も少ないし、ギルドの心証も悪くなるから基本的には普通はしない。

つくづくオウカという男は規格外のようだ。

「それなら仕方ありません。その件については保留としますが、これだけは答えてください」

オウカは無言で促す。

「使用する剣技は二刀流。そして現在はシングルで登録ということですよ、よろしいですね？」



「そうだが、何かまずいことでもあるのか？」

「ここまで常識知らずの人を見たことがありませんとばかりに、イリアは呆れと眩暈を感じた。

「まずいことも何も、まずありえませんが。一人で行動して、『種』を破壊するだなんて自殺志願者以外の何者でもありませんよ」

「そうなのか？」

「そうなのかつて！ もうオウカさんは非常識です！」

先程のこともあり、イリアは声を絞って、周りには聞こえないぐらいの大きさをオウカを注意する。

本当にギルドへ登録する気があるのかしらとイリアが疑問に思っている、それを訂正するようにオウカは言葉を足した。

「しかし、世の中にはシングルで行動する開拓者もいると聞くが、俺の勘違いだったか？」

「確かにギルドに登録されている方でシングルで行動する方もいますが、それは最高位のランクを持つほんの一握りの方たちだけです。その方たちも何か大きな依頼があったときは、契約しているパーティと合流して行動しています」

イリアの言葉は実際に正しいが、実のところオウカは自分なら何とかなると考えていた。

『蒼の守護』もそうだが、オウカにはもう一つの理由で問題ないという確信もあった。

そんな悪巧みを見破ったのか、イリアは半眼でオウカを見つめた。

「あの、オウカは自分なら何とかなるとか思っていますか？」

「まあな」

ここで素直に、愚直に答えてしまふあたり、オウカという人物が伺える。

「まったくあなたという人は……」。

分かりました。ではオウカのギルド登録はこちらから提示する条件をクリアしてから正式に採用しましょう」

「条件？」

「ええ、これでも私はギルドの職員です。あなたが死なないように、その適正を確認させていただきます」

イリアはそう言う、「ちょっと待ってくださいね」と席を離れ、壁に設置している通信機で誰かと連絡を取りだした。

オウカは会ったときは大きく雰囲気が変わったイリアを見ながら、これからどんな条件を出されるのか思索していた。

正直なところ、オウカは初めの頃、そこまでイリアと関わるつもりはなかったのだ。

世界にはまだ多くの『種』が存在し、その猛威を振るっている。

この都市はその一つに過ぎず、すぐに破壊して、新しい場所へ向かおうと思っていた。

だが平和だと思っていたこの都市も色々あるようだ。

( 少しばかり様子を見てみるか )

オウカがそう思考を終えると同時に、イリアの方も通話先と話がついたようで戻ってきた。

「お待たせしました。こちらからオウカさんに提示する条件とは、ダブルスを組んで一つの依頼を達成していただくことです」

シングルは一人のこと。ダブルスは文字通り、二人のことを表す。

「しかし、俺にはまだこの都市の知り合いはいないんだが」

「はい、それも承知してます。何せオウカですからね」

「何だか納得できないことで、イリアは予測していたようだ。」

「そこで私の知り合いの開拓者を紹介します。」

先方には既にこちらから連絡を取り、了承をいただきましたので心配しないでください」

そういうイリアの表情はどこか楽しそうで、それを見たオウカも深く考えずに了承した。

「分かった。そういうことなら早速行動したいんだが、今からでも大丈夫か？」

「もちろんです。相手は門で待っているはずなので、そちらに向か  
つてください」

オウカは頷くと、パートナーの特徴などを確認しようとしたが、  
イリアはいじめっ子のような笑みを浮かべて意味深に言った。

「オウカが探さなくても、相手の子がきつと見つけて声をかけてく  
れます。」

ですから、分かりやすいように目印をお渡ししますね」

イリアが机の中で何やら探しだして、目的の物が見つかったのか、  
その笑みは更に輝きを増した。

それと同時に、その目印を受け取ったオウカの表情は反比例する  
ように暗くなつたという 閑話休題。

## 第二話 封印区域（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第二話 封印区域

「おーい！」

昼の太陽の下、オウカが下を向いて歩いていると、少女の明るい声が遠くから聞こえてきた。

きっと誰かと待ち合わせをしているのだろう。そして、待ち合わせの相手が来たところなのだ。

オウカは他人事のように考えながら、未だテンションの戻らない状態で下を見続けた。

「おーい！ 君だよ、見習い君！」

「ぐっ……」

オウカがテンションを直下させていた理由は、その左腕の腕章にあった。

腕章自体問題ない。何かの折に着けることは必ずある。

あるのだが、その腕章に表示されている文字が問題だった。

『開拓者見習い（仮）』

これこそが、イリアが満面の笑みでオウカに渡した物だった。

当然、オウカは拒否したのだが、これを着けないと開拓者の試験が受けれないと言われては着けざるを得ない。

そんなやり取りがあった後で、殊更それを強調されて呼ばれたのだ。

それは屈辱以外の何物でもないだろう。

今度こそオウカは声が出した方へ頭を上げて、思いっきり視線をぶつけた。

並大抵の者であればその視線に含まれた威圧に飲み込まれるのだろうが、そこはイリアの紹介する開拓者というだけあって問題ないようだ。

「そうそう君だよ。何で無視するかなっ」

そう言っただけで彼女は両腕を腰にまわして、いかにも注意しています

といったポーズをとった。

その姿がどこかで会ったような既視感をオウカに与える。それもつい最近に会ったような。

目の前の少女の容姿を改めて確認する。

淡い栗色の髪は肩ぐらいまでのミディアムで整えており、くりつとした瞳は琥珀色。服装は動きやすさを優先した七分袖の白シャツに、同じく七分丈のモスグリーンのカーゴパンツ。

更に胸部と手足の両方に強化プロテクター、そして腰にはダガーが装備してある。

彼女も間違いなく美少女の部類に入るのだろうが、彼女の浮かべる表情の豊かさと服装から、どちらかというところ可愛いらしさを感じてしまう。

「……もしかして、イリアの家族か？」

オウカが何とか自分で導き出した答えを述べると、少女は微笑んだ。

「正解。正確には妹だけだね。」

ミレット・フォウントです、よろしくっ」

ミレットはオウカに勢いよく右手を差し出した。

オウカ自身は姉とのギャップに面食らっていた様子だったが、あまりのフランクさに微笑んで、同じく右手を出して握り返した。

「オウカ・ライゼスだ。こちらこそ頼む」

オウカはてつきりすぐ手を離すのだろうと思っていたのだが、なかなかミレットは手を離さない。

不思議に思ったオウカが、彼女に目で問いかけると、

「ふーん、お姉ちゃんが言ってたような人には見えないけどなあ」  
思いつきり気になることを言われた。

それに対してオウカは、人のいい笑みを浮かべながら確認する。

「一体イリアは俺のことを何って言ってたんだ？」

「えっと、腹黒そうなんだけど、意地悪でもあって、でもいい人そっうだとか」

素直に暴露してくれたミレットに感謝しながら、オウカは楽しそうに笑った。

「そうか、イリアはそんなことを言っていたのか。開拓者になって再び会うのが楽しみだ」

実のところ、オウカはそんなに自分の評価を気にしていなかった。気にしていたのは、イリアが仕事でもプライベートでも自分を押し殺してストレスを溜めてしまふ気質なのではないかということところだ。

特に先程のギルドでグランという男が声をかけたときなど、イリアは一瞬怯えた表情を浮かべていた。

正直他人事と言われてしまっっては如何しようもないのだが、少し気をつけていた方がいいだろう。

だが、その心配も杞憂のようで家族には気兼ねなく接しているらしい。

それはたぶんこの子や家族がそうだったストレスを解消しているのだと、オウカは目の前の少女を見て納得した。

オウカとミレットは同時に手を離して、これからのことを話し出す。

「イリアに言われてここまで来たが、これから俺は何をすればいいんだ？」

「今回はオウカが開拓者の適正があるかどうかの確認だから、門の中に入ってから詳しいことを話すよ」

ミレットは巨大な壁に設置された、高さと同幅が同じく五メートルの門を指差す。

それに従ってオウカは改めて都市と封印区域の境に目を向ける。間近で見るとその壁の威圧感はかなりのもので、さすがのオウカでも呆然と最上部まで眺めてしまった。

「やっぱ、初めて見る人にとってはこの光景は壮観だよな」  
脇からミレットの声を聞き、オウカは苦笑する。

「ああ、こんな光景は都市ならではだな」

オウカは同時にその壁の中から感じる気配に、好戦的で獰猛な感情が沸き立つのを感じた。

「それよりもオウカ……ここに来るまでに装備とか準備しなかったの？」

ミレットはそんなオウカの黒い喜びに気づかなかったのか、当然の疑問を口にした。

「装備ならしているぞ」

ほら、とオウカは腰に提げた二振りの剣を見せる。

「いや、そうじゃなくて防具のことを言ってるんだよ。」

見た限り、それ何の『防護』もかかってないよね？」

ミレットの言うとおり、オウカの服装は通常の服に違いない。

開拓者の中には大金を出してまで衣服に『防護』の効果を付与してもらおう者もいるが、明らかに店で防具を買った方が安く揃えることができる。

つまり『防護』付きの衣類で着飾るのは、金持ちの道楽という意味合いが大きい。

「今からでも買いに行こうか？」

親切心とオウカへの不注意を指摘する形でミレットは提案をしてきたが、当の本人は首を振り断った。

「防具を付けると動きが鈍るから、このままでいい。」

それに現役の開拓者の実力も確認したいしな」

ミレットは姉のイリアと同じような呆れた表情で、長い溜め息をついた。

「前言撤回。お姉ちゃんが言ったこと、何となく理解した。」

でもこれだけは守って。危ないと思ったら私を置いてでも必ず逃げること」

さつきとは打って変わって、ミレットの真剣な表情にオウカは無言で肯く。

「オーケー。じゃあ、行こっか！」



門の中に入るのは、はつきり言うとは簡単だった。それもこれも、現役の開拓者が同行してくれているお陰だろう。

中に入れば、すぐに封印区域という訳ではなく、広くて長い通路をメインとし、複数の通路に分かれていた。魔物が都市へ侵入することを防ぐための対策の一つでもある。

もつとも、普段からメイン通路は頑丈な防壁が降りているため、オウカとミレットの二人は別の通路から封印区域へと向かっていた。ここまでの道すがら複数の門番やスタッフとすれ違ったのだが、その全員がミレットを見かけると、それぞれ挨拶してきたり、手を振ったりしてきた。

「ずいぶん人気者なんだな」

オウカは分かりきったことを確認するように述べる。

「昔からここに住んでいるからね。みんな顔見知りだよ」

この人懐っこさがミレットの魅力であり、いるだけで周囲が明るくなるのだから当然のことなのかもしれない。

しばらくオウカとミレットが雑談しながら歩いていると、目の前に入ってきたときと同じ形式の門に突き当たった。

「ここから封印区域だけど、準備はいい？」

「大丈夫だが、実際俺は何をすればいいんだ？」

元よりこれはオウカが開拓者になれるかの試験だったはず。その条件が分からないままというのも些か間抜けな気もする。

「そうだったね。今回の条件は、この封印区域にいる魔物を三匹倒すことだよ。」

もちろん、危なくなったら私もフォローするから心配しないで

「特に魔物の指定はないのか？」

「ギルドの依頼によってはそうだったものもあるけど、今回はなし。」

ただ『種』が近くなればなるほど、そこに生息する魔物の強さも格段に上がるから気をつけてね」

「了解した。」

ちなみに参考程度なんだが、依頼で複数の魔物を討伐した際にギルドへの申請はどうするんだ？」

魔物は『種』の周囲に自然と湧き出すようで、未だにその実態が解明されていない。そのため、長期間放置しておくとは封印区域から溢れ出すことも可能性として挙げられている。

しかしながら、そのような事態になることは各都市のギルドが正常に運用している限り、まず起こりえないことだといえる。

オウカの疑問にミレットは更に疑問を投げかける。

「その質問に答える前に確認なんだけど、オウカは狩猟ってやったことある？」

「あるがそれがどうした？」

「それなら簡単なんだけど、通常生き物を殺めるとそこに残るよね。でも封印区域などにいる魔物は違っていて、倒すと体の一部を結晶にして後は消え去るの。それも魔物によって残る結晶は決まっているから、間違えることもないし。」

で、さっきの回答なんだけど、何々を何匹討伐するって依頼があったら、それに見合った結晶を回収してギルドに提出すればいいってわけ」

「なるほど、それなら確かに個人でも運べるし、分かりやすいな。」

だが、集めた結晶はどうしているんだ？」

これまでも多くの開拓者が回収してきたであろう結晶の数を考えると、その数は膨大なものになるはずだ。

「それに関しては魔動炉の燃料とかに使われてたりするから、たくさんあってもデメリットはないよ」

「すまん、魔動炉ってのは何だ？」

質問してばかりだな、とオウカは思いながらも、ここで聞けることは聞いてしまった方が早いとして尋ねた。

「ん、魔動炉っていうのは封印区域を囲った壁の特殊フィールドを発生するのに稼動している装置のことかな。

ついでに言うと、特殊フィールドってのは魔物が発する気配みたいなものらしいよ」

「つまり、擬似的に壁を縄張りと思わせているってことか」

「そうそう！ そんな感じかも！」

魔動炉の常時稼動にどれだけの結晶が使われているのか定かではないが、確かにそれなら多くあるに超したことはない。

「すまない、色々と聞いてしまって。」

だが、ミレットのお陰で助かった。ありがとう」

オウカの言動を見ていると不遜な感じが多く見られるが、礼を弁えるということはしっかりしていた。

ミレットはしばらくの間、オウカの感謝の言葉に驚いていたが、嬉しそうに微笑むと、

「いえいえ、ギルドの先輩として当たり前のことですよ。」

それじゃあ、そろそろ中に入りますか？」

門の開放レバーを引いた。

重い音をたてながら開くその門を見ながら、オウカはやっとここまで来たと、ミレットとは違う意味で微笑んだ。

一言で表すと森。

そんな光景が門の向こうには広がっていた。

現在、オウカとミレットの二人が立っている場所は、門から近くの広場のような空間だった。

「噂には聞いていたが、ここまでとはな」

森とはいつても、ただの森ではない。

それぞれの木々の一本一本の大きさが通常の数倍になって生えているため、まるで自分たちが小さくなったかのような錯覚に陥りそうになる。

まだ昼だというのに、高い位置に覆い茂る葉や枝のせいで辺りは薄暗くなっている。

「オウカ、ここに入ったからには呆けていられないからね」

ミレットも真剣な面持ちで周囲を警戒している。

その言葉にオウカは浮ついた精神を落ち着かせる。

「すまない、気をつける」

すると人間の臭いに釣られてやってきたのか、一匹の魔物が奥の暗がりからこちらを窺うように近づいてくる。

「グリーンドッグか。この辺りだとまだ弱い部類の魔物だから、一人で大丈夫だと思うよ」

ミレットは魔物を見据えて、オウカに説明する。

グリーンドッグは名前の通り、全身を植物で侵食された大型犬と似た形状をしていた。

相手はまだこちらの様子を見ているようで、じっとしている。

オウカは魔物が動かないのを見て、

「ミレット、アイツを倒してきてくれ」

とミレットに場違いなお願いをした。

「え、ええええええええっ!？」

「な、え? わたしがやるのって、何こんなときにふざけてんのっ!」

当然ミレットは怒ったが、オウカは真面目に答える。

「いや、ふざけてなどいない。まずは手本を見たいと思ったただけだ」  
「む、そう言われると確かにすぐは戦えないか」

実際のところ、オウカとしてはあの程度の魔物など一瞬だが、ミレットの実力を判断する材料が欲しいため、それを手本という名の建前をお願いしてみたのだ。

「じゃあ、わたしがアイツを倒すから、よく見ててね」

そんなことは露知らず、ミレットは腰のダガーを抜き取って構えを取る。

グリーンドッグもこちらの敵意を感じ取ったのか、体を絞るように低くして唸り声をあげる。

後はお互い無言で走り 交差した。

ミレットが一瞬早く大地を蹴ってグリーンドッグの頭上を取り、右手に持ったダガーでその無防備になった首の付け根を一閃し、勝負は決まった。

無駄がなく、そして手馴れた動きであることは、離れた場所から見ていたオウカでも分かった。

ミレットが着地するころには、首と胴体の分かれたグリーンドッグから黒色の煙が吹き出て、しばらくすると最後には緑色の牙のような結晶だけが残った。

他に敵が居ないことを確認して、ミレットはオウカに手を振る。

「おーい、どうだった？ 参考になった？」

「ああ、いいものを見せてもらった」

ミレットの大体の実力を今の動きで把握したオウカは満足そうに頷く。

「だったら今度こそ、オウカの番だから気合い入れてよっ」

戦闘による疲労もなく、いつもの様子でミレットは走ってオウカのもとへと戻る。

しばらく二人は無言で当てもなく歩いていたが、痺れを切らしたのかミレットは立ち止まった。

「……どうした？」

「もうっ、何であれ以降魔物が出てこないのよ！」

オウカが声をかけると、ミレットは地団駄を踏んだ。

「俺に聞かれてもなあ……」

「それはそうだけど、普通は一時間も歩いたら何度か魔物と遭

「遇するはずなのに……何で今日に限って出てこないのよ」

ミレットの言うとおり、二人はその後、開拓者が通りやすいように整備された道を道なりに歩いていたのだが、あれ以来魔物の出てくることもなく、ただの散歩という微妙な時間が過ぎてしまった。

「せつかく機会があったのに、わたしが一人で倒してしまっなんて……」。

あれじゃあ、わたしがオウカのチャンスを奪ったみたいで……本当にゴメンね？」

「いや、あれは俺がミレットに頼んだことだから気にしないでくれ。それに現役の開拓者の動きというのが間近で見れて、ホント勉強になったから」

思わぬミレットのネガティブな一面を見てしまい、慌ててフオロ―するオウカ。

元が色々と考えているだけに、素直な感情には弱いようだ。

「でもどうしようか？ もう少し歩いてみる？」

「それなんだが、少しだけ時間をもらえれば、魔物の気配を探すことなら出来ると思う」

オウカは先程の魔物が発する気配を覚えていたのだが、敢てそれをミレットに言わなかったのは、ミレットもそういった技術を会得しているだろうと思っていたからだ。

しかし、ミレットの言動を見るにそのようなものは持ち合わせていないらしい。

「え？ それって魔物の位置が分かるってこと？」

「そんなところだ」

「それって『探査』のギフトを持ってることじゃない！ 何で早く言ってくれないのよ」

「いや、俺はそんな便利なギフトは持ってない。それに気配を探すって言っただろ？」

早合点しかけたミレットに、オウカは訂正を入れる。

『探査』というギフトは能力者の適正能力にもよるが、対象となる存在、または物に対してある程度の場所や距離を把握する能力を表す。

「俺のはさつきみたいな魔物の気配を感知する技術であって、ギフトじゃない。」

「たまたま俺の師事していた方がそうだったことも教えてくれたんだ」

「へえ、すごい便利な技術だね。それってわたしも覚えられるものなの？」

「先程の不満げな表情とは打って変わって、ミレットは興味津々で尋ねる。」

「ああ、はじめは時間がかかるだろうが、ミレットならコツさえ覚えれば大丈夫だろうな」

「ミレットの素質の高さから、オウカは素直にそう答えた。「やった！　じゃあ、今度教えてよね。楽しみにしているから！」

「分かったが、その前に課題をクリアしないと」  
「喜ぶミレットにオウカは苦笑しながら約束をすると、目を閉じて魔物の気配を探った。」

普段は目を閉じなくても近くにいれば分かるのだが、ミレットの言うように一時間も歩いて魔物の姿はおるか、その気配を感じることなかった。

「ここに来るまでに聞いた話やここが封印区域であることを考慮すると、まず通常では起き得ない状況なのだろう。」

（観光気分はここらでお終いだな）  
静かに、オウカは気配を探す範囲を広げていった。

目を瞑ったオウカを見ながら、ミレットは昼にあったやり取りを思い出していた。

ミレットが所属しているパーティはこの都市では結構有名で、若

手が多いながらも依頼の達成率がかなり高いということもあって、彼らを指名で依頼が入ることもある。

主に封印区域の中でしか生息しない植物や鉱物の採取を得意としたパーティだったが、少なくとも魔物との戦闘において他のパーティに引けをとらない実力者の集まりでもあった。

今日の依頼はまさに指名の内容で、とある場所から薬草の採取とその周囲の探索ということもあり、ミレットたちは早くから門の中にある控え室で入念な準備をして待機していた。

そこに顔見知りの門番がやってきて、イリアから連絡が入っていることを伝えた。既に控え室の設置された通信機に繋がっているらしく、受話器を取るとイリアの声が聞こえてきた。

「依頼の前にゴメンね」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。まだ出発まで時間あるし」

出発の時間まではまだ三十分もある。パーティのメンバーも思い思いに装備の確認や、柔軟などして時間を潰していた。

「それでどうしたの？」

「ん〜……それが、ね」

いつもの姉にしては歯切れの悪い話し方に、ミレットは疑問に思った。

「何かあった？」

「何かあったって程じゃないんだけど、ミレットにお願いしたいことがあって……」

話を聞くと、オウカというギルドに登録しに来た青年が結構な曲者で、それでいて何だかこちらの母性をくすぐるのだとか。何だか本当にいつもの姉らしくないなと思いつつながらミレットは、今もどこか楽しそうに愚痴っているイリアの話に割り込んだ。

「つまり、わたしにそのオウカって人の監督官をやって欲しいってこと？」

「……結果からいうとそうなるわね」

「いいよ。お姉ちゃんからの頼みだし、断るわけないよ」



「ありがとう！」

「で、いつからやるの」

「……今日は無理かな？」

「え、今日！？ 無理だよ、これから依頼があるって分かってるでしょっ」

「そうよね、でもオウカのことだから一日放っておいたら何か仕出かしそうで」

ミレットの頭の中でオウカという青年の姿はかなり最悪なものなりつつあったが、そこは実際に会ってみないと判断できないと考えるのもミレットという人柄でこそだった。

そして家族以外でイリアが人を呼び捨てにするなんて初めてのことじゃないだろうか。

個人的にも会いたくなかったミレットは姉に一度断りをいれる。

「とりあえず、仲間にも聞いてみるから少し待ってて」

「うん、ごめんね」

ミレットが受話器を押さえて振り返ると、会話から大体の事情を把握したのだからリーダーのケビンが軽く肩を竦めて、

「急ぎの用なんだろ？ 今回の依頼は危険じゃないし、イリアさんからのお願いを優先してもいいんじゃないかな」

周りの仲間を見て言った。

彼らもリーダーと同じ意見らしく、問題ないとジェスチャーで返してくれた。

「ありがとう」

早速、ミレットは待たせていた姉に了承の旨を伝えると、向こうもほっとしたようで「これから門に向かわせるから」と言って通話は切れた。

その後、オウカに会って姉が言っている姿とは印象が違うと思っていたが、話しているうちにミレットは姉の言つとおりだと実感した。

いい意味でも悪い意味でもオウカはマイペースなのだ、とミレッ

トが結論を心の中で出すと同時にオウカの瞳が開いた。

一瞬ミレットはどきっとしたが、そんな動揺を知らないオウカは次の言葉を告げた。

「……少し、急いだ方がいいな」

## 第二話 封印区域（後書き）

初めまして。水々火々と申します。

若輩者ではありますが、今回初めての投稿をさせていただきます。た。

稚拙な文章ではございますが、皆様様これからも宜しくお願い致します。

私の仕事柄、大変申し訳ないのですが更新にムラがございますので、ここで先に謝罪をさせていただきます。

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。

近々、更新できればと思いますので宜しくお願い致します。

### 第三話 魔物の群れ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

### 第三話 魔物の群れ

オウカとミレットの二人は森の中を走っていた。

封印区域の森の木々はそのサイズも歪だが、その生え方も人の侵入を拒むように入り組んだものだった。

決して常人ではまともに歩くことすら覚束無いだろう中を、二人は苦もなく疾走している。

今から十分ほど前に、魔物の気配を探すために瞳を閉じて集中していたオウカだったが、少しして瞳を開いた。

そして直ぐにオウカは真剣な表情で、

「離れた場所で人が魔物に襲われている」

と言うとミレットの指示を仰いだ。

もちろんミレットは人を助けるためであれば、行動することに躊躇しない。だが、オウカという開拓者でもない人間を戦闘に巻き込んでいいものか悩んでしまう。

オウカに場所だけ聞いても、もし万が一、ミレットがそこに着くことが出来なければ人が死んでしまう。

決断する必要がある。……そして、ミレットは決断した。

「案内して」

オウカは頷くと、着いて来いとばかりに背中を向けて森に入った。現在、森に突入してからミレットは目の前のオウカに驚愕を重ねていた。

ミレットはオウカの後ろを着いて行くだけだから大丈夫だが、先頭を走るオウカはまるで先導する道があるように迷いなく進み続けている。

ミレットの見立てでは、オウカはある程度の、それこそ開拓者になる実力は持っていると思っていた。筋肉のつき具合や、開拓者と同じペースで歩いて微塵も疲れを感じさせないところからもそれを裏付ける要因となっていた。

だが、その評価も改めねばならないようだ。ミレットはオウカの遠い背中を見つめた。

オウカは後ろにミレットが着いて来ているのを、後を見ずとも感じていた。

ミレットをなるべく離さないように、それでいて今も襲われている人たちを救えるギリギリの速度でオウカは走っていた。

しかし、気配を感じる限り、このままでは間に合わない。

オウカは左右の腰に帯剣した二振りの剣を抜くと、後続のミレットへの目印として左右に広がる木々を斬り倒さないように調節しながら斬り傷を刻み、全速で駆け抜けた。

オウカが森を抜けると、そこには多数の魔物に襲われているギルドのパーティがいた。

既に何人かは重傷のようで、それを庇うように前衛タイプの開拓者が二人と、『炎』のギフトを使う後衛が一人応戦している。

三人とも決して軽傷ではすまない傷を負っており、全滅も時間の問題だ。

この襲われている開拓者たちというのが、実はミレットの所属するパーティであり、彼らのような実力者が揃っていても苦戦する魔物の群れに、新たにオウカ一人が参戦したところで何の意味を成さないように思える。

魔物は熊のような体躯で、立ち上がった状態では全長四、五メートルにも及ぶ。また、全身を覆うように茨の棘が生えており、鋭くて長い爪と牙が血で濡れている。

ギルドではシンフルベアと呼ばれる封印区域の奥地、つまりは『種』の近くに生息する魔物だと確認されている。その凶暴性と黒くて分厚い毛皮に守られた体躯は並みの攻撃では掠り傷すら付かないため、開拓者の中でも指折りの実力者でしか相手に出来ない存在だったが、開拓者にもまだなっていないオウカは知る由もない。

シンフルベアは十七匹。普通この数で攻められれば、いくら経験の豊富な開拓者であろうとも死を意識するしかない。

オウカは魔物の数だけを確認すると、再び風となつて魔物の群れへ突入した。

「動くなッ！！！」

言霊に気を籠めて、オウカは一喝した。

対象となつたのは苦戦していた開拓者の三人と、周りを囲んでいた十七匹のシンフルベア。全てが金縛りにあつたように動けない中、オウカは両者が対立する中間に立った。

開拓者にとつては突然表れた正体不明の青年。シンフルベアにとつては好都合にも増えた獲物。

どちらが早く動きを再開するかは、火を見るよりも明らかだつた。シンフルベアは大きく唸つて忌々しい金縛りを解き、目の前にいるオウカへと鋭くて長い爪を振り上げ、勢いよく下ろした。

鈍い音と共に、舞い上がる土煙と鮮血。

死んだ。

今の出来事を見ていた者たち全てがそう思った。オウカの後ろで固まっていた開拓者たちと、やっとの思いで森を抜けたミレットが呆然とした様子で口に手を当てていた。

「グルアアアアアアアアアアアッ！！！」

シンフルベアは雄叫びを上げながら、振り下ろした爪を引き抜こうとして自分の腕から先が無いことに気づく。

「ガアアアアアアアアアアアッ！！！」

今度は絶叫。それも痛みに伴う、耐え難い絶叫。

視界を遮っていた土煙が薄れると、そこには死んだと思われていたオウカが先程と変わらずそこに立っていた。先程と違う点といえば、切断されたシンフルベアの腕が地面に投げ出されていることか。オウカは先程の攻撃を受けても泰然としており、どこか余裕すら

感じさせる。

「うそ……」

ミレットはオウカが死んでいなかったことへの喜びと、あのシンフルベアの腕を切り落とす離れ業を本当に彼がやったのか信じられずにいた。

その声が聞こえたわけではないだろうが、ミレットはオウカがこちらを見たような気がした。

シンフルベアの群れも同族が攻撃されたことに気づいたのか、それぞれが威嚇などを行い、オウカに敵意を示す。その中に隻腕になった魔物もあり、痛みよりも憎悪が勝ったのか、より凶暴に咆哮を上げる。

「へえ、今ので戦意を失わないのは中々だな」

膨大な敵意のプレッシャーは物理的な塊となって襲い掛かるのだが、当の本人は微風を浴びるように心地よく感じながら相手を褒めた。

一瞬の内に心を歪んだ状態になると、オウカは両手に持った剣を下段に構えながらシンフルベアの群れに流れるように歩み寄った。

近づくオウカに隻腕になったシンフルベアは、残った方の腕で迎え撃つ。先の攻撃よりも爪を広げてより確実に獲物を狙うが、シンフルベアの一撃は空を裂くのみで手応えは無い。

トンと、何か背後に降り立つ音を聞いてシンフルベアは振り返ろうとしたところで、紅い花卉にも似た鮮血を全身から噴き出して、絶命した。

誰もが何が起こったか理解できずにいた。それは共通の認識で、開拓者も魔物も動きを止めるには十分な出来事であった。

オウカは後ろを気にせず、残りのシンフルベアの群れへ向かう。今度は三匹のシンフルベアが動こうとしたところで、オウカの両手が霞んだ。咲き乱れる三つの紅くて瑞々しい花々。醜悪から生まれれた美ゆえに散るのも早く、微かな結晶となって消え去る。まさに鎧袖一触の出来事だった。



残る敵は十三匹。

「彼は、一体誰なんだ……」

今までこのシンフルベアの群れに全滅寸前まで苦しめられたパーティのリーダーであるケビンは、少なくとも傷の痛みも忘れて呟いた。

決して答えが返ってくることを期待して言ったわけではなかったが、予想外にも知った声で答える者がいた。

「彼は、オウカ。オウカ・ライゼスです」

ケビンは声の方を振り向くと、予想どおりミレットがそこにいた。ミレットもオウカが応戦している間に仲間の存在に気づき、シンフルベアに気付かれないように注意しながらここまで来たのだった。素早くパーティメンバーの容態を確認すると、ミレットは重傷者から応急手当を始めた。開拓者の大半は携帯している持ち運び優先の救命道具セットと各人の衣類などを使い、即席の止血と骨折には添え木を当てて体を固定する。

「ミレット、君は何故ここに？ いや、それよりもオウカ・ライゼス……聞いたことのない名だ」

「そうだと思います。オウカは、開拓者ではないですから」

「……何だって？」

「彼は開拓者でなく、なるために私と一緒に試験を受けるはずでした」

ケビンが絶句するのも仕方が無い。他の人よりもオウカという人間を知っているミレットでさえ、動揺を隠すことが出来ないのだから。

しかし、彼女の手が止まることは無く、着実に手当てを行っていく。このオウカが作ってくれたアドバンテージを使わずにいることは、ミレットにとって罪にも等しい。

それだけ、この戦闘は一方的であった。目の前では早くもシンフ

ルベアの数が残り六匹まで削られている。

まるで夢幻を見ているようだ。オウカが魔物の群れに向かって歩くだけで、そこに紅い血の花が咲き、そして結晶となっていく。

有り得ない。通常では、有り得るはずが無い。それでも、現実として今起きていることは認めるしかない。

「本当に、彼は何者なんだ？」

ケ빈は再度同じような問いを口にするが、明確な答えを求めて言ったわけではないことが分かるだけに、ミレットは心に浮かんだままいつものように答えた。

「分からないけど、わたし達の味方ですよ」

オウカは最後の一匹となったシンフルベアを見据えた。

この群れのボスと思われるシンフルベアの体躯は他に比べて一回り大きく、全身を覆う茨の棘もより禍々しく、かなりの強敵だと思われる。

それでもオウカが気負うことはなかったが、懸念していることが一つだけあった。

ミレットが負傷した開拓者たちと合流したことは戦闘中でも把握していた。

彼女も開拓者の一人であるからにはこういった状況に巻き込まれることもあるだろうが、オウカとしてはあまり血生臭い光景を見て欲しくなかったのだ。

特に現状のオウカの剣技は疾風怒涛といった言葉に相応しいものが多いため、本来であればこれだけの戦闘である。周りは屍山血河となり、見るも無残な光景が広がっているはずだったが、魔物の特性上倒されたものは結晶となるため、それも杞憂となった。

最後の敵ということもあり相手の力量を測るため、オウカは牽制程度の意味で斬撃を放つ。

ギギギインツ

三つに重なった耳障りな音が、オウカの攻撃をシンフルベアが防いだことを示していた。その巨大な体躯に似合わず、かなりの素早さも兼ね備えているようだ。

「今を防ぐか。だったら、少し本気を出さなきゃな」

オウカは今まで抑えていた枷を一つ開放した。静から動へ身体がシフトする。

ギフトの『俊敏』を活用したオウカはこれまでの流麗な動きと異なり、雷にも似た動きでシンフルベアに接近する。

相手もそれに合わせて、触れただけで致命傷になり得る一撃を見舞う。

ギイイイインツ

二度目の刃合わせでお互いに有効な一撃が加えられなかったことを確認すると、矢継ぎ早に連続の攻防へと至る。

オウカが雷速で挑むのに対して、シンフルベアは持ち前の強靱な肉体と時には身体に生えた棘をも使って相手を貫こうとする。

常人はおろか、ここにいる開拓者の大半でさえもがこの攻防を追えずにいた。

それほどまでに凄まじい戦闘。先の戦いではまだオウカは足を使わずにいただけあつて目で追うこともできたが、ここまで来ると最早誰も手出しのできない状態になる。

現に応急処置を終えたミレットとケ빈は先程から開いた口が塞がらないようで、呆然と事の成り行きを見守っている。

ギインギギイギイイイイン

度重なる攻防の果て、オウカはシンフルベアとの間に距離を取る。距離は十メートル。今のオウカにとって一足で縮められる距離でもある。

「……そろそろ決着をつけるか」

全ての出来事に始まりがあるように、終わりもまた存在する。

個人的にはまだこの魔物と戦いたいという想いがあるのは確かだが、後ろの開拓者たちの状態から見て、時間もあまりないはずだ。

不幸中の幸いにもミレットが彼らに応急処置を施してくれたから安心して戦うこともできたが、これ以上はただの自己満足に過ぎない（身体は十分に温まった。後はこの魔物を最短で刈り獲るのみ）  
オウカはそれまでと同じように雷速でシンフルベアに接近する。  
そして、目の前に豪速で迫る爪を確認し微笑んだ。

ゴッ

幾度も繰る返された刃合わせが鳴らない。鳴るのはただ空を引き裂く音のみ。

戸惑いを浮かべるシンフルベアの懷に、オウカは立っていた。

離れた場所で見えていたからこそ、ミレットには今のオウカの動きが把握できた。

それまでの異常な速さではなく、ここにきてオウカは緩急の妙を使い分けたのだ。その速さに慣れてしまっていたシンフルベアには理解できなかつたであろう。

豪速で迫る一撃に怯むことも無く、オウカは雷速を解き、柳のような動きでそれを避けてシンフルベアの死角へと移動した。つまり、シンフルベアの懷である。

灯台下暗しとはよく言ったもので、戸惑いを浮かべるシンフルベアはオウカに気づけずに初めての隙を見せてしまう。

茫然と立ち竦む巨体の足元からその連撃は始まった。まずは脛に致命的な一撃を喰らったのか、前のめりに体勢の崩れるシンフルベアに対してオウカは休むことなく、超高速の斬撃を更に加速して斬り刻む。

あまりの剣速と止むことの無い下からの攻撃に二トン近くあるシンフルベアの身体が地上から離れる。完全に無防備となった瞬間を狙って、オウカは両手に持つ剣を全身の捻りを加えて心臓に突き立てた。

ドンッ

有り得ないという言葉が何度頭に浮かんだだろう。ミレットは空高く舞い上がったシンフルベアを見上げ、最後の一撃の構えを取ったままのオウカに畏怖の感情と場違いながらも戦士として完成された美しさを感じていた。

十メートルほど舞い上がったシンフルベアの巨体は、そのまま黒煙を上げて結晶となって落下した。他の結晶とは異なって一回り大きく、禍々しくも艶のある漆黒の球体は吸い込まれるようにオウカの手元へと収まった。

パーティを襲っていたシンフルベアの群れがもういないことを確認したミレットは、今まで張り詰めていた緊張の糸が解れたような気がした。しかし、いつまでも安心してはいられない。応急処置をしたとはいえ、仲間の容態は刻一刻を争う事態であることに変わりはない。それに先程まで意識のあった三人も既に他の仲間と同じく、意識の無い状態になっている。

ミレットの所属するパーティは六人で構成されており、ミレットとオウカの二人で運ぶには数が多すぎる。

どうしたらいいのかミレットが悩んでいると剣を鞘に収めたオウカが近づいてきた。彼もこちらの現状を見て、時間があまりないことを悟ったようだ。

「オウカ、どうしよう……どうしたらいいの？」

ミレットは言うてから悔やんだ。さすがのオウカもこの人数を運ぶ手段を持っているはずはないだろう。もしあるにしても、重傷者に負担を与えずに移動するのは不可能だ。

全てをオウカに頼り切るのは虫が良すぎる。

「誰かこの中に式神か、もしくは『使役』のギフトを持っている人は？」

悲壮な表情のミレットに、オウカは優しく問いかけた。

「え？ 『使役』ならわたしが持つてるけど」

ミレットの所有するギフトは『解析』『衝撃』そして『使役』の三つ。だが、『使役』とは能力者に比べて遥かに弱い魔物や動物を一時的に拘束し、操るギフトである。しかも、その効果は対象が生きているときに限られるもので、この周囲にはシンフルベアの群れを恐れて他の魔物は逃げてしまったはずだ。

「それなら一つ方法がある。俺を信じてくれないか？」

オウカの目は真剣で、彼が言うようにこの場を解決できる方法があるのなら信じたい。

ミレットは縋る思いで確認した。

「それでみんなが助かるなら。」

わたしは何をすればいいの？」

「ミレットの『使役』を使って、ここにいる人たちを魔物で移動させる」

「でも、この周囲には魔物はいないのよっ。それにこれだけの人数を運べる魔物なんて、わたしには……」

「大丈夫だ。それについては俺に考えがあるから、少し待っててくれ」

オウカはそう言うと、少し離れた位置に聳え立っている巨木へと一足飛びで駆け抜けた。そしてその勢いを乗せたまま腰に差した剣を抜き、強烈な一閃を放った。

幹の根元から斜めに切断された巨木は、ゆっくりとオウカの方へ傾きだした。彼は木が倒れてくるのを確認すると、今度は左右の剣を使って不要な部分を斬り分ける。

見る見るうちにそのサイズは小さくなっていき、最後には高さ二メートルくらいの円柱となって地面にそっと降り立った。

また不要となった大量の木材は、ご丁寧にも切り揃えてその脇に並べているからミレットとしては何ともいえない気持ちになっている。

あれだけ規格外のオウカが大丈夫だと言っただから、自分も気負わずにやれることをやればいいのだと思うと心が軽くなるのを感じた。

オウカは二メートルはある円柱を軽々と肩に担いで、再び一足飛びでこちらに戻ってきた。

「それをどうするの？」

「式神を顕現させるための依り代にする」

ミレットがオウカの言ったことを理解できずにいると、オウカは百聞は一見にしかずとばかりに円柱を縦に置いてその上に飛び乗った。

カコつと、何かが填まる音がすると同時にオウカから膨大な量の生命力が溢れ出し、それを一点に流し込むのをミレットは黙って見守った。

変化は唐突に起こった。オウカの立っている場所から黒煙が流れ出して円柱を覆うと、徐々にその輪郭が形成されゆき、信じられないものに変貌したのだった。

それはミレットたちの仲間を散々苦しめたシンフルベアに他ならなかった。

「オ、オウカ……あなた一体何を」

「こいつは式神で、魔物とは違うから心配いらぬ。その証拠に棘とか、敵意とかないだろ？」

オウカはシンフルベアらしき式神の肩に乗って、ミレットに問題がないことを示した。

確かにシンフルベアの特長ともいえる茨の棘が生えていない。それに禍々しさは消え、どこか神々しささえ感じるような気がする。

「それにしても、これをどうやって？」

「それは後で説明する。時間がないんだろ？」

オウカの言葉にミレットも気を引き締める。

「……」

「正直なところ、俺にはこいつを顕現させるだけで精一杯だ。だから

らミレット、君がこいつを『使役』してくれ」

言いたいことも聞きたいことも山のようにあるが、時間がないのは確かだ。

「やってみる」

ミレットは式神に触れ、意識の経路を繋げる。

通常は魔物に『使役』を使うと必ずと言っていいほど強い抵抗を受けるが、今回はそんなことはなく、すんなりと自分と式神に経路が通ったことを感じた。

(四肢を地面に着けて、身を伏せて)

ミレットが指示すると式神はそのとおりに行動した。

「無事『使役』できたみたいだな。では、急いで彼らをこいつの背中に運ぶぞ」

二人は慎重に式神の広い背中に仲間を乗せ、移動する際の振動で落ちないようにそれぞれを負担にならない程度に固定する。

「オウカ、次はどうするの?」

「ミレットはこれから言う二つのことに集中して『使役』を使ってほしい。

一つは振動を与えずに移動させること。もう一つは門まで最短距離で進むように指示すること」

「分かった」

ミレットには目の前のオウカを信じるしかない。その彼が言うことだ。ミレットは全力で式神を『使役』した。

(お願い、揺らさずに、門まで真っ直ぐ最短距離で進んで。みんなを助けたいのっ!!)

指示を受けた式神は、ミレットの望むままに己のでき得る最善の方法で門へと向かう。

伏せた姿勢から四肢を伸ばし、ミレットの指示通りに式神は滑るように大地を蹴って直進した。

まったく揺れないことにも驚いたミレットだったが、次第に近づいてくる森の木々に式神が自分の指示を理解できなかつたのか不安



になった。

「集中を切らすな。そのまま信じて『使役』するんだ」  
オウカの言葉にミレットは再度集中して『使役』する。

(お願いっ)

木々はもう目の前だが、それでもミレットは願ひ続けた。

式神が木々にぶつかると瞬間、それを避けるように木々の方が左右へと退き、道を開ける。

不思議な光景にミレットが目を瞬かせていると、隣に座っていたオウカが微笑んで言った。

「気にはなるだろうが、後でまとめて説明してやるから今は集中だ」  
「絶対よ？ 嘘ついたら、本気で怒るからね？」

言葉とは裏腹に、ミレットは輝くような笑顔で応えた。

## 第四話 慌しい一日の終わり（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第四話 慌しい一日の終わり

日も暮れて、それぞれの家屋に明かりが灯る時間帯の出来事である。

「主よ、これは美味しいぞ。シィーアもたくさん食べるから主も食べるがよい」

「ああ、ありがと……って、取ってはくれないんだな」

「それならわたしが取るっか？」

「あ、コラっ。何で私のお皿から取るうとするのよっ。中央にちゃんとおるでしょ」

謎の少女にオウカ、ミレット、そしてイリアの四人は、フォウント邸にて夕飯時には騒々しい光景を繰り広げていた。

オウカを含め、全員が昼時とは違う私服姿で、それぞれの個性が表れている。

もっとも、オウカの服装は変わったといっても昼の服装と系統がまったく変わらないことから、彼は服に関して無頓着のようだ。

そんなオウカはさて置き、女性陣はというと

ミレットは動きやすさを重視したグリーンのタンクトップの上に大きめの白のシャツと、デニムのショートパンツ。開拓者として臨むときには分からなかったが、この軽装で圧迫されていた胸はその本来の大きさに落ち着いている。

正直のところオウカには目の毒であるが、戦闘時と同じく明鏡止水の心で迎え撃つ。

イリアは性格どおり落ち着いたモカ色のワンピースの上に、ライトブラウンのカーディガン。彼女もギルドで会ったときに気づいてはいたが、今は私服ということもあり、平均よりも豊かな胸を束縛するものは少ない。

これもオウカは明鏡止水の境地で受け流す。

そして謎の少女は足首近くまである烏の濡れ羽色の真っ直ぐな髪

に漆黒の瞳、肌は雪のように白くてまるで異国の美しい人形かと思えるほどだ。背丈は一四〇くらいで線の細い体つきをしており、その幼さがより一層少女の人間らしさを薄れさせている。

服装に関しては少しサイズが合っていないのか、その華奢な身体には大きすぎる黒のワンピースを、腕や腰の位置で太目の紐を使って補整している。

彼女に関してオウカは普通に対応できる自信がある。その理由は言わぬが花であろう。

視線をフオウント姉妹に戻すと、ミレットがイリアの皿からオカズを取ろうと攻めており、それをイリアは防衛している。

姉妹というものは遠慮をしないものであるらしく、まずはミレットが火蓋を切った。

「いいじゃんか、お姉ちゃんのケチ」

「ケ、ケチですって？」

薄っすらとイリアのこめかみに青筋が浮かぶのを、オウカは傍観者然として見ていた。

「そうだよ、お姉ちゃんは事務職なんだから栄養管理には気をつけないと、その内……」

「ミレット！ 言っていいことと悪いことがあるって知ってる！？ それにこれ作ったの私だから栄養管理もバッチリで、低カロリーなんだから安心なのよっ」

「……やっぱ気にしてんじゃん」

「……」

姉妹の仲睦まじい(?)やり取りを見ながら、オウカは隣でひたすら食べている少女に声をかけた。

「それにしてもよく食べるよな。お前のその小さい身体にどうやって入っているんだか」

「もおべがあばもびびば」

「あーもう、口の中に入ってる時に喋るなよ」

オウカは手元にあったテーブルナプキンで、少女の口を拭い、周

りに飛んだ食べかすを拾う。

少女はゴックンと口の中の物を飲み込むと、

「それは乙女の秘密だ」

胸を張って偉そうに言った。

「乙女の秘密、かあ……」

「そうだ。だから主よ、詮索してはダメだぞ？ もししたら、明日の朝日を拝めないかもしれないぞ？」

「それは大変だな。でもよく噛んで食べるんだぞ？」

「分かった。シィアにとって造作もないことよ」

「あと、きちんとフォークとナイフ、もしくは箸を使って食べるんだぞ？」

「それは主よ、いくら万能に見えるシィアでも不可能なものは存在するのだ。察してくれ」

「ダメだ、ちゃんと使え。でなきゃ、飯は抜きだ」

「むう……仕方ないのう、了承しよう。しかし、今まで使ったこともないから上手く使えぬし、主が教えてくれぬか？」

「ほんとお前アレなんだな。いいか？ これはこう使うんだ」

傍から見ると仲のいい兄妹に見えなくもないやり取りに、いつの間にか周囲は静まり返っていた。

無言のプレッシャーを放つ方向をオウカが確認すると、ミレットとイリアが難しい顔をしてこちらを見ていた。

「どうした？」

意を決したのかミレットが口にする。

「いや、今日会ったにしては何か親しすぎない？」

「そうか？ ミレットやイリアとも今日が初めてだろ？ 接し方は変わらないと思うけどな」

「いえ、そうではなく。何というか、その、距離が近いというか……面倒見が良すぎるといいうか……」

今度はイリアがオウカの言葉に反論を挙げる。

「それは仕方ないだろ。こいつは色々と分からないことが多いんだ



遡る。

「その魔物使い動くなッ！ 名前と所属を言えッ！」

オウカたちが門に辿り着いたところで、門番の鋭い声が響いた。

他にも何人かの門番が武装して、こちらへ武器を向けている。

無理もないだろう。突然森の中を通り貫けて巨大なシンフルベアに似た魔物が現れたのである。彼らの警戒レベルは最高潮に達しているはずだ。

「ミレット・フォウント！ ケビン率いるパーティに所属しています！」

ミレットは門番に顔が見えるように、式神から身体を乗り出して答える。その声と名前に聞き覚えのある者たちが動揺する気配を感じる。

「ミ、ミレットなのか？ どうしてそんな魔物を『使役』しているんだ？」

「それは後で報告しますから、今はここを通して下さい！」

仲間が魔物に襲われて重傷を負ってるので、早くギルドの医療機関に運ばないといけないんです！」

ミレットの話聞いた門番の数名は警戒しながらも式神に近づいて確認すると、その上に乗った満身創痍のパーティーメンバーに息を呑んだ。

「分かった、門を開けよう。待っていてくれ」

門番はそう言うのとすぐに、門内にいる仲間と門と防壁を開放するように指示した。

「ありがとう」

ミレットは感謝の言葉を言うと、式神を『使役』してその門へと入った。式神は振動の少ない滑るような移動で走る。

「話が分かるやつでよかったな」

式神の顕現を維持するのは相当に疲れるものなのか、オウカは少し疲れた声でミレットに声をかけた。

「ええ、本当に。でも、医療機関に行くまでは安心できないから……」

「ごめんね、オウカ」

「何が？」

「これを維持するのって、凄く体力使うんでしょ？ 本当だったら、能力者のわたしがその負担を受けるはずなのに……」

落ち込むミレットにオウカは長い溜め息をついた。

「アホかお前は」

「ア、アホですってッ!？」

「ああ、そうだ。適材適所って言葉があるだろ？ 今回の俺の役割はこいつを維持すること。そしてミレットの役割は、こいつを『使役』し、安全かつ迅速に彼らを医療機関まで送り届けること。何の問題もないじゃないか」

「……ありがとう」

オウカから顔を逸らしたミレットは、小さな声で感謝の言葉を言った。

その表情は顔を逸らしているためオウカには見えなかったが、淡い栗色の髪から覗く耳が赤く染まっていた。

式神が門を抜ける手前で、オウカはミレットに疑問を提示した。

「そういえば、こいつを都市に入れても大丈夫なのか？」

「……………え？」

顔色が赤から青、そして真っ白になったミレットは悲痛な叫びを上げる。

「オウカのバカっ！ 何でもっと早く言ってくれないのよー!!」



ミレットの感情を他所に式神は門を通り抜ける。次に来るのは人々の悲鳴だろうと、ミレットは目を瞑って待ち構えていた。

「ホントこの都市のレベルは高いんだな」

予想とは別にオウカの感心する声で、ミレットは恐る恐る目を開ける。

「……あ、そうか。防壁を開けるからには、都市のほうにも警戒用の知らせが入るに決まってるじゃない」

走る式神の周りには人つ子一人存在せず、まるでこの都市に誰も住んでいないような感覚になる。

通常、門のメイン通路を封鎖する防壁を開放する機会はない。あるとすれば、この世界では数台しかないといわれるロストテクノロジーを使用した武装型輸送車の出入りか、封印区域で何かが起こったときぐらいである。そのときの緊急マニュアルは存在し、この都市に住むものにとって絶対に守らなければならないルールの一つとして認知されている。

余談だが、もちろん都市の移動には乗り物を使うこともある。基本は馬車か、能力者によって『使役』された魔物の大型輸送車くらいしかない。武装型輸送車に関しても、製造や維持費に膨大な費用がかかるため、大都市と呼べる場所でしか所有されていないのが事実だ。もつとも、商業都市ブルドオムスでも所有はされているが、ここ数十年稼働されることがないことから無用の長物として倉庫に眠っている。

移動する景色と無人の商店街をオウカが物珍しそうに見ているのを見て、ミレットはくすつと笑った。

「もう、オウカが変なこと言うから焦ったじゃない」

「すまん。だけど、ここまで徹底的に街から人がいなくなるなんて凄いな」

「まあ、月に一度は避難訓練もやっているから、これくらいはできないとね。」

できない人から真つ先に死ぬ可能性が高くなるわけだし」

そういうものか、とオウカは自分の住んでいた場所と比べる。確かにこれまでオウカのいた場所でも、避難訓練などの組織的な行動を行ったことはある。しかし、ここまで皆が真剣に取り組んでいたかという点、答えは否となる。それだけ、この都市の人々には封印区域という危険と隣り合わせでも住むなりの理由と、生存意識を高く持っているということだろう。

「何はともあれ、これだけ道がひらけていることは幸運よ。急いでギルドに向かいましょ」

「そうだな。もし揺れても俺が彼らを支えるから、よろしく頼む」  
決して遅くはない速度で走っていた式神はミレットの『使役』を重ねて受け、大地を駆ける黒い風となるが、その術者の気持ちを慮ったのか揺れることはなかった。

目的地であるギルドには式神のお陰もあり、それから五分ほどで着いた。

ギルドの前では十一人の白衣を着た者と、護衛のためか開拓者らしき重装備を固めた五人のパーティがいた。皆がオウカたちを待っていたようで、シンフルベアに似た式神を見たときにはさすがに驚いていたが、彼らもプロである。

「門番から既に患者の人数について連絡はもらっている。後は我々に任せてくれ」

白衣を着た一人の男はそう言うと、周りの医師たちに的確な指示を出しながら、重傷者であるミレットの仲間たちをストレッチャーに乗せてギルド内へ運ぶ。

それについて行こうとしたミレットだったが、上背のある屈強な開拓者に呼び止められた。髪は短く刈り上げており、歴戦の者特有の雰囲気滲ませていた。

「フオウント、すまないが何が起こったのか事情を聞かせてもおう」  
「でも、今はッ」

ミレットは離れていく仲間たちの方を気にしながら拒絶しようとするが、男は厳しい顔で首を左右に振る。

「それも理解している。だから後日、君の仲間が話せるようになってから一緒に事情を聞かせてもらおう。」

「そこのお前もそれでいいか？」

ミレットたちとは少し離れた位置で立っていたオウカに男は声をかける。

「へえ、何故俺も？」

「お前も当事者の一人だからだ」

男の答えは簡潔で、オウカはその回りくどさな言い方が気に入った。

「分かった。俺はオウカ・ライゼス。ギルドを通してもらえば連絡が取れると思う」

「協力に感謝する。私はゴルディエス・ハーグラン。この都市の警備隊長を務めている」

用事は済ませたとばかりにハーグランはオウカたちに背を向け、ギルドの中へ入っていった。それに続く四人の開拓者たちも只者でない風格を漂わせていた。

「隊長、ミレットへの尋問を先延ばしにしてよろしかったのですか？」

ハーグランたちがギルド内部の職員用通路を歩いていると、五人の中で一番若い女性隊員がハーグランに先程のことを確認した。

「ガーネット、君は気付かなかったのか？」

「一体何をでしょうか？」

ガーネットは、ハーグランの含む言い方に更に疑問を重ねる。

「まあーだまだだな！ ガーネットの嬢ちゃん！」

「ササトさん、私を嬢ちゃんと呼ばないで下さい。」

それで何がまだまだなんですか？」

ササトと呼ばれた黒色の肌をした三十代の男性隊員は、白い歯を  
にかつと見せて答えた。

「ホント、クールな女だねえ。ま、後輩に教えるのも先人の務めつ  
てな。」

まあ、簡単にいうとライゼスって名乗ったガキな。俺らの隊長に  
殺気を飛ばしてたんだよ」

「なッ!？」

知らなかったとはいえ、あまりにも不穏な内容にガーネットは驚  
愕した。

「あの男ッ！ 今すぐにもッ」

「おおいおいおい、落ち着けて。話の続きがあるんだからよう」  
激情に任せガーネットがオウカの元へ走り出そうとするのを、サ  
サトは独特の口調で止める。

ガーネットはハーグランの方を見るが、彼はいつもと変わらず敵  
しい顔をしていた。

「でえ、そのガキが殺気を放ったことに関して気付いていないのは、  
あの中というとお前えさんとミレットの嬢ちゃんぐらいだな」

眉間に皺を寄せる彼女を流して、ササトは続ける。

「その後は俺らも警戒してたんだが、あのガキって結構面白いのな。  
隊長の話聞いてからパッと殺気を消して普通に話してたし、あ  
りや中々出来るな」

周りの隊員の評価も大体同じようで、オウカ・ライゼスという個  
人に興味を持ったようだ。

「しかし、隊長はそれでいいのですか？」

「こちらにとって不利益なことは何もない。それに門の方にも何か  
あったらすぐに連絡しろと伝えてある」

「……了解しました」

不承不承であることは間違いないが、ガーネットはハーグランの  
意見に従った。

「あと、非常事態の解除を頼む」

「了解しました」

離れていくガーネットを見ながら、彼は先程のことを思い出す。

(オウカ・ライゼス、面白い男だ)

ハーグランは近いうちに会うであろう日を思い、静かに微笑むのだった。

あの後、仲間の容態を見に行くミレットと別れることになったオウカは式神の顕現を解除し、残った木の円柱をギルドの出入り口の脇に立てかけると中に入った。

ギルド内部は先の非常事態という知らせで少し前まで騒然としていたのか、主に開拓者たちが武装したまま、今回の警報について話合っている。

彼らの話の大半は憶測に過ぎないが、負傷した開拓者たちがストレッチャーで運ばれるのを見た後である。笑い話では済まないことが起きたのだと理解し、それに向けた今後について検討をしているようだった。

オウカはその中を悠々と歩き、目的の人物を見つけた。

「何だか忙しそうだな」

書類を抱えて、何やら職員と慌しく連絡を取り合っていたイリアは声に反応して振り返るとオウカに駆け寄った。

「オウカ！ 無事だったんですね！」

「俺は問題ないがどうした？」

「今はもう落ち着いてきてますが、門から警報が鳴ったときはこども騒然としていたんですよ。」

聞いた話によるとミレットが負傷者を運ぶため大型の魔物を『使役』していたとか、そのためにメイン通路の防壁を開放することになったとか色々情報が錯綜していて……って、オウカはミレットと一緒にいたんですね？」

こちらから聞くまでもなく、イリアはオウカに矢継ぎ早に説明し

た。よほどミレットのことが心配だったに違いない。

「さつきミレットと分かれたが、それまでは一緒にいたな」

「ということは、あれは間違いだっただのかし、ら……」

何かに気付いたようにオウカを凝視するイリアに、彼は訝しげに確認する。

「どうした？」

「どうしたって、オウカあなた怪我しているじゃないですか！」

そう言われて服を見ると確かに血が付いている。着ている服が黒色だったため分かりにくかったが、結構な量が付着している。

「ああ、これは俺のじゃなくて、ミレットと一緒に負傷者を運ぶ際に付いた血だ」

「そうだったんですか……。でも、そうするとオウカは現場にいたんですね？」

「だから、こんな格好になってるんだが」

真剣な表情でイリアはオウカを見つめる。

「私がいうのもなんですが、ミレットの所属しているパーティは実力者が多く揃ったところですよ。その彼らや同等のパーティがここまですで負傷するケースは、ここ最近じゃ見られなかったことです。

確認しますが、あなたとミレットはどうやってここまで来たんですか？」

話をはぐらかすこともできたが、イリアとは良好な関係を保っておきたいオウカとしてはできるだけ正直に話すことにした。

「俺の顕現させた式神をミレットに『使役』させてここまで移動した」

「では、その式神とは？」

「書類でも書いたように一年ほどある道場で教えを受けていた。そこで習得した技術で、魔物などに近い行使できる擬似生命体だ。今はその顕現を解いている」

「分かりました。次の質問です。」

あなたとミレットが負傷した彼らと会ったのは、戦闘前ですか？

それとも後ですか？」

「正しくは戦闘中だ。危機的な状況だったから、俺が魔物を倒した」  
「……証拠はありますか？」

オウカはズボンのポケットを探って、目的の物を取り出した。

「結晶が三個、つまりは魔物を三体倒したということですか？」

「まあな。それに開拓者になるための条件もそうだったはずだ」

できるだけ正直に話すと決めてはいたが、馬鹿正直に話すつもりもなかった。イリアが勘違いしてくれるのならそれでいいし、多分妹のミレットから詳しい話を聞くのだからここで敢て訂正する必要もない。

そんなオウカの内情を知ってか知らないでか、イリアは今まで固い表情だったのを呆れたものに変えた。

「あなたを初めて見たときに、この人は何かやりそうだと思っただけど、まさかここまでとは……」。

しかも、きちんと課題をクリアしてくるあたり、なんてゆうのか本当に非常識な人よね」

「そこまで言われると、何だか俺が本当に非常識みたいじゃないか」  
「みたいじゃなくて、そうなんです」。

ところでこの結晶ですけど、魔物の種類などを特定するのに少し時間がかかるので、ギルドへの登録と報酬はその後にしましょう」  
「つまり？」

「合格ということですよ。また報酬は魔物の種類で金額も変わるし、特定の依頼というわけでもないからあまり期待しないで下さいね」  
（なるほど、魔物の強さや依頼などによって報酬額は変わるか）

ギルドの料金システムについて少し学んだオウカはそこで、突然表れた強靭な気配に気付く。魔物とも清浄とも言えない気が交じり合ったような不思議な気配に身体が戦闘状態へと移る。

気配の出所はギルドの出入り口のように、近くにいた開拓者たちがそちらを見て動揺している。オウカは背中越しなのでその姿は確認できないが、イリアの愕然とした顔から相当の相手だと分かる。

ダッ

相手がこちらを捉え、走ってくるのを感じる。距離が間合いに入った瞬間、オウカは隙なく振り返った。

そして、その飛び掛ってくる相手がどう行動するのか見極めようとした。いや、してしまった。

ガバッとオウカの頭部は飛来してきた者に包み込まれる。

いつものオウカなら避けることも迎撃することも容易かつただろう。しかし、結果として彼は何の行動も取ることができずに終わった。

「な、なっ……」

後ろではイリアの声が聞こえる。

それでもオウカは動けなかった。

(今、自分は何を見た )

一瞬の内に見た光景を一つ一つ丁寧に思い出す。

並みでない気配をした者がギルドに入室。そして、周りが騒ぐ中、そいつはこちらを対象と定め、疾走。振り返った先にあった光景は

鴉の濡れ羽色の真っ直ぐな長髪と光を飲み込むような漆黒の瞳が印象的で、雪のように白い肌をした華奢な身体をした裸体の少女だった。

「はあっ!?! はあああああああああああああああああああああ  
ああっ!?!」

もう意味が分からない。何故? どうして? 幾つもの疑問がオウカの頭に浮かぶ。

きつと顔面は真っ赤になっていることだろうが、その原因がこうも近くには落ち着く術もない。

そして鼻から流れ出る熱いものを感じ、混乱した頭で最悪だと思





彼の頭部にしがみついていた少女は「お、おおお？」と言いながらも、驚異のバランス能力で離されないようにしている。

「あなたは離れる気はないのかしら？」

「離れる必要を感じんしろう」

オウカに会ってから何回目だろう。数える気も失せた溜め息をつけてイリアはオウカの手を引いた。

結果、少女はオウカから離れることはなかった。

オウカと少女の二人を別室に移動させ応接用ソファーに座らせると、イリアは息をついた。

何だか、この数分で一気に老け込んだ気がする。

（まだ私、二十二なのにこんなに疲れるだなんて転職した方がいいのかしら……）

自問自答しながらもイリアの動きは的確で、この部屋に常備されている薄手の毛布を取り出すと少女に渡した。

「いつまでもその格好じゃ風邪ひくわよ。あと、ソレははしたないから場所を変えなさい」

「すまぬ」

イリアのどこか諦めた声にオウカは「諦めんなよ！」と言おうとしたが、毛布を受け取った少女が頭の上でもぞもぞやっているのでもも言えずに終わった。

定位置が決まったのか、少女は毛布を身体に巻きつけてオウカの頭上で体育座りをしている。少女の平衡感覚も凄いが、細い体つきとはいえ少女一人を頭の上に乗せたまま微動もしないオウカの身体能力も並の人間ではありえないものだ。

「もう目を開けていいわよ」

「助かる」

目を開いたオウカは目の前に座るイリアを見て少し怯んだ。彼女の目は据わっていて、どこか達観した者の雰囲気醸し出していた。

「どうしてこういうことになっているか教えてもらえるかしら？」

「あ、ああ、分かった」

この場の主導権は完全にイリアの掌握するものとなっている。逆らうような馬鹿な真似はしないでおこうと決心し、説明しようとした時、カチャッと扉の開く音がした。

「あの〜、お姉ちゃんとオウカがここにいて聞いてただけど…

…」

オウカが扉の方を向くと、ミレットが室内を窺うように顔を出していた。

（また、一騒動あるな。……それにしても、腹へったな）

現実逃避を始めるオウカの予想したとおり、ギルド内に響くほどの悲鳴が聞こえた。

三十分後、イリアが騒ぐミレットを落ち着かせると同時に、オウカはこの少女について自分の予測を話した。

しばらく室内を沈黙が満たしていたが、ミレットがおずおずと確認する。

「つまり、この子はわたしたちが乗っていた式神だと？」

「俺はそう考えている。違ったら反対の頬も叩いてくれて構わない」「ううう、ごめんなさい」

オウカの左頬には真つ赤な手形がくつきりと浮かび上がっている。もちろん、実行したのはミレットだ。彼女は悲鳴を上げるや否や、真つ直ぐにオウカの元へ向かい、利き手である右手をフルスイングした。彼としては避けるのも簡単だったが、このような事態を招いてしまった自分への罰の意味を込めて敢てその張り手を受けた。

その後、オウカの話聞くうちにミレットの態度は恐縮したものへと変わっていったことは言うまでもない。

「それでオウカ、確証はあるの？」

「あるにはあるが、ここは本人に聞いた方が早いだろ」

今度はイリアの疑問を頭上にいる少女へと振る。

少女はそれまで口を閉ざしていたが、オウカの催促に鷹揚と答えた。

「そうじゃな、主の考えは概ね間違つてはおらんよ。ただ一つ訂正させてもうらうとすれば、我は式神だったが今はそうではない」

「というと、やはりその気配から感じたとおり」

「うむ、依り代となった二つの物質と主の生命力から新たに転生したわけじゃの」

「なるほどな。しかし、俺は今までそんな話聞いたことがないぞ」

「無論、我もじゃ」

残りの二人を置いて、お互いの推論を語りだすオウカと少女にミレットは慌てて声を上げた。

「ちよつと！ 全然話が読めないんだけど、それに依り代ってあの木のことでしょ？」

「仕方のない娘じゃのう。お主もあの場におつたであろうが」

「そ、それはそうだけど！ お姉ちゃんはおそこにいなかったんだし、初めから説明してよ！」

どうやらミレットは姉のイリアを盾に、詳しい説明を聞く作戦を立てたようである。妹を見るイリアの視線が突き刺さるのが分かるのか、冷や汗を浮かべている。

「ごめんなさいね。実際私はその場にいなかったから教えてもらつていいかしら？」

「主よ、よいか？」

「俺は構わない」

オウカが了承すると少女は話し出した。案外、面倒見がいいのかもしれない。

「娘よ、お主らはあの場で何と戦っていた？」

「何って、シンプルベアよ」

ミレットから出た強大な魔物の名前にイリアは大声を出しそうになった。それでも抑えたのは、自分以外が周知していることだと認

識したからだつた。

「ほう、我らはそのような名でお主らに呼ばれておるのか。

まあいい。簡潔に言おう、我はあの獣たちの女王じゃ」

「「えっ!?!」」

オウカと少女を除く二人が今度こそ声を上げる。それほどまでに信じられないことを少女は言ったのだ。

「まあ聞け。お主らは我らを倒すとイシを手に入れるであろう」

「イ、イシって、結晶のこと?」

「それじゃ。ここで話が戻るが、あの場で我を倒した主は我の力の宿木となる霊木を用意し、そこにイシを、我の意思を入れ、顕現させるため自分の生命力を分け与えた。

そのときにはまだ現在ののような自我はなかったが、茫洋とした意識の中でお主の声も聞いておる。娘よ、仲間を思う気持ちは良いことじゃ」

ミレットは目前にいる少女が、本当にあのときの式神なのだ実感する。

「でも、どうして今の姿になったの?」

「その疑問は当然よな。だが、それに関しては我にも主にも分からぬ。」

現に我も顕現を解かれた際、再び永い眠りにつくのだと思ったがそうもならなんだ。違和感を感じて目を開けるとこの姿になっておったというわけよ。

まあ、近くに主の気配を感じたから行ってみたら、このようなことになっておるしの。

ちなみに今の我は式神でも魔物でもなく、言うなれば魔人かのか。意味深な言葉がよほど気に入ったのか、満足げに少女は話を終えた。

フォウント姉妹は話の内容の重大さに気付いてどうしようか迷っていたが、少女の様子と今の言動から最悪の事態にはならないと判断し、この場で聞いたことを秘密にすると誓うのだった。

もつともこんな話、誰が聞いてもこちらの正気を疑うに違いない。「ちなみにお前の名前は何っていうんだ？」

マイペースさを取り戻したのか、オウカは少女に聞いた。

「我らに名などないよ。強いてあげるなら、先程娘が言っておったシンフルベアかのう。」

「そうか、なら俺が名付けてもいいか？」

「いいのか主よ？」

「ずっとお前とか言うよりはいいだろ。」

「……決めた。お前の名はシィーアだ」

「ほう、いい響きじゃな！」

シィーアと名付けられた少女は嬉しそうに微笑みながら、自分の名前を大切に心に刻む。

思わずもらい泣きをしてしまうミレットと、微笑ましそうに見つめるイリア。

「ところで、ミレットは何か用があったんじゃないのか？」

「え？ ……あ、そうだ！ オウカに報告があったんだよ！」

他人に涙を見られるのが恥ずかしいのか、ミレットはいつも以上に声を明るくして言った。

「さつき、仲間たちの治療が終わってね。医者が言うには、命に別状はないんだって！」

「それは本当に良かったな」

オウカが素直に答えると、ミレットは花が咲いたように微笑んで頷いた。

「それで、一瞬だけ意識が戻ったりリーダーから伝言を頼まれたんだけど……」

恥ずかしそうに俯く彼女に、オウカは疑問を浮かべる。

「どうしたの？ 黙ってては何も分からないわよ」

姉の後押しでミレットは踏ん切りがついたように一気に言った。

「自分たちの療養中はオウカに面倒を見てもらって！ それから、彼の戦い方は今後のわたしのためにもなるから、必ず一緒に行動す

るようにつて！

不束者ですが宜しくお願い致します！」

何だか別の意味で申し込まれた感じのする内容だったが、自分のペースを取り戻していたオウカは、

「別にいいんじゃないか」

「ホントに！？ やったー！！」

喜ぶミレットを見ながら、一時的な弟子みたいなものだと軽い気持ちで納得した。

それはそれでなんだか面白くないと思う人物が二人ほどいたことに、オウカ自身まったく気付いていなかった。

「主よ、我々はそろそろ行くでしょう。夜が近づいておるし、シィアは腹が空いたのだ」

オウカの頭からシィアは降りると、彼の手を引つ張るように扉へと向かおうとする。シィアの背中からオウカを何かから早く引き離したいといった意志を感じるが、腹がへったのはオウカも同じことだったので抵抗することなくソファアから立ち上がった。

「それもそうだな。またな、イリアにミレット」

突然の展開に目を白黒させる姉妹。

「え、オウカはどこか泊まる宿のあてはあるの？」

「特にないが、何とかなるだろ」

「確認なんです、その子と二人ですか？」

「まあ、こうしてここにいるのも俺のせいでもあるわけだし」

「ちよつと待ちなさい！ あなたはその子をその格好のまま行かせるつもりですか！？」

部屋から出て行くこうとするオウカたちにイリアの鋭い指摘が入る。シィアの現在の服装は、薄手の毛布一枚。かなり防御力の低い装備である。これにはオウカも固まった。

「なんじゃ、このふわふわしたのを返せというのか？ 肌触りがよくて気に入っておったが、それならば仕方がないのう」

上半身から足元まですっぽり包んだ毛布を外そうとするシィア

だったが、それは雷速で動いたオウカに阻まれる。

「シィーア、一つ人間の常識というものを教えてやる」

「なんじゃ？」

「俺らが着ている服というのはその身体を包むための物だが、実はもう一つの意味を持っている」

「それは、なんじゃ？」

オウカの静かに染み込む声に、シィーアは真剣な表情で先を促す。  
「それは、その人の権威だ」

フォウント姉妹はオウカが何を言っているか分からなかったが、常識を知らない彼女は驚愕の事実を知ったように自分の身体を見た。  
「そ、それではもしかやシィーアは……」

「ああ、もし人前で服を着ていなければ、そいつは女王でもなんでもない。ただの人だ」

シィーアはオウカの言葉を真に受けてしまったようで、愕然としながら自分を包む毛布をぎゅっと握り締める。

姉妹はオウカを半眼で眺めながらも、正しくはないが間違ってもいない答えに腹黒だという認識を強めた。

「すまんが、娘よ。これは返せなくなってしまった……」  
本当に申し訳なさそうに謝る彼女を見て、イリアは慌ててフォオリした。

「い、いいのよ、気にしないで。それよりも行く当てがないのなら、その私たちの、家に」

「今からわたしたちの家に来ない？ 泊める部屋も二人分なら余っているし」

次第に戻すぼみになっていく姉の言葉に被せる形でミレットは言った。

（男らしいわ！ ミレット！）

（男じゃないけど、褒め言葉として受け取っておくっ）

姉妹だけに通じるアイコンタクトでやり取りしているのを見て、オウカは少し勘違いしたようだった。



「あー、迷惑だろ？ 俺らのことは気にしないでい」

「迷惑だなんて思ってますん！」

さすが姉妹と言うべきか息もぴったりの反論で、オウカに全てを言い終わらせない迫力があつた。

「……それじゃ、世話になるかな。宜しく頼むよ」

「主よ、それは」

「シィーアちゃんも美味しい料理があるけど食べるわよね？」

「……」

「お姉ちゃんの作る料理、ホントに美味しいんだよ」

「……し、仕方ないのう。人間が作る料理というものを食べてみようかのう」

最大の難関であるシィーアを、料理という名の攻撃で攻め落とし二人は急いで準備をすることにした。

その後の展開は慌しかった。

まずはシィーアの着替えを用意することと、ミレットは自分のお古を候補に挙げ、徒歩十分の距離にフォウント邸が建っているとの説明すると止める間もなく部屋を飛び出した。

ミレットは開拓者のギフトを最大に使ったのか往復を五分で戻ってくる、その手にはシィーアの髪と瞳に合わせたのか黒色のワンピースとオウカが今着ている服と似た男性用の服。

彼女は「お父さんのだから、勘違いしないでよね！」と念を押すように言ってきた。オウカが空気を読んで自主的に退室し、着替える場所を探している間、シィーアがこちらに助けを呼ぶ声が聞こえた気がしたが、気のせいだ。

もう入っていいよ、というミレットの声を受け、オウカが入室するとそこには少し大きめのワンピースを見事に着こなしたシィーア

が立っていた。生地が余ったりし易い場所は太目の紐を使って補正代わりに行っているようだ。

「へ、変か？」

「いいんじゃないか？」

質問に質問で返す朴念仁。ミレットがその不屈き者の頭を叩いたのは無理もないことだった。

イリアはというと、その間に退勤を済ませるとすぐに自宅へ戻り、料理の準備をしていた。実のところ、家には現在、イリアとミレットの二人しかいない。別に両親と死別したわけではなく、お互いに仕事の関係で家を留守にしているのである。久しぶりに多めに作ることもあって気合いを入れると、イリアは顔を赤くして微笑んだ。

「何だか、これって、……さんみたい……」

包丁が刻むリズムで少し聞こえづらいところがあったが、彼女は幸せそうに料理を作っていた。

オウカたちがミレットの案内でフォウント邸に着くと、彼はまずその家、いや屋敷の広さに驚いた。ミレットに聞いてみると両親が仕事で成功しているお陰らしい。この都市には驚かされてばかりだと思いつつオウカが屋敷の中に入ると、いい匂いが漂っていた。

シィーアは我慢できないとばかりに匂いの元へ駆け出し、オウカとミレットは苦笑しながらそれを追いかける。

キッチンに入ると私服姿に着替えたイリアが料理をしており、その後ろでシィーアはそわそわしている。

イリアはオウカたちに気付いたようで「あ、お帰りなさい。もう少しで料理が出来上がるからもう少し待っててね」と優しく歓迎してくれた。

モカ色のワンピースの上に、ライトブラウンのカーディガンと落ち着いた服装になっており、その仕種と合わせてどこかしら若奥様を感じさせる。

「お姉ちゃんのあの姿を見てどう思った？」

「いいんじゃないか？」

再度、同じことを言った朴念仁に容赦なくミレットは頭を叩く。そして、それに追隨する一撃を放ったのはシーアであった。女同士何か固い結束が生まれたのか、二人は健闘を称えるように拳をこつんと重ねたのであった。

その後、夕食時にミレットも私服に着替えてきたのだが、何が起きたかは言わずもなだろう。

そして現在に至る

今、オウカは自分用に当てられた個室のベッドで横になっていた。部屋の明かりは消しており、窓から入る月の光が部屋を照らしていた。

就寝前にシーアが「主と一緒に寝る」という爆弾発言をしたのはさすがに驚いたが、そこはフオウント姉妹の頑張りで未遂に終わった。

(今日はホントに色々あったな……)

しみりと彼が思いに耽るのも無理はない。彼だけではなく、彼を取り巻く人々も同じように考えていた。

今日は驚きの連続だったが、明日は何があるのだろうか。彼らは思い思いに就寝するが、オウカは何かを忘れている気がして眠れないでいた。

(……………思い出した)

何だかんだで結局は自分も疲れていたのかもしれない。

オウカは頭をかいて呟いた。

「開拓者の登録、まだだった……。」

明日にでもイリアに登録してもらおうか」

思い出したことで気掛かりがなくなったのか、数秒で彼は深い眠りについた。

こうして、オウカの忙しい一日が幕を閉じたのである。

#### 第四話 忙しい一日の終わり（後書き）

今回もお読みいただき誠にありがとうございます。  
大体一週間に一回の投稿となっております。

今回は少し話が長いので少し文章などに雑なところがあるかもしれ  
ません。

それもこれも私の文章力のなさが原因です。  
ご意見・ご感想・誤字脱字がございましたら、お気軽にご指摘・ご  
指導下さい。

## 第五話 ギルド登録（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第五話 ギルド登録

『何故この子は、町に災厄を持ち込むんだ』

『気持ちの悪い子だ。ここには来ないでくれ』

『お前の母も父も普通の人間なのに、お前は……化物だ』

暗闇の中で一人の男を侮蔑する言葉は止むことがない。

老若男女ろうじやくなんにょ問わず、誰もが言葉の裏に彼の死を望んでいる。

生まれてからずっと言われ続けている言葉だけに男を縛る呪いとなつて、彼が生きている限り永遠に消えることのない重石おもしとなる。しばらくの間、永遠とも続く怨嗟の声を無言で聞いていたが、ふと新しく聞こえてきた声に男は怯えるように反応した。

この空間では寒いと感じることもないのに、身体が震えるのを止めない。

『皆さん、待ってください』

やめる。

『この子は人とは違うのだから、仕方ありません。皆さんで彼を人にしてあげましょう』

やめてくれ。

『さあ、一日一回その想いを込めて、彼から獣を追い出すのです』  
やめてください。

『その想いが強ければ強いほど、痛みを伴うかもしれませんが、彼の為なんです』

ごめんなさい。

『では、始めましょう』

ごめんなさい、もうやめてください。

『醜悪な魂をその肉体に宿した哀れな子、そして愛しい我が子  
オウカ。』

今日も苦しまずに眠れるといいですね』

ガバツ

「ハアハアハアツ！ ゲホツ……グ、ゲホツゲホツ………」  
上半身を勢いよく起こし、オウカは目覚めた。荒い呼吸とそれを抑えようとした反動で咳き込み、再度呼吸が乱れる。

この時季の朝はまだ肌寒いというのに、彼の全身は汗で濡れていた。

暫くしてようやく呼吸を整えることの出来たオウカは、小窓に腰掛ける少女に気付いた。

彼にしては珍しく、これだけ近くにいるのに気付くことが出来なかった。別に少女が気配を消していたというわけではない。それだけ、彼は冷静さを欠いていた。

「主よ、もう大丈夫か？」

白い簡素な寝巻き姿の少女は表情を動かさずに問いかけた。

「ああ、大丈夫だ。しかし、急に咳き込むとか風邪でもひいたかなはぐらかすようにオウカは自分の喉を撫でたが、少女は否定する。「そうではない。シィーアが言いたいことを主は理解しているはずじゃ」

小窓に腰掛ける少女　シィーアは漆黒の瞳でオウカを見つめる。優しい朝日が小窓から入り込み、雪のように白い肌をした華奢な身体と、それに反比例するような鴉の濡れ羽色の髪をしたシィーアを優しく包み込んでいた。



神々しくも、どこか儂く感じさせる一枚絵。

きつとシィーアは心に巢食う深い闇を聞いてくれるだろう。それがどれ程醜悪で、嫌悪を促すものだとしても、彼女は何も言わずに無条件で聞いてくれるだろう。

それでも、オウカは拒絶した。

「……もう大丈夫だ。心配するな」

「了解した」

あっさりと彼女はその意味を理解し、頷いた。

小窓から床へ降りて、シィーアはベッドに近づきオウカの目の前に立つと頬を膨らませた。

見た目で言うとシィーアは異国の美少女といった容姿をしている。その少女が頬を無表情で頬を膨らませているのは、何とか微笑ましいものがある。

「どうした？ さっきのことで不満があるのか？」

「先程のことはもうよい。主が話したくないことを無理に聞いても仕方がないじやろ。」

シィーアが怒っているのは別のことじゃ

別のことと言われ、オウカが思いつくのは昨日の出来事だ。もっとも昨日初めて会ったのだから、それ以外に思いつくものはないし、話題が変わるのは好ましいことだ。

「すまん、初めから箸は難易度が高かったな」

「違うわ、馬鹿者」

ポコッと頭を叩かれる。それにしてもこのシィーアという少女、こちらを主と呼んでいるが全然敬う気持ちを感じられない。何を基準に主と呼ぶのか今度じっくりと話し合う必要があるそうだ。

「すまん、分かん」

「……うのことじゃ」

「え？ 聞こえなかったからもう一度頼む」

非常に小さな声でシィーアは答えを提示したが、普段は闊達かつたつではきはきした物言いの彼女にしてはあまりにも小さな声にオウカは聞

き返した。

「ふ……」

「ふ？」

「服装のことじゃ！ 主よ、シィーアを謀<sup>たばか</sup>ったであらう！」

顔を真つ赤にして少女はこちらを少し涙目にこちらを睨んでいる。初めて見る表情にオウカは、シィーアも人として生きていることを改めて実感した。彼女は元々、オウカが魔物の結晶と神木を依り代に即席で顕現した式神であったが、何の因果か人間に転生した。そう昨日の話では聞いていたが、完全に信じる要素としては薄かったのだが、こつも感情の発露が顕著であれば信じざるを得ない。

「いや、俺は嘘を教えたつもりはなかったんだが」

「いいや、主はシィーアに嘘をついたのじゃ！ 就寝前に娘たちが湯浴みをすると言うて、我の目の前でその衣類を脱ぎだした際の驚愕と、あろつことかその後シィーアを……」

尻すぼみになったシィーアの説明にオウカは合点がいった。確かに服装について教えたときに、人前では裸になってはいけないといった話をしたような気がする。しかし、それにしては昨晚の夕食時に彼女はオウカをからかってか積極的に脱ごうとしていたような気がしないでもない。

「でも、シィーアは夕食のときも脱ごうとしてなかったか？」

「あ、あのときは主の初心<sup>こころ</sup>な姿が……っ、乙女の秘密じゃ！」

實<sup>げ</sup>に乙女とは複雑怪奇なものだとオウカは納得することにした。

「それよりも先程の話よ！ 娘たちに本当のことと、他にも世情のことを聞いたからよいものを、あのまま勘違いしたままではシィーアが恥をかいたであらう！」

正直な話、オウカと初めて会ったときの彼女の姿を考えると些細なものだと思っただが、そこは言わないほうがいいのだから。シィーアは乙女なのだ。

「でも、俺が言ったこと間違いでなかっただろ？」

「間違いではないことと、正しいことは大きな違いじゃっ。あのと

きのことを思い出すと今でも腸が煮えくり返りそうになる……」

「だったら昨日来ればよかったんじゃないのか？ シーアなら俺が起きていたこと分かっていただろ？」

「シーアもそう思ったんじゃないが、娘たちが夜に殿方の寝所に入ることを拒んだのよ。我としては主は既に認めている雄故にそうなくても構わんというのに」

シーアの雰囲気は落ち着くのは有難いことだが、昨日に続いてこの爆弾発言は非常に困る。きつと人になったばかりだから常識が足りないのだと、オウカは他人事のように己を落ち着かせた。

「ま、まあ、男の部屋に夜一人で来るのはあまりよくないな。そこら辺もミレットたちに聞いておいた方がいいだろう」

「そこら辺とは交尾のことか？」

「ぶツ！？」

今何と言った？ 聞き違いか？ きつと聞き違いだろうと、オウカが無理やり流そうとしているところをシーアは更に追撃する。ベッドに腰掛けているオウカの領域へ片ひざから侵入する彼女の瞳はうっとり艶を帯びていた。

「それなら知っておる。シーアも元は獣の女王よ。しかし、あそこには我よりも強い雄がおらんかったから誰も寄せ付けんかったがな。その点、主は合格じゃ！」

「じゃから、シーアも安心して初め」

「ちよつと待ちなさい！ シーア、あんた何言ってるのよ！」

バーンと、大きな音をたてて扉が開き、ミレットが慌しく部屋の中に入ってきた。顔が赤いことから、たぶん扉の前で二人の会話を盗み聞きしていたのだろう。

しかし、絶妙のタイミングである。それ自体、決して褒められたことではないが、オウカとしては助かったという思いが強かった。

「なんじゃ娘。シーアと主の時間を邪魔しようとは、魔物に蹴られてなんとやらじゃぞ？」

「何が邪魔しようよ！ あんたオウカに昨日のことを謝らせるっ

て言っただから部屋に入ること認めたのに、それが何でこんなことになってんのよっ!」

こいつが朝から部屋にいたのはそういうことか、とオウカは理解した。確かに昨日の夜、シィーアがオウカと一緒に寝ると言って一悶着があつたが、そのときは彼女もフオウント姉妹の説得で納得していたはずだつた。朝だからといって、オウカが寝ている部屋に無断で入ることは彼女の流儀に反することに違いない。つまり、姉妹のうち誰かがオウカの部屋に入ること許可したことになる。

シィーアは悠然とオウカに背中を預けて、ミレットに微笑む。これがミレットやイリアだつたらオウカも慌てただろうが、如何せん相手はシィーアである。幼い容姿では彼にとつてじゃれているとしか認識されなかつた。

「強い雄と一緒にいればこのようなことにもなるう。仕方がないことじゃ」

「なっ! この破廉恥お子様はっ!」

「は、破廉恥じゃと! お子様じゃと!? 言っておくがな、シィーアはお主たちよりもずつと年上じゃぞっ!」

「そうは全っ……………然、見えないわよ! もしそれがそうだとしても経験もないんじゃ、あんた<sup>みみどしま</sup>耳年増もいとこじゃない」

「言つてはならんことを言いおつたなっ! 娘っ、だつたらお主も耳年増じゃっ! お主からは生娘あちゃっ」

言葉の途中でシィーアは頭を痛そうに両手で押さえる。それを行ったのはもちろんオウカだ。彼は半眼でシィーアとミレットの二人を見ていた。

「…………お前ら、朝からうるさい」

「ごめんなさい…………」

「うう、申し訳ない…………」

先程までの姦しいやり取りはオウカの一言と一撃で、気まずい雰囲気になつた。その空気を払拭するようにオウカはミレットに確認した。

「ミレット、イリアはまだいるか？」

「え、お姉ちゃんは今もう仕事に行ってるけど、何か用事でもあった？」

仕事ということはギルドにはもう出社しているということか。昨日は有耶無耶になってしまい、結局のところ開拓者の登録は出来なかったし、予定通り今日は登録を済ませてしまおうとオウカは決めた。

「ああ、開拓者の登録がまだだったから、それでな」

「だったら朝食が終わったら行きましようよっ」

「そのつもりだ」

「それにわたしとダブルスの登録もしなきゃいけないし、そうと決まったら早く朝食にしましょ！」

そういえばそんなこと言ってたな、とオウカは今更ながら思い出したが、ミレットの表情が何だか嬉しそうであるため、敢てそれは言わなかった。

「……少し待つがよい。そのだぶるすとはなんじゃ？」

不思議そうにシーアは尋ねた。彼女が普通通りに話すのであまり気にしていなかったが、やはり元が魔物であるゆえ昨今の人の常識を知らないことも多いのだろう。

「ダブルスっていうのは、パーティになるほどの人数じゃないけど二人で協力して一つのことに取り組むことを言うのよ」

「それならば、だぶるすと称するのは間違いではないか」

「どういうこと？」

「シーアと主はだぶるすじゃからのう。お主が加わるとすれば、三人になる」

「え、あんたもしかしてわたしたちと一緒に行動するつもり？」

ミレットは驚いたようにきょとんとした顔のシーアに確認する。もっとも、ミレットが驚くのも無理はない。オウカのように気配に鋭敏な人間でなければ、シーアは見た目少女と言っている容姿をしているのだから心配するのも当然でもある。

しかし、その実は元シンフルベアの女王。今でも強靱な肉体と精神力、そしてオウカには劣るだろうが並みの開拓者では足元にも及ばぬ程の圧倒的な戦闘能力を有しているはずなのだ。

「まったく、娘の目は節穴か？ シーアほど主の相方に相応しい者は他においておるまいに」

「いや、いやいやいや。ちょっと待って、もし仮に行動するとしても、シーアはその、魔物と戦えるの？ それにどうやって戦うのよ？」

「無論じゃ。あの中では弱肉強食、強いものが生き、弱いものは死ぬ。それこそが日常よ。」

あと戦い方に関してじゃが、ここで見せてもよいが、多分この場は崩れるぞ。それでもよいのなら見せてやらんこともないかの？」

「ん……シーアはそう言ってるけど、オウカはどう思ってるの？」

自分では決められないとばかりにミレットはオウカへ判断を委ねた。彼女としてはシーアのことを心配して止めようとしたのだが、当の本人は自信满满といった風だったので現在保護者に近いオウカに意見を聞いてみようといったところだった。

オウカとしても答えは決まっていた。

「シーアは間違いなく強いから、足手まといにはならないさ。シーアも分かったな？ ミレットは俺らの仲間だ」

「了承した」

「そう、なら決まりね。よろしくね、シーア。ふふふ」

「よかるう。娘よ、こちらからも宜しく頼む。ふふふ」

オウカが見守る中、ミレットとシーアの二人は握手を交わし、お互いに仲間としての認識を確かめ合う。不敵な笑みを浮かべて見詰め合う二人を見ながらオウカは、この先にもきつと色々ありそうだが退屈しないということは間違いないだろう、と知らないうちに微笑んでいた。

その後は三人でイリアの作り置きしてくれた朝食をいただき、昼

前にはギルドに向かうことが出来た。

ギルドの待ち受け場所では昨日に比べて多くの開拓者が集まっていた。おそらく昨日のことから、封印区域の現状を確認するための依頼や門周辺の魔物の討伐といった依頼が更新されているのだろう。そんな中、オウカたちは昨日と同じ部屋にて待機していた。

理由は二つある。一つは現在開拓者の出入りが多いため、時間がかかってしまう登録関連は別室にて対応するようになっていたことと、もう一つは昨日のことでどこから情報が漏れてしまったための措置でもある。もっとも、開拓者や他のギルド職員たちも正確なことは知らない。だが、昨日の負傷したパーティーをオウカたちが搬送したことから、何かがあつてそれを知っているということだけでも重要なのだ。

情報は力でもある。それだけに彼らの知っている事実を皆知りたがったが、これには情報規制が働いた。ゴルディエス・ハーグラ率いるこの都市の警備隊から後日正式に発表するまで当事者たちへの無闇な干渉を禁ずるといふもので、この場の騒ぎを鎮火させたのであつた。しかしながら、好奇心は猫を殺すだけあつて、露骨には動かないながらもこそそこそこちらを窺う視線の中では落ち着けないのも確かだ。

ギルドに出勤していたイリアはそういった事態を考慮して、オウカたちが現れると同時にこの部屋へ案内したのだった。

しばらくの間、オウカたちがお茶などを飲んで時間を潰していると、扉を叩く音と共にイリアが戻ってきた。彼女の手には何枚かの書類と、頑丈な素材で作られた鈍色のトランクケースが握られている。た。

「ごめんなさいね。待たせたかしら」

イリアはそう言うとオウカたちの対面にあるソファに座り、彼らの間に置いてある長机に書類を並べた。

書類は三枚あり、開拓者の心得などが記載されている文面のものが二枚と、もう一枚が封印区域で行動する際のメンバー登録に関する書類のようだ。

「結果から言うわね。オウカ・ライゼス、あなたは本日からギルドの開拓者に登録されました。また同様にシィーアも開拓者として登録を受理されました」

付け加えて彼女は、「シィーアちゃんは身元が身元だし、あなたの妹として登録しておいたわ」と言った。つまりギルドでの登録名称でシィーアは、シィーア・ライゼスということになる。

何故、シィーアも開拓者として登録しているかというところ、今後封印区域に入る際、その方が都合がいいからである。もともと、その話をしたときのイリアの反応は今朝の一件を思い出させるものであったが、無事登録出来たようだ。

ここで補足となるが、この世界に於いて戸籍や住民票といった個人を証明する物はただの紙切れと同然に近い形で扱われている。

理由としてはやはり千年前に起きた大災害が原因であることは間違いない。あの時代に何処で誰が住んでいるのかということは無価値であり、それを証明するくらいなら他にやるべき事があまりに多くあった。そして死ぬ者も、行方不明になる者も数え切れないほど増えるために、戸籍や住民票を登録しても無意味に終わるとというのが拍車をかけた。

千年後の今日になっても、その風潮は変わることがない。何故なら、人々にとって門という柵で猛獣を捕らえても、その猛獣がいつ飛び出して襲い掛かってくるのか不明であり、都市以外に住む人間の数も定かではないために自然とそうなってしまうのだった。

## 閑話休題



オウカとしてはシィアが別段妹という立場になるのは問題なかったが、彼女はそうではなかったらしい。

「何故妹なのじゃ？ シィアの立場から妻という言葉がお主らの世界では一般的ではないのか？」

シィアとしてはいつもの調子で言ったのだろうが、この単語に敏感に反応したのは意外にも多くの男性ファンを持つイリアだった。もっとも彼女としてはそのファンたちに興味はなく、自分たちの生活に問題を起こさない限り干渉しようという気さえ無い。

簡潔に言えば、ビジネスライク。つまり、彼らファンたちはイリアに見向きもされていないのが現状であるが、彼らも彼らで諦めきれない思いがある。別にイリアは彼らが嫌いなわけでもない。ただ、本当に一度の生涯を捧げられる人と結びたいのだ。

結果、イリアは結婚という多くの女性が一度は夢見る晴れ舞台に近いようできて、無縁の遠い人生を送っているのであった。

だからこそ、イリアにはイリアの一家言がある。

「シィアちゃん、はっきり言いますが妻とはいくつもの苦難に立ち向かい、そして勝ち取った者が名乗っていい称号です。それを貴女は軽々しく言うのですから、余程の自信があるのですね？ 無いのであれば、貴女は妹という立場すら身に余るものです。実際のところ、シィアちゃんは妻になるための努力をしているのですか？」

朝早く起きて朝食の準備をし、夫が快適に仕事に出かけられるように着替えの用意や体調管理もしっかり把握する。そして、夫がいない間は家の掃除や洗濯を行い常に住み心地のいい、どうしても帰ってきたくなる環境にすることが必要最低限に求められる技巧です。

また、夫に尽くすだけが愛情ではありません。時に厳しく、お互いが研磨できる存在であることが重要なのです。特に「

「お姉ちゃん、話が脱線してるよっ」

イリアの怒涛の言葉攻めは、妹の強引な割り込みによって中断された。結婚や夫婦といった単語はイリアにとって鬼門であると、オウカは心のメモ帳に注意書きとして記入した。彼女は彼女で苦勞し

ているのであろう。

そんな舌鋒を振るったイリアはというと、今更ながら羞恥心が沸いたのか頬を赤くしていた。彼女は座を取り成すように、コホンと咳払いをして茫然としているシーアに告げた。

「ということ、シーアちゃんは妹なのです。分かりましたね？」  
「う、うむ、心得た」

イリアの論法に気圧されたのか、シーアは反論すら出来ず頷くしかなかった。オウカとしてはここまで話が広がるとは思わなかったが、とりあえずこの場は治まったようだ。

「すみません、話が逸れてしまいましたね。先程の続きですが、オウカとシーアちゃんの開拓者への登録は既に行っていますので、後は最後の登録を行うだけです」

イリアはそう言うのと脇に置いていたトランクケースから握り拳くらしいの小さな箱を二つ取り出した。見た目はただの箱にしか見えないうが、ここでそれを出すということは登録に必要な物であるに違いない。

イリアはオウカたちが見ている中、その箱の蓋を開いた。箱の中は円形の窪みがあり、その中心に針が設置された造りになっていた。一見すると、方位磁石に近い形状をしているが針の浮きが無いため、その用途は不明である。

「これはギルドに登録いただいた方々には必ず登録していただいていることなので心配はありませんよ。

ギルドでは生位磁石といって、開拓者の位置を把握するための装置となっています。正確な場所やその人の行動までは分かりませんが、登録された開拓者の位置でしたらこの装置で確認出来るようになっています」

要は開拓者という強力な力を得た人物が問題を起こせば、この生位磁石という装置で追跡することが出来ると思っていいたろうとオウカは理解したが、実際に悪い方面だけで捉える必要はない。

ギルドでの通常の用途としては、封印区域やそれ以外の場所で開

拓者が遭難などの事態に陥った場合、この装置を持った捜索者がナビ代わりに使用して要救助者を早期の段階で発見することが目的となっている。

唯一のデメリットは死体には反応しないことである。この装置は言葉の通り、生命力に反応するようになっていたため、肉体が生命活動を停止する、つまり開拓者が死亡した時点で生位磁石の針は動かなくなり、その機能を停止する。

これらの説明をイリアは慣れた様子で、滑らかに分かり易く話してくれた。

オウカとシィアの二人はイリアの説明を聞くと興味深げに箱を手にとつて眺めた。

「この箱が、そんな便利な機能を搭載しているとはね」

「確かに不思議じゃのう」

「で、これはどうやって登録するんだ？」

オウカの疑問を先読みしてか、イリアは既に登録用の機材である注射器をトランクから取り出していた。注射器は二本あり、オウカとシィアの分であることが分かる。

「これで採血させていただきまして、それをこの窪みに移します。採血させていただく量も少量の三ミリリットルになりますので問題は無いと思いますが、体調が優れなければ先に言っておいてくださいね」

イリアは丁寧に教えてくれているのだが、オウカの耳には届いていなかった。

（今、採血と言ったか……？）

オウカは以前、住んでいた村で初老の男性開拓者に出会ったことがある。そのときに彼からどうやってたら開拓者になれるのかなど色々と尋ねたことがあったが、そのときでさえ生位磁石や採血が必要といった話は出てこなかった。

冷静になれば情報秘匿のために老人が話せなかったということが理解できるのだが、今の彼にはそう考えることも出来ない状態にあ

った。

「……それは必須なのか？」

なるべく不自然でないように心掛けながら、オウカは質問した。本音を言うと、必須でないことを願った。

しかしながら、イリアの答えはオウカの希望を打ち砕くものであった。

「そうですね。基本、開拓者になるのは簡単ですが、その管理に関しては非常に難しいものとなっていますので、これは必須となっています」

「……分かった」

努めて平坦な声で了承を示したお陰か、イリアは特に気にするでもなく着々と準備を進めている。トランクケースにはこの登録に必要な一式が用意されているらしく、中から酒精綿の入った容器や駆血帯などを取り出して長机の上に広げている。

「では、オウカから採血をさせていただきますね。書類ではA型と記入されていましたが、間違いありませんね？」

「ああ」

必要最低限の返事でオウカが答えると、イリアは「では、右腕をまくってこちらに出してください」と指示した。

素直に応じるオウカだが、彼との付き合いが長い者がいたら疑問に思っただろう。何故、彼はこうも余裕がないのか、と。

だが、ここには昨日初めて会ったばかりのミレットとイリア、そしてシィアの三人しかいない。そのため、誰もオウカの変化に気付くものはいなかった。

イリアはオウカに採血をする手順としてアルコールの過敏反応の有無を確認した後、右腕を駆血帯で巻いて浮き上がった静脈を確認した。目的の血管が見つかったのか、イリアはその周囲を酒精綿で丁寧に拭いて、用意していた注射器の針を押し当てた。

「すみません、腕の力を抜いてもらっていいですか？」

オウカの腕に当てた針が通らないのである。困ったイリアはオウ

力にリラックスするようにお願いするが、一向に針は通らないままその役目を遂げる前に折れてしまった。

「あの、オウカ……」

「……すまない、緊張しているようだ」

平静を取り繕っていたオウカは、自分の身体が無意識の内に拒否反応を示していたことに今更ながら気付いた。

握り締めていた拳を開くと、掌が汗で湿っていた。

今の自分は冷静でないとイリアの表情を見て、やっと客観的に認めることが出来た。

「緊張、ですか。もしかして体調が優れませんか？ そうでしたら日を改めて登録することも出来ませんが」

「いや、少しだけ待ってくれないか？ そうすれば大丈夫だから」

「……分かりました。でも無理なら、声をかけてくださいね」

イリアの思いやる気持ちはオウカには優しく響き、少しだけ緊張が解れるのを感じた。

瞑目し、オウカは静かに呼吸する。そして、自分の中の心と対話する。

（イリアが俺の血を求めるのは、普通のことだ。ギルドの登録のために必要なだけで、他意はない。今朝見た夢も関係ない……）

まるで自分に言い聞かせるようにオウカは繰り返す。

瞳を閉じたオウカを見つめながら、イリアは動揺していた。

彼女にとってオウカとは理想の強者でもあった。その彼が、緊張していると言った。

あのシンフルベアの群れを圧倒的な力で殲滅した青年が、たかが注射針で怯えているとは信じたくもない事実だった。こんな情けない青年の姿を見たくも無かった。

それ故に、裏切られたという思いが心の底から沸いてくるのを感じる。激情が涙腺にも及んだのか、視界が滲んでゆく。

ミレットにしては本当に珍しい負の感情を制御できず、思わずオウカに掴みかかろうとしたところで、自分の腕を掴む小さな手に気付いた。

「娘よ、ただ聞くだけでよい」

ミレットだけに聞かせるためか、シィーアの声は小さく、そして儼かな響きをしていた。

「主は、オウカは複雑な過去を持っておる。それ故に、このような姿を見せることもある。実に情けなく、見ていて不愉快な姿である。ろっよ。」

しかし、それは彼の一面にしか過ぎぬ。我らと戦ったときの勇猛な姿もあれば、お主らと戯れる姿も然りじゃ」

「何であんたに、そんなことが言えるのよ」

心を荒れ狂う感情はまだ収まらないが、ミレットはシィーアに話の先を促した。

対するシィーアは微笑をすると、逆にミレットに問いを投げかけた。

「何故我に分からぬと決め付ける。我は誰ぞ？」

「……シィーアでしょ？」

「そう、我はシィーアと名付けられた魔人じゃ。元が魔物であれ、今は主に生命を受け、転生する機会をいただいた従者じゃ。」

生命を受けるとは、その与える者の記憶を受け取るのと同じ行為でもある。それ故に、我にも主の記憶が入っている。それは僅かなものだが、我には重いものよ。

娘よ、オウカ・ライゼスという者の歩いてきた道は一言で表せば、生き地獄よ。

お主は生まれてこのかた、回避できぬほどの不遇に見舞われたこととはあるのか？」

滔々と話すシィーアの言葉に、ミレットは口が利けなかった。

あの無類の力を振るった青年が、そのような過去を背負っているとは考えてもみなかった。

オウカがあれば、どんな苦難も逆境も軽く乗り越えられると高をくくり、ミレットの理想像を押し付けていただけなのかもしれない。だから、今のオウカを見て、勝手に裏切られたと思ってしまう。情けない話ではあるが、それが事実だ。

頭と心を支配していた激情はとうに失せていた。

「……わたしには人並み程度のことしかない。それも些細なものよ。それで、オウカの過去って一体どういうものだったの？」

冷静になったミレットはシーアに続きを求めたが、彼女は首を横に振った。

「ここまで言うたのは、我のお節介よ。真に迫る話をするのは本人にしか許されぬ行為じゃのう」

確かにその通りである。人から聞いた話では、その細かい感情は伝わってこない。

(拒絶されるかもしれないけど、今度聞いてみよう)

ミレットは瞑目するオウカを、見守るようにただ見つめるのであった。

深呼吸をしてゆっくりと目を開ける。

目の前にはオウカを案ずるイリアが、黙してそこにいた。

瞑目していたオウカにとってこの時間は必要だった。きっと彼女には聞きたいこともあっただろうが、それを黙って待っていてくれたのは素直に有難かった。

「ありがとう。もう大丈夫だから、続きを頼む」

「分かりました」

イリアは長机に置いてあったもう一本の注射器を手に取って、オウカの右腕の静脈に再び当てる。

一瞬、針は抵抗を覚えたがそれだけで、後はスツと静脈に入ってしまった。慎重にオウカから血液を抜き取るイリアの表情は真剣そのもの。

先程のことが嘘のように採血はあっさり完了した。その後の処置として、イリアは清潔なガーゼで針の刺さっている場所を押さえながら針を抜き、オウカにその場所を五分ほど押さえておくことを指示する。

当然の流れとして、イリアは使用した注射器と酒精綿は廃棄用ボックスに入れた。感染症などを防ぐためでもあったが、オウカには自分の血が他の事に使用されないことを確認して安堵した。

イリアはその間に採血した血液を生位磁石に移して、正常に稼働しているかを確認した。

生位磁石の表記欄には『オウカ・ライゼス／十八歳／男性／A型』と表示されている。そしてオウカの血で浮き上がった針は、しっかりと彼を射<sup>さ</sup>していた。

「無事、オウカの登録は終わりました。これであなたはギルドの正式な開拓者となります」

登録が終了したことを告げるイリアの声には安堵の色が浮かんでいた。

彼女には苦勞をかけたとおウカは感じながら、深く頭を下げた。

「手間を取らせてすまなかった」

「いいえ、手間だなんてそんなつ。これが私の仕事ですから気にしないでください」

慌ててオウカに頭を上げるようをお願いするイリアに、オウカは苦笑しながら頭を上げた。

（これは大きな借りができたかもしれないな……）

イリアは真面目であるため、見えないところで苦勞を負っている。それはオウカが初めて彼女に会ったときも実感したことだが、改めてイリアに何かあったとき、自分が隠している力を行使してでも助けになろうと決意した。

その後の登録は順調に進み、シィアの登録も速やかに終わった。現在人に近い肉体構造を持つシィアの血液は、オウカと同じくA型と判定され、彼の生位磁石と一緒にトランクケースに収納され



た。

「それでオウカ、昨日いただいた結晶のことなんですが」

イリアは開いたトランクケースを眺めて、困ったように話を切り出した。

不審に思いながらもオウカは相槌を打つ。

「ああ、アレか。報酬がどうのつて言ってたな」

「ええ、その報酬の件です。あのとき私は門の付近にいる低位の魔物の結晶だと思って安請け合いましたのですが、今朝出勤して確認したところ、担当の方からオウカの振込先口座を確認するようにと言伝をお願いされました」

彼女はトランクケースから一枚の書類とペンを取り出すと、それをオウカが見やすいように置いた。

内容は今後の報酬支払いに際しての事項がいくつか記載してあった。

「振込先口座って、そんな大げさな。俺は別に少なくとも構わないから、手渡しの方が好みなんだが」

オウカの返答にイリアはやっぱりこの人は、という如何にも呆れた様子で溜め息をついた。

そんなにシンプルベアという魔物の換金率は低いのだろうか。ミレットたちの話ではあの封印区域の中では強力な魔物という印象を受けていただけに、オウカは自分の財布が一段と軽くなるのを感じた。

それならば、開拓者の登録条件が魔物の結晶三個だからといって面倒臭がらずに拾えるだけ拾っとけばよかったと、先程の謙虚さも忘れて意気消沈した。

人間、生きるためには金はどうしても必要なのである。

「オウカのことだから、もしやと思いましたが案の定でしたね」

昨日、ミレットに詳細を聞きましたが、単独で十匹以上のシンプルベアを倒したそうですね」

オウカにしてみれば、特別に語る事もなかった部分の話なので、

それで？」と、気軽に聞き返す。

そんなオウカの態度に、イリアの頬が一瞬引き攣ったように見え  
たのは気のせいではないだろう。

「……実際に持ち込んでいただいた結晶三個を鑑定した結果、全て  
シンフルベアのものだと判定されました。報酬は一個あたり七千ダル  
になります。今回の報酬は依頼を介していないため、このような金  
額になりましたが宜しいですか？」

「……いや、あの、何かの間違いだろ？」

「いいえ、オウカのことだからこの報酬額に何か感じることもある  
かもしれませんが、依頼が入っていけば通常の価格相場は一個あた  
り一万ダルを下回ることはありません」

あまりにもイリアが淡々と言うものだから、思わずオウカは何か  
の冗談かと思ってしまうたが、そうでもないということは彼女の顔  
を見て分かった。

あの魔物一匹につき、七千ダルということは、今回の報酬は二万  
一千ダルということになる。思わぬ高額な報酬にオウカは眩暈を感  
じそうになった。

「主よ、どうしたのじゃ？」

「どうしたって、な。あまりの金額に少し眩暈が……」

オウカが戸惑うのも無理はない。一ダルを分かり易いよう日本円  
に換算すると、百円に相当する。では、二万一千ダルは二百十万円  
相当の金額ということになる。

またこの世界の金銭について説明しておく、一番小さい金額の  
一セート（十円相当の価値）は青銅を使った直径二センチメートル  
×厚さ二ミリメートルの薄い円状の形をしている。一ダルは一セー  
トと同じ形状をしているが、素材に白銅を用いたものとなっている。  
日本円と異なるのは五百円玉という概念がなく、十ダルで一セート  
を一回り大きくした黄銅貨が使われていることだ。

更に一万円相当の百ダルは形状も変化し、縦二センチメートル×  
横四センチメートル×厚み五ミリメートルの端を丸くした長方形の

銀貨を用いており、最高額の貨幣として十万円相当ともなる千ダ  
だと素材が金貨となる。

つまり今回の報酬金額を全て手渡しとなるとかなりの量と重さ  
なり、この大金に対して及び腰になっているオウカとしては精神衛  
生上宜しくない。

二百十万円相当の貨幣　それが不意に目の前に提示されたら誰  
もが冗談だと思つものである。特にオウカはまだ開拓者になつたば  
かりなのだから、魔物の討伐に関する金額の相場というものをま  
たくと言つていいほど知らなかつた。

それも依頼を介しての金額ならば一万ダル以上と言つただから、  
この業界がどれだけ危険な仕事を扱っているのか分かる。そして、  
命の危険を冒してまで手にする金額としては、これはこれで適正な  
のかも知れない。

もつとも、オウカの無比な力を持つてすれば短期間でこれ以上稼  
ぐことも可能である。現にイリアとミレットはこの金額自体を当然  
のものとして扱っている。

「オウカが驚くのも無理はないけど、これも仕事だから報酬はちや  
んと受け取ったほうがいいよ。開拓者になると色々と物入りになる  
わけだし」

「そうですね。ミレットの言う通り、これからはオウカも開拓者で  
す。『ギフト』の追加申請やホームと呼ばれる施設を借りる機会が  
あれば、これ以上の金額が必要となりますので、まずは受け取つて  
ください」

フオウント姉妹の後押しもあり、オウカは素直にこの報酬を受け  
取ることにした。オウカ個人の振込先口座を記入し終わると、イリ  
アに渡した。

「確かに受け取りました。では、最後に今後のこの都市での活動は  
オウカ、ミレット、そしてシーアちゃんの三人によるメンバー登  
録で宜しいですね？」

「それで頼む」

「うん、それでお願い」

「うむ、そうなるかのう」

三者三様の返事を受けたイリアは、長机に置いていた最初の用紙にそれぞれの名前の記入をお願いした。

周りはシィーアが字を書けるのか心配していたが、その心配は杞憂だったようで、彼女は達筆な文字で自分の名前を記入した。

一体どこからこのような知識を手に入れたかといえば、当然オウカに生命を吹き込まれたときである。彼の記憶を元にシィーアは独自の話し方と文字の読み書きを習得していた。

全ての書類をトランクケースに入れると、イリアはギルドの職員として最後に饒の言葉を彼らに送った。

「本日を以ってオウカ・ライゼスとシィーア・ライゼスは開拓者となりました。」

私から言えることは少ないですが、これだけは心に留めて置いてください。

開拓者の本分は『種』の破壊になり、非常に多くの危険を伴うこととなります。道半ばで死んでしまうこともあるかもしれません。

ですが、まずは生きてください。我々ギルドはあなた方開拓者を、使い捨ての駒のようにして扱う組織ではありません。いつの日か人々が平和に生きられるための支援を行う組織です。

もちろん、それには我々もそして開拓者も含まれています。

だから、生きて、少しでも多く生きて、その未来を叶えましょう」  
イリアの言葉には過剰に装飾した美辞麗句はなかった。多分、彼女の本心を言ってくれたのだろう。

それだけにオウカの深いところまでこの言葉は届いた。それはシィーアにとっても同様で、彼女も真剣な面持ちで受け止めている。

生きて、自分のやれる事を成そう　オウカは当初の目的と新しい目標を胸に抱いた。

彼らに伝えたいことを全て伝えたイリアはすっかりした様子で、ミレットに似た明るい笑顔で彼らを見送った。

「いってらっしゃい」

こうして、オウカ・ライゼスとシィーア・ライゼスは開拓者としての道を歩みだした。

## 第五話 ギルド登録（後書き）

前回のあとがきで一週間くらいの更新と書いてありましたが、早々に破ってしまい申し訳ございません。

いつも読んでいただいている皆様、そして初めて読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます。

誤字脱字やご意見・ご感想などございましたら、お気軽にご指導いただければと思います。

この世界の流通貨幣についてご指摘を受け、詳細を載せることにしました。修正点は後半部分の貨幣の説明についてになります。

## 第六話 商業都市ブルドオムスの過ごし方（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第六話 商業都市ブルドオムスの過ごし方

無事ギルドにて開拓者の登録を終えたオウカとシィアは、そのままミレットに先導されて商業都市ブルドオムスにあるショッピングモールを歩いていった。

当然、オウカとシィアの二人はこの都市に詳しくないのでただミレットの後ろをついていってただけなのだが、周りの景色を見るだけでも退屈しなかった。

商業都市というだけあって非常に多くの店が並び建っている。服飾・食料品・日用品・娯楽、そして武器や防具をメインに扱う専門店もあり、それぞれが独自の色を持っているようで個性的だ。

客層としてはこの都市に住む人もいるだろうが、大半が旅行による観光客か遠方から来ている人々で賑わっている。

オウカも初めてブルドオムスに来たときにはあまりの人の多さに茫然としたものだが、それはシィアも同じようだった。建ち並ぶ巨大な建物を見ては目を丸くし、無数に行き交う人々を見ては開いた口が塞がらない状態になっている。

そんなシィアを見ながらオウカが苦笑していると、先行していたミレットが立ち止まって振り返った。

「ここが目的の場所よっ」

ミレットの指差す方向をオウカが確認すると、そこには若者向けのポップな装飾をした女性用服飾の専門店が建っていた。

嫌な予感がオウカの脳裏を過ぎった。

「じゃあ、俺は近くで時間を潰してくるから、終わったら合流しよう」

足早に逃げようとするオウカの肩を、猛禽類にも似た鋭く強い力で掴む者がいた。

もちろん、ミレットである。彼女は微笑みながら、この場から立ち去ろうとするオウカに優しく話しかける。



「あら、オウカともあるうお方が敵前逃亡なんて無粋な真似、しないよね？」

「いや、俺が敵前逃亡だなんてそんなことするわけないだろ。ただ少し人に酔ったみたいで、休めるところを探そうとしてただけで……」

「なら、この中でも休める場所として椅子はあるから大丈夫よ。もつとも、店内で男一人じつと座っていてられるのらだけど」

「だったら、俺が入っても空気が悪くなるだけだし、それに意味ないだろ」

「そんなことないわよ。だって今日はシィアの服を選んだから」「なら尚更のこと俺はいいじゃないか」

「何言ってるの、オウカはシィアの保護者的立場なんですよ？」  
「だったら自分のお金で彼女に服を買ってあげなさいよ。」

「それともオウカはこれから先もずっと、彼女をああの服装のままにしとくわけ？」

「そう言われては反論の余地も無い。確かにオウカもシィアの今後の服装には困り果てていたし、先程のギルドで使いきれない程の報酬を貰ったことを考えると、ミレットの言う事に一理あるとさえ思えてくる。」

「イリアの話では三十分以内にオウカの口座に振り込む手配になっているそうで、もう既に入金されているはずだ。」

「現在のシィアの服装はミレットのお古であり、彼女の細い手足には不釣り合いな大きさの服を修繕して何とか見れるようにしている状態だ。」

「元々自分の服装には拘らないオウカであったが、シィアの服装に関して自分がアドバイス出来ることなど何も無いに等しい。要するにファッション雑誌など読んだ事がないのだから、無いものから知恵を絞る事など出来るはずもない。」

「オウカは隣にいるシィアに視線を移すと、自分の名前を呼ばれたことに気付いたのか、彼女は真剣な眼差しでこちらを見ていた。」

なんだかシィアの眼差しが、凄い期待で輝いて見えるのは気のせいだろうか。

「主がシィアの服を選んでくれるのか？」

「あ、いや、俺じゃなく、ミレットが」

「主は選んでくれんのか……？」

頼むからそんな捨てられた犬のように潤んだ瞳で見ないでくれ、とオウカは罪悪感に駆られて、助けを求めるようにミレットを見つめた。

仕方ないなあ、とばかりにミレットは溜め息をつくとしィアの頭を優しく撫でた。

「大丈夫よ、シィア。オウカもちゃんと選んでくれるから心配しないで。女性の服だから基本はわたしがアドバイスするけど、選ぶのはオウカだから」

ミレットのフォローに思わず、「ちよつと待て」と言いそうになったオウカだったが、シィアの喜ぶ姿を見て、それでもいいかと思ひ直した。

ここ最近、シィアの感情は豊かになってきている。人と触れ合うことで、彼女の心が育っている証拠だろう。

出会った頃はその非常識な行動の連続に、本当に彼女は人間と同じ生活が出来るのか少し心配していたが、この様子だと問題ないようである。

これはオウカにとっても嬉しい変化だが、そうなってくると後々困るのがブルドオムスの『種』を破壊した後である。シィアはきつと付いて来る。そのときに彼女とどう接すればいいか分からないのだ。

元々この都市に来る前のオウカは、自分一人でそれを成そうとしていた。それが可能であることは、自分の身体を流れる血が証明してくれるはずだ。

もちろん『種』を破壊することは、オウカの力を以ってしても熾烈を極めることになるだろう。途中で死亡する可能性はある。だが、

それでもいいと思っていた。

自分の血を絶やす事はオウカにとって、数ある目的の中の一つでもあるのだから。そんな自分が今はブルドオムス限定とはいえ、シィアとミレットの二人と仲間になり、イリアという友人も出来た。滑稽な話に聞こえるかもしれないが、オウカ自身この仲間たちに助けられている。それは武力的な助けではなく、オウカ・ライゼス個人として扱ってくれている関係にだった。

彼女たちはオウカの血の秘密をまだ知らないから、こうして普通に接してくれているだけなのかもしれないが、それでもオウカには有難かった。

だからこそ、ブルドオムスの『種』を破壊した後について考えってしまう。シィアはオウカが望めばずっとこの関係を維持してくれるだろうが、それは個人の感情や行動を縛る行為でもある。

答えの出ない思想の袋小路にオウカが陥っていると、パアンと爽やかな音と衝撃が頭に響いた。

「何、ボーっとしてんの。さっさと中に入るわよ」

手をひらひらさせながら、ミレットはオウカの顔を覗き込んでいた。オウカの頭を叩いた犯人は悪びれることもなく、いつも通りの調子でそこにいた。

下手の考え休むに似たり、という大昔に使われていた言葉をオウカは思い出して笑ってしまう。

急に目の前で笑い出したオウカをミレットは気味悪いものでも見るように、後退りながらシィアの陰かげに隠れた。盾にされた彼女といえはそれを迷惑そうにしながらも、笑い続けるオウカを不思議そうに眺めている。

「ちょ、ちよつとどこが悪いところにも当たった？」

「いや、すまない。ちよつと、ツボに嵌ってな」

まだ少し笑いの抜けきらないオウカをミレットとシィアの二人は処置なしとして、「わたしたち先に中入ってるから」と言うトスタスタと歩いて行ってしまった。

オウカはそんな彼女たちを追うのだが、未だ笑いは治まらないらしく、店内ではミレットたちがフォローするまで特殊な変質者として見られるのであった。

ギルドの数ある部屋の内、唯一窓の無い一室でその会話は行われていた。

「はい、先程我らの教主様がブルドオムスにて、開拓者の登録を完了されました」

部屋の明かりを消しているのか、室内は闇に包まれていた。その中で枯れ木のように痩せた男は通信機を使って誰かと話しており、その表情は恍惚で歪んだ顔をしている。

見る者が見れば、まるで蛇のようだと思っただろう。内面から溢れるその嗜虐性と狡猾さは、いくら高級なスーツを身に纏っても隠すことが出来ないでいる。

もつとも彼が本性を表に出しているのは、ここが彼専用の部屋だからでもある。普段はその本性を蛇のように隠し、自分にとって最上級の餌を吟味しているため、この都市　ブルドオムスで気付く者はいない。

男がこの立場に昇り上がったのも、自分の道を歩く鈍重な獲物を喰らってきたからでもあった。時に罠に嵌め、汚職を被せ、暴力と言う名の甘美な手段で彼はこの道を歩いてきた。

それもたった三年の月日でこの都市のギルドを思うがままに出来る立場に彼はいる。それ程までに彼は優秀であり、人の弱みを見抜く才能とそれを心ゆくまで堪能しながら利用する才能に恵まれていた。

だが、その所業に気付く者はいない。いや、言葉を変えよう。男

の行為に気付く者は全ていなくなつた。

そんな彼も崇拜する人物がいる。それこそが、今男が話している相手だつた。

「聖母様、私は罪深い、目の腐敗した愚者でございます。初めて教主様のお姿を拝謁致しましたのに、その威光に気付けなかつたのでございます。」

聖母様が私めの腐つた眼を抉り抜けと仰られるのであれば、今ここでそれを成す所存でございます。」

通信機の先にいる聖母と呼ばれる者に、男は深々と頭を下げた。

彼はいつでも両目を抉り取れるように瞼に爪をたてて、その言葉を待つ。

しかし男の行為は未遂に終わる。聖母から彼へ向けて、二三の言葉が紡がれる。

その言葉に男は涙を流しながら感謝する。

なんと寛大なお方なのだと、あまりの感動に男は立っている事が出来ず、赤いカーペットで設えた床に膝から崩れ落ちる。

「あ、ありがとうございますありがとうございますありがとうございます。我らの聖母様、貴女様の寛大なお心に触れる事が出来、私は歡喜の極みにございます。」

通信機に向けて、ズルズルと床を這いずる男の姿はまさに大蛇のようであつた。

再び男へ向けて聖母の言葉が紡がれ、男の顔は歡喜から狂喜へと次第に変貌する。口は端まで裂けるように口角を広げ、それとは反比例するように瞳孔は小さく収縮した。

それでも男は通信機越しとはいえ、崇拜する聖母の御前であるために慇懃にも似た口調で確認する。

「よ、宜しいので御座いますか？ わ、私のような者が教主様の血を享受させて頂いても……。」

男の質問に対する答えは是。教主の血肉は万物の共有すべき財産であり力であると、聖母は告げた。

（これ程の報いがあるだろうか。いや、私には過ぎたる褒美であるが、これまでの実績と私個人を評価して頂いたからこそ聖母様も仰つて下さったのだ）

男は恭しく、聖母に感謝の意を述べた。延々と終わるの事のない美辞麗句を、彼の口は滑らかに吐き出し続ける。

やがて聖母の従者が「後に控えた聖事が有るゆえ、これにて拝謁の儀を終了とさせていただきます」と言うまで、男の賛辞は止む事が無かった。

一方的に終了された通信機の無通音に、男は「あのような無粋な輩が何故、あのお方の傍にいるッ」と憤慨を隠さずに床を強打する。毛足の長いカーペットの衝撃吸収性を以ってしても、受け止めきる事の出来ない衝撃は軽く建物を揺らす程となった。

通常の間人とは思えない異常な腕力が、男もある種のギフトを保有していることを思わせる。『肉体強化』か『強力』の類のギフトでなければ、このようなことを細身の身体で起こせるはずがない。

その打撃で冷静さを取り戻したのか、男は立ち上がると胸元に入れた小さな箱　生位磁石を抜き出した。

この中に教主様の血が入っていると思うと、頭の天辺から足のつま先まで甘い痺れに酔いそうになる。これを私が自由にしているのだ、と思うと今まで築き上げてきた功績に対する評価や賞賛など瑣末なものにさえ思えてくる。

男は慎重に、繊細なものを扱うように生位磁石を顔の付近に寄せる。カパアと開いた口から爬虫類を思わせる舌が伸びて、箱をまるで飴でも溶かすように嘗め回す。

「ああ、この中に、力が、教主様の血が……。でも、今はダメだ。今は、まだお預けだ……。しかし、この抗い難く毒々しいまでの誘惑が堪らない」

男の持てる精神力の全てを以って箱を遠ざけると、元あった胸ポケットに戻した。大量に分泌された唾液で箱は濡れていたが、その濡れた感触が彼に教主様の血は自分の傍にあると実感させる。不快

に感じるどころか、更に男を恍惚とさせていた。

「ああ、近い内にこの血を享受出来ると思うと、本当に楽しみです  
ねえ……ふ、ふふ」

男のくぐもった笑いが、真つ暗な室内で陰湿に響いていた。

『フリーフィールド』と呼ばれる、ブルドオムスの中でも広大な面積を誇る施設にオウカはいた。横長に並べられた椅子に一人で座り、静かにその先にあるものを待っていた。

一緒にいた女性陣二人は、この施設を利用するために受付で記入などを行っている。

「おい、俺から言った事だが……本当にあいつと戦うのか？」

隣に立つ大男を見ずに、オウカは「別にこれが初めてじゃない」と簡素に述べた。

「まあ、お前さんがそれでいいならいいが……。つたく、こんな客は初めてだぜ」

禿頭とくとうを撫でながら、大男は呆れたように受付をしているオウカの対戦相手を眺めた。

仲間には上下関係は通常存在しないが、組織の中でそれは存在する。開拓者とは『ごっこ遊び』ではないために、こうした力の優劣を示す機会が必ずやってくる。

結果として、オウカと対戦相手が戦うことになったのだが、その原因は彼の横に立っている大男にもある。

登録の承認までまだ時間がかかりそうだ。何故こうなったのか、オウカはこれまでの経緯を思い返した。

女性服専門店に入ったミレットは水を得た魚のように嬉々として、シィーアに似合いそうな服を片っ端から着せていった。

シィーアも初めは戸惑いがあったようだが、そこはやはり女の子。彼女も最終的には自分から服を選び、それをオウカにファッションショーと称して見せ付けていた。特に服のどこが良かったか、もう少しこうしたら良いといったアドバイスまで無知な彼に要求してきたのだから、肉体よりも精神的に甚大な被害を受けたのであった。一通り試着を終えると、シィーアは気に入ったものを更に取りストックアップして合計九枚の私服と下着を購入した。勿論、全てオウカの支払いである。

また何を思ったのか、ミレットも自分用の新しい服を選んでオウカに「これお気に入りブランドなんだ。だからお願いっ」と、彼女自身も開拓者として稼いでいるであろうに「買って攻撃」をしてくる始末。僅かな抵抗の末、気付くと彼は支払いを済ませていた。

これでこの難所から脱出出来ると喜んでいたオウカに、更なる追撃がかかる。

ミレットが「どうせだから、武器とか防具も揃えちゃいましょう」と、意気揚々と言い出したのだ。オウカとしては自分やシィーアには要らないだろ、と思っていたのだが、テンションの上がったシィーアは興味を示してしまった。当然、彼の意見は多数決で却下されることとなる。

それならこの大量の荷物は邪魔ということ、受付の女性店員に郵送の手続きを依頼して三人は店を出たのであった。それを見送る店員の顔は非常に明るいもので「またお越し下さいませーっ」と、深々と頭を下げるのであった。

ここでの支払いは一千二百ドル程になる。オウカなら悠々と二ヶ月は過ごせる金額が、一瞬で消え去るのは信じ難いものであった。

相場として、一月に一般人が消費する金額は八百ドル前後だとなっている。食費だけなら一月、二百ドルもあれば十分だ。

食べ物や日用品に関する金額は千年前に比べると比較的低下して



きたが、反対に伸びているのが武器や防具などの開拓者の必需品となっている。それらは価格もピンきりで、磨耗しやすい物は安価で、磨耗の少ない頑丈な物は特化鉱物やギフト保持者の『抽出』と『形成』の使用を必要とするために、並みの開拓者では手が出せないものとなっていた。

ちなみにシィーアはお気に入りの中から一着を選び、既に着替えている。前回と同じく黒を基調としたもので、ワンピースの上に薄手ながらも頑丈な生地のカープコートを羽織っていた。オウカが一番初めに「よく似合ってるよ」と言った服装であり、シィーアも満足しているようだ。

オウカは当初、今回の報酬で貰った二万一千ドルは多くて使い切るのに苦労しそうだ、と思っていたのだが、それは間違いだったようだ。もしかしたらこの金額だけでは足りず、自分がコツコツ溜めてきた貯金も使わざるを得ない事態に陥る可能性が浮上してきたことに、オウカの顔色は青ざめていくのであった。

今度もミレットの先導する形で武器と防具を扱う専門店へと向かう。

着いた場所は先程の店からそれほど離れていない距離に立地しており、人の行き来も多かった。外から見た限りでは店舗の大きさも変わらない。違いといえば、先程の店が女性客をメインとした集客目的の外観に対して、この店は至ってシンプルに『アタック&ガード』の看板を掲げているだけであった。何とも言えないネーミングセンスである。

ミレットがその店の扉を開けて「おやっさんいるー？」と入っていく、オウカとシィーアの二人も彼女の後を追うように入店した。

入店して早々オウカの視線に飛び込んだのは、捻り鉢巻を毛一本生えていない禿頭に巻いた大男であった。巨漢という言葉が相応しく、その身長は優に二五〇にも及び、この店の制服であろう社名ロゴを印字した黄色地のTシャツを、パツパツに盛り上げた筋肉がこれでもかと自己主張している。年齢は四十代前半に見えるが、肉体

的な衰えを感じさせない立ち姿をしていた。

ミレットはそんな大男に怯えることもなく、気軽に声をかけていた。多分、彼が『おやっさん』なのだろう。しかし、こうして見るとまるで大人と小さな子供のように見える。

暫くすると大男は、出入り口で立ち尽くすオウカたちの方へ床を揺らしながら近づいてきた。別段走っているわけでもないのに床が揺れるなど、その体重も相当なもので、彼が放つ体重の乗った攻撃は中級サイズの魔物と張り合えるはずだとオウカは判断した。

「お前さんがオウカで、そっちのちっこいのがシィーアか。武器と防具を探してんだってな」

見た目に反して大男は愛想は無いものの、しっかりと二人の面倒を見る気のような。シィーアは『ちっこいの』呼ばわりされたことに文句を言いたそうだったが、オウカが彼女の頭をポンポンと叩くので未遂に終わった。

「そうだが、あんたは？」

「バージェンズ・オオギ、この店の店長だ。ミレからお前さんたちの装備を揃えるように頼まれたんでな、こうして挨拶しに来たってわけだ。まあ、おやっさんとも呼ぶがいいさ」

バージェンズ・オオギことおやっさんは、照明の光を反射する頭頂部を掻きながら無愛想に自己紹介すると、近くにあるテーブルと椅子を指差して「商品説明ならあっちでやるから適当に座んな」と言うと、自分用に拵えたのか通常の椅子よりも二回り程大きい椅子に腰掛けた。

実に個性的であるが取り扱っている商品に関しては問題ないだろう。何しろミレットが紹介する店である。彼女らのパーティが実力で伸上のしがっているのは確かだろうが、それはサポートする側の力もあってというのが実態であり、一般的なものだ。

オウカとシィーア、そしてミレットの三人はそれぞれ椅子に腰掛けると、おやっさんが取り出した書類の束に目をやった。

ファンタジーに有りがちな武器や防具を店に並べる営業スタイル

は、実のところ廃れてきている。昔はそれが普通だったが、現状はおやつさんがオウカたちに渡したカタログなどで注文、またはカスタマイズを依頼するのが現状となっている。それは高価な武器や防具を盗む輩が存在するためであり、予防策として取り上げられている新スタイルだった。

もつとも、この店を襲撃するような馬鹿がいれば、結果は見えたも同然である。

では、実際に命を預けられる装備をカタログだけで決められるかというと、普通に考えてまず有り得ないという問題が発生するのだが、そこはきちんと考慮されたシステムを用意していた。

それは、服装と同じく試着、または握り心地の確認などである。

武器や防具を扱う店には必ずと言っていいほど、店内に別室が設けられており、その空間は幅四メートル×奥行六メートル×高さ四メートルと広く作られている。また壁は対衝撃・斬撃用特殊炭素加工された繊維を幾重にも重ねる事で出来ているため、不埒なことを行おうものなら出れないように監禁されたところで、警備隊に引き渡される手筈となっている。

オウカとしては特に購入の予定はなかったが、それでもシィーアの装備を整えるためとミレットに言われてはもう抗う術もない。

「シィーア、何か欲しい物ってあるか？」

「分からのう。シィーアにとつてはこういった衣類を着るのも初めてじゃし、主に任せるのじゃ」

そりゃそうだよな、とオウカは溜め息をついてカタログのページをペラペラと開く。

そして先程の買い物で私服などは買ったが、肝心の封印区域内での移動に必要な安全靴などはまだ購入していないことを思い出した。シューズのページを探しながら、オウカはシィーアに尋ねる。

「ところでシィーアは速さを活かした戦闘が主体だよな？」

「そうじゃな、この身体でも力は変わらぬはずじゃが、それを活かした方が良さそうよのう」

自分の身体をぺたぺたと触りながら、シィーアは自己判断した。その評価にオウカは特段驚く様子もなく、自己を魔人と称するくらいならそれくらいは規格外でないと困るとさえ思っていた。

繰り返すが彼女は現在、人の形を模<sup>かたど</sup>っているがその実、人ではなく元魔物である。見た目とは裏腹に強大な力を内包しており、それは軽く人間を凌駕する存在だ。

だからこそ、その幼い見た目に騙されて油断していると、痛い目を見るのは必然でもある。

オウカは目的のページの中から、一番安い滑り止めの付いた安全靴を選んで注文しようとした。これはオウカが今までの旅で身に付いた節約術だったが、どうにも今回は相手が悪かったようだ。

注文しようとオウカが指差した瞬間に、無言の重圧が押し掛かってくる。

「おい……。俺の店でこんなチンケな商品を買らせようつてのか？」  
「ホント、オウカって買い物センス、まったく言っていないほどにゼロね」

酷い言われようであるがこの場合、おやつさんとミレットの意見が正しかった。オウカは自分を比較対照として選んでしまったのである。彼を擁護するのであれば、強靱な肉体を誇るオウカの身体能力に通常の装備では損耗も激しく、そして邪魔なだけであった。それ故に、装備品を一番安い物で揃える癖が付いてしまったのである。さすがにこれはオウカに任せられないと思ったのか、おやつさんは面倒臭そうにカタログを手にとってミレットに確認した。

「おい、ミレ。この坊主は金持ってんだらうな？」  
「たんまりとっ」

何故にお前が答えるんだと突っ込みを入れたかったが、オウカは戦力外通告をされた身である。ただ大人しく、おやつさんが選ぶのを待つしかなかった。

ただ一人を除いては。

「少しよいかの」

シィーアはどこで覚えたのか、礼儀正しく拳手をして発言の許可を求めた。

「なんだ、ちっこいの？」

再度侮辱とも言える言葉でシィーアのコめかみに青筋が浮き上がったが、彼女は何とか堪えた。

ここで問題を起こしても、主であるオウカに迷惑がかかると判断したのだ。

「……ふう、シィーアは人間が身に着けておるあの邪魔な物はいらん。必要なのは、私の動きを阻害せん物じゃ。現に主もそうであるう？」

「……何言ってるんだ、こいつは。」

おい、ミレ。こいつらは開拓者を舐めてんのか？ そうだったんなら、俺はもう金輪際この馬鹿共に売る商品はねえ。もちろん、紹介したお前らにもだ」

一気に空気の張り詰めた緊張感が走る。おやつさんが言ってるのは本気だと、ミレットは冷や汗を流しながらオウカたちに注意した。「ちょ、ちょっとシィーアっ！ 今すぐに謝りなよ、さっきのは全ての開拓者に対する侮蔑と同じ行為だよ。」

それにオウカも黙ってないで、シィーアに謝るように言ってるよ」

「何を言ってるおるのじゃ、お主は？ シィーアはその禿げ頭はに要望を言っただけじゃぞ。何をそんなに焦ってる」

「……それは、不味いって」

青褪めるミレットは、恐る恐るおやつさんの方を見て、そして後悔した。彼女は心の中で、「終わった。何もかもが終わった」と絶望していた。

長年通い詰めて信頼関係を築いたこの店に、もう二度と出入りは出来ない。この店では禁句とされていることを、シィーアは言ってしまったのだ。パーティの仲間たちには何と謝罪しようかと、ミレットは一人これからのことを考えだすと、酷く憂鬱な気分になってくる。

ミレットにとって頼む綱はオウカだけなのだが、彼は何を考えているのやら、無言で事の成り行きを見守っている。彼女が再度、シィアに謝罪するようお願いしようとしたところで、おやつさんに動きがあった。

ゆらつと椅子から立ち上がったおやつさんの全身は怒りで赤く染まっております、見るもの全てに恐怖を与える表情をしていた。彼は太い人差し指をシィアに向けると、無理やり平坦にした声で忠告した。元々店員として客に対する敬意が少なかっただけに、今は微塵も感じられない。

「おい、ちつこいの。俺は『禿げ』じゃねえ。これは剃ってんだ」「なんじゃ、禿げ。シィアも『ちつこい』のという名ではない」

両者とも譲れないものを主張し合うが、一向に譲る気も無い。竜虎並び立つというよりは、鬼魔並び立つと表現した方がしっくりとくる。勿論鬼がおやつさんで、魔がシィアだ。彼女はいつの間にか椅子の上に立って、その身長差を埋めようとしていたが、土台無理な話であった。

一触即発の空気の中、ミレットはひるあんとん昼行灯を決め込むオウカに小さな声で詰問した。

「ねえ、オウカはシィアの保護者でしょ。何でこんな事になつてんのに注意しないのよ」

悪い事をしたら注意するのが大人の、保護者の責任でもある。それを放棄しているかに見えるオウカに、ミレットは失望に近い感情を覚えていた。

「別に注意するのは、シィアだけじゃないだろ。オオギっておっさんも正直正しいって言えないしな。だから、こうしていがみ合うんだよ。」

お互いに理解出来ないなら、方法は二つしかない。己が正しいと認めさせるか、無視するか。それを見極めてからでも遅くないと思うぞ」

オウカは客観的な感想をミレットに伝えると、再び無言で睨み合

う二人を注視した。

確かにオウカの言う事は一理ある。だけどそれだけで納得出来ないのが実情なのだが、自分ではこの事態を治めることが出来ないため、オウカに倣って今は事の成り行きを見守ることに専念した。

まず先制を切ったのはシィーアからであった。彼女は薄い胸を反らすようにして、自分の考えを提示する。

「そもそも、何故人間はあのように邪魔で無骨で無駄な物を着飾るのじゃ。あれでは本来の動きを阻害するだけではないか」

一方、おやつさんは肩を軽く竦めると鼻で笑い、シィーアの未熟な意見を叩き伏せにくる。

「おいおい、お前の頭はお花畑なのか？ 徒手空拳、防具なしで何が出来るとんだ。」

剣は敵を斬り、刺し貫くのに有効な武器だ。槍は薙ぎ払い、遠距離から刺し殺すことに長けている。槌も同じで、その重量を乗せた一撃は敵を叩き潰し、生半可な防御を紙くずみたいに弾き飛ばす。

反対に盾は敵の攻撃を受け止め、弾き、逸らすことで反撃への繋がりとなる。鎧は重いが、その重さと頑強さが敵とのぶつかり合いで体勢を崩さずに済むこともある。兜も頭上の攻撃に対して利があり、不意の事態で装備者の命を守ってくれる。

全ての装備が、無駄なんて言葉で一括りにされる謂れは絶対にねえんだよ」

おやつさんもこの店を経営するだけあって、装備に対する愛着や揺らぐ事の無い信念を持っていることが今の話で分かる。

でなければ、商業都市で店を開業しようなど無謀の沙汰である。賑わう店があれば、衰退して経営が成り立たなくなる店も存在する。だからこそこの都市で生き残るためには、顧客のニーズに応え、ときには新しい流行を生み出す必要がある。それが出来ない者には、現実的に廃業という道しか残っていない。

そうした経緯と発展の果てに、商業都市ブルドームはここまで大きな都市に成長することが出来たのだ。

オウカやシィーアは知らないが、この店 『アタック&ガード』は開拓者の中でも非常に信頼のある店だが、一見は入店することすら許されない場所でもある。そのため開拓者になつたばかりのビギナーたちは、知り合つた古参のパーティなどに紹介状や仲介をしてもらつてやつと入店することが許されるのだ。

バージェンズ・オオギが築き上げた信頼とは、それだけ苦難の連続を乗り越えたことを意味する。知らなかったとはいえ、シィーアがそれだけ彼のプライドを深く傷つける物言いをしたのだと分かる。だからこそ、おやつさんの次の行動は当然であつた。

「装備がどれだけ戦いに挑む者の助けになるのか分からん奴に、俺の商品を売りたくもない。さつさと消える」

人は自分が大切にしている物を傷付けられて、大人しくしているほど愚鈍ではない。それがプライドであれば、ご尤もである。よく『プライドなんて犬の餌にしまえ』などの言葉を聴くが、あれは大半が信念を持つていない者の慰みである。しかしながらそういう人間に限つて、『生き延びる』ことに長けた者が多いのも確かである。狡猾な者はそれらを伏せて、虎視眈々と相手の喉元を喰い破る起死回生を狙っているのだが、それを万人に求めるのは難しい。そのため、こつこつた無聊を慰める表現が生まれるのである。

これ以上会話もしたくないというのが、おやつさんの全身から感じられる。

ここまでかと、オウカはこの会話の分水嶺を感じた。どれ程無様であろうとも許して貰えるよう謝罪して、今まで通りミレットたちだけでも続けて通えるようにと思案していたのだが、シィーアはまだ戦の幕を閉じてはいなかった。

「申し訳ない。そなたがそれ程までに武具や防具に心血を注いでおるとは知らなかった。これは我の過ちである。謝罪を表すためにも、一つ我の申し出を聞いてもらえぬであろうか？」

深々と頭を下げるシィーアにおやつさんは勿論のこと、ミレットも啞然としていた。これまで高慢な態度を取ってきた彼女が自分の



非を認め、それを許して欲しいと謝罪しているのだ。怒り心頭の状態であっても、彼女の話聞いてみようという気にはなる。それが美少女なら尚更だ。

「あ……その、なんだ。言ってみろ」

癖なのか禿頭を掻きながら、おやつさんは先を促した。

「感謝する。申し出というのは他でもない。我らの武力をそなたの眼で見極めてもらいたいんじゃない」

「……何でわざわざ、お前らのお遊戯を見ないといけねえんだ」

「その言、確かにその通りじゃ。しかし、何故我らがこつまでそなたらの言う『装備品』を蔑ろにした物言いなのか、知りたいとは思わぬか？」

オウカやシィアが常人とは比肩出来ない実力を持つからこそ、この苦悩は常に付き纏う。ただそれを分かって貰おうにも、言葉では理解できない場面もある時はどうするのか。簡単だ、実際に見てもらえばいいのだ。

シィアはこの提案を挙げる事で問題の解決を図ったのだが、人間これまでに感じた負の感情を捨てて真剣に話を聞こうとする者は少ない。

「……思わねえな。つたく、無駄な時間を使っちゃったぜ」

おやつさんもまた、その例に漏れずにいた。威圧的に「出て行け」と出入り口を指差すと、彼は店の奥に引つ込もうと背を向けた。

「ま、待つのじゃッ。我の話は終わっておらんぞッ」

シィアはその背中に声をかけるが、聞こうとしない者にはその効果はない。人間との駆け引きをするには彼女は正直過ぎたのだ。

店の奥にある扉におやつさんが手をかける瞬間、今まで沈黙考していたオウカの口が開いた。

「ミレット、すまなかつたな。こんな度量の狭小な奴じちせいなやつがいる店を紹介してくれて。シィアも気に病む必要はないぞ」

言いたいことを言うとオウカは席から立ち上がり、出入り口の方へ歩いていった。それに続いて、シィアも席から降りて彼の後を

追う。

ミレットはというと状況が一転も二転もしているせいか思考が追いつけず、未だに一人取り残されるように席に座ったままでいた。張り詰めた空気にその声はよく響いた。

「おい、今何て言った？」

おやつさんはオウ力たちに背中を向けたまま、怒気を孕んだ声で確認する。

「いや、悪かった。眼識のない奴にこいつの装備を任せられないからな。それが分かっただけでも良かった。感謝する」

ガンッ

大きな衝撃音にオウ力は目を向けると、おやつさんが鋼鉄製の壁をその拳で陥没させていた。彼の肉体は、シィーアと舌戦をしていた時よりも赤く染まっていた。体型や肌の変色から『鬼化』のギフトを保有していることが見て分かる。

『鬼化』ギフトの特性は『肉体強化』を上回る潜在能力を秘めていることだ。常時発動型の能力でもあり、肉体成長にもその効果は表れる。しかし、このギフトを保有する者は少ない。理由は発動の要となる感情の浮き沈みによって、その効果が影響するからでもある。必要な時に最大限の効果が発揮出来ないのであれば、使い勝手のいい『肉体強化』に分がある。対抗策として精神高揚剤などを使用する者もいるが、最終的に破滅しか待っていない。

そうして現在オウ力の目の前には、完全に『鬼化』したおやつさんの姿があった。

「表に出ろ」

通常『鬼化』した状態では精神的に安定しないことが多いのだが、おやつさんの様子を見る限り使いこなしているようだ。この店を開業する以前は有名な開拓者だったのかもしれない。

オウ力は相手が自分の張った罠に掛かったことを確信した。挑発

的な言葉を敢て使ったのも、おやつさんに自分の實力を見せるための場と機会を用意する必要があったからだ。尤も仲間が誤っているとはいえ、非難されているのをただ黙って見るのが耐えられなかったからというのが最大の理由なのかもしれない。

おやつさんことバージェンズ・オオギの實力は確かなものに違いない。それでもオウカにとって梃子摺る相手ではないことは確かだ。故にこれは、オウカの我が儘である。あわよくば、ミレットの件も今まで通りでいられるように力尽くで頼んでみようと、腹黒いことも考えていた。結果としてミレットに嫌われることとなっても、彼女たちの力で築き上げたおやつさんとの信頼を自分たちの所為で崩す必要はない。

だからこそ、この状況はオウカが待望していたものである。

「いいだろう。場所はどこにする？」

「この近くに『フリーフィールド』って施設がある。開拓者が利用する場所だから、そこなら問題ねえ」

開拓者が利用する場所というのは、それだけ特殊で頑丈な施設ということになる。そこならばお互いに思う存分に戦えるということだ。

男二人が店から出ようとするのを、少女の声呼び止めた。

「主よ、何を横から割り込んでおる。これは我の問題じゃぞ」

シィーアはその瞳に怒りを表していた。

「それは俺が引き受けたんだ。お前は気にするな」

「……気にするなじゃと。主がこの場を去ると言うのなら話は別じゃ。が、そうではなくこの者と戦おうと言うのなら話は別じゃ。

我の戦を掻つ攪つ気ならば、主とて容赦はせんぞ」

シィーアの纏う気配が濃厚になり、オウカの肌をピリピリと突き刺す。この場にいる誰もが、隠されたシィーアの實力を垣間見た瞬間である。おやつさんも無意識に、彼女に対していつでも動ける構えを取っている。

「俺に譲る気は無いのか？」

「毛頭無い」

この緊張感漂う中で、オウカは嘆息するとシィーアを正面から見つめた。

「なら、仕方ないな。どっちがおっさんと戦うか、決めないとな」  
シィーアもオウカの言葉に納得して首肯するが、ついていけないのは回りだった。

「おい、どういうことだ？」

おやつさんは困惑したせいか、少し『鬼化』が薄れた状態でオウカに聞いた。それに対して彼の答えは簡素で分かりやすかった。  
「別にあんたと戦う前に、こいつと勝負するだけさ。で、勝った方があんたと戦う」

「ちよつと本気ッ!？」

オウカの説明に反応したのは、今まで事の推移を見ていたミレットだった。彼女にとっては何故そうなるかが理解出来ないでいた。どうして仲間同士で戦う必要があるのか。どうしてこうなってしまったのか。全てが悪い方向へ向かっている気がする。

そんなミレットにオウカは手を翳して、落ち着いて話を聞くように指示する。

「俺たちは仲間だが、『ごっこ遊び』でやってるわけじゃない。強力な力を持つ分だけ、お互いの意見が分かれる事もある。その際、禍根が残らない解決方法が必要となってくる。」

会話で解決出来るのならそれに越した事は無いが、今回はそうじゃなかった。ただそれだけだ」

オウカの言っている事は分かるが、理解したくないのだろう。ミレットが再び口を開こうとしたところに、今度は巨大な手が向けられて抑止となる。

おやつさんは『鬼化』の抜けた元の姿に戻っている。何か思案している様子だったが、考えが纏まったのか静かにオウカとシィーアの二人を見下ろした。

「お前らは俺に勝てると思っているんだな？」

怒気を感じられない、静かな問いかけに二人は是と答えた。

「面白い。だったら先にお前らが戦って、勝った方が俺の相手だ。容赦しねえぞ」

と、おやつさんは好戦的な笑みを浮かべる。彼もこういったシンブルな方が分かりやすいし、気性に合っている。

ミレットは一人だけ取り残された気分で、勝手に分かり合ったよ  
うな雰囲気になっている三人に『類は友を呼ぶ』という諺が思い至  
った。これだから戦闘狂バトルマニアは手に負えない。

「もう勝手にすればいいでしょ！でも怪我したら絶対に許さない  
からねっ」

これにはミレット以外の三人とも共通した感想を述べた。

「それは無理だ」

「それは無理だな」

「それは無理じゃ」

……本当に、戦闘狂とは手に負えないものである。

## 第六話 商業都市ブルドオムスの過ごし方（後書き）

今回も一週間ぶりの投稿となっております。

いつも読んでいただいている皆様、そして初めてここまで一気に読んでいただいた皆様、誠にありがとうございます。

前回の話で流通する貨幣についてご指摘を頂きましたので、少し修正致しました。

宜しければ前話の後半部分をご確認下さい。

誤字脱字やご意見・ご感想などございましたら、お気軽にご指導いただければと思います。

## 第七話 再戦の行方？（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第七話 再戦の行方？

「準備できたよ」

『フリーフィールド』の待合室に設置された椅子に腰掛けていたオウカは、少し長くも感じる回想を終えると、声をかけてくれたミレットに視線を移した。

「ここまでできて何だけど、正直言って戦う必要あるの？」

一度は納得したものの、ミレットとしてはどうしてもオウカとシィアの二人が戦う必要性を感じられなかった。彼女も開拓者であり、パーティに所属しているから争いが生じるのは理解できる。だがそれは全て、彼女本来の明るさや、パーティのメンバーたちと対話で解決出来る範囲の内容であった。

だからどうしても、仲間同士で力を行使することに抵抗を覚えてしまうのだ。人としては善とされる行為だが、それはミレットがそうしなければ解決出来ない場面に遭遇したことがないことを証明している。それが駄目だと言うわけではない。むしろそうならないように努力した事を褒めてあげたい。

しかし今後もそうなるとは限らない以上、早い内から心を、精神を強く柔軟にしておいた方がいい。でなければいつか、呆気なく根元から折れてしまうのだから。

ここがミレットにとっても正念場になることを、オウカは感じ取っていた。

「ある。それはシィアも望んでいることだし、必要なことだ。

あと、もしかしたらミレットともこうなることがあるかもしれない。その時はお手柔らかに」

オウカは気分が落ち込んでいるミレットの髪を、シィアの頭を撫でるときのように、不器用だが優しく撫でた。彼としては特に意味があつてやった行為ではなかったのだが、その反応は目覚ましいものであった。



最初はきよとんとしていたミレットだったが、顔を林檎みたいに真っ赤にして口をあわあわせると照れ隠しなのか、鋭いショートアッパーをオウカの顎目掛けて打ち放つ。それを難なく受け止めるオウカは笑いながら、「じゃあ、行こうか」と言っつてミレットに案内を頼んだ。

長い通路を歩き、目的の部屋へと辿り着く。ミレットが扉を開けようとする前に、オウカは一つ言い忘れていたことを思い出した。

「ミレット」

「何？」

「今も納得がいかないだろうが、それでもこの一戦だけはお前に見て欲しいんだ。それは多分、ミレットの仲間が俺にお前を預けてくれている理由の一つでもあるから」

すつとオウカの手が伸び、ミレットの手を取ると、古くから伝わる小指と小指を繋げた『おまじない』の形を作る。

「約束だ」

普段どこか達観しているような彼が、小さい子供がする『おまじない』を真剣な表情でしてきたことに、彼女は心がじんわりと温かくなるのを感じた。

「うん、分かったわっ」

そしてオウカとこうして指を絡めている事に照れ臭さを感じたのか、手を離すとミレットは勢いよく目の前にある扉を開くのだった。何はともあれ、ミレットの感情はやや下降気味から、持ち前の明るさを取り戻したのである。

ブルドオムスでも広大な面積を誇る施設というだけあって、『フリーフィールド』は特殊な環境を想定していくつもの部屋が設けられている。基本、この施設を利用するのは開拓者が大半を占めているが一般開放もしており、カップルや家族の憩いの場として来店する客も多い。

「これは、凄いな……」

ミレットに案内されて入室した瞬間、オウカはここが本当に都市の中なのか疑ってしまった。『本物と限りなく近い環境』 それ  
が『フリーフィールド』の最大の売りである。あまりに精巧すぎて、  
とある部屋では遭難者も現れることがあるため、そういった場所では  
必ずブレスレット型発信機を渡される。これだけ聞くとかなり危険な  
イメージが湧くのだが、まったく以ってその通りであった。だが、  
開拓者が自己やパーティを練磨するのに安全な場所は必要ない。  
適度に危険でないと、いざという時に対処出来なくなってしまうか  
らだ。

「確かにのう。ここまで希望通りじゃと、何かに化かされておる気がするのじゃ」

オウカたちよりも一足早くこの部屋に入室していたシィーアも、  
オウカの意見には賛成だった。

今回オウカたちが貸し切った部屋は、この施設の中でも開拓者の  
使用頻度が高く、リピーターも後を絶たない。通常であれば予約が  
必要な部屋なのだが、そこはおやっさんことバージェンズ・オオギ  
とミレットのお陰でどうにかなった。

要はおやっさんのコネクションを使い、ミレットの笑顔を振り撒  
いたのだ。古参で屈強の装備屋とブルドオムスのアイドル的立場に  
いるミレットのダブルタッグに敵う者は、はつきり言ってこの都市  
にいなかった。勿論譲ってくれた彼らには、おやっさんの店で利用  
できる特別優待割引券やミレット個人の一時的なパーティ参加など  
の約束をしているため、ギブアンドテイクとなっているので問題な  
い。

シィーアが希望し、開拓者が頻繁に利用する部屋とは

「どつ？ まるで本物の封印区域にいるみたいでしょっ？」

ミレットの言葉の通り、封印区域を模倣した景色が広がっていた。  
室内には巨木が立ち並び、彼らがいる場所は開けているものの、あ  
の場所と同じく床一面が草や根で覆われていた。正確な広さは確認

できないが、この施設でもかなりの規模だと思われる。

封印区域を模したこの場所での戦術は非常に有効なものとなる。そのため、パーティの連携や個々の技術向上を図るべく、開拓者である彼らは日夜この場所で特訓を行っている。また古参から初心者まで分け隔てなくこの場所を利用するため、時間的な都合から合同で予約を取り、各々のギフトを活用した模擬戦が行われることも少なくない。

ちなみにこの部屋のレンタル料は、一時間あたり八千ダル。こうまで精巧な環境を維持するために定められた金額にしては格安のものだが、一般客でここを利用出来るものは金銭的に余裕のある者しかない。しかし、開拓者にとっては十分に支払える金額であるため、この事業は問題なく運営出来ている。そして今回の支払いは敗者が受け持つことで、オウカとおやつさんの両者とも納得している。オウカの『おまじない』効果によるものか、ミレットはテンション高めにオウカたちに自慢する。

「いやあ、ホント運が良かったよ。わたしの知り合いが丁度予約してたみたいで、事情を話したら譲ってくれたし。これも人徳つてやつかな。ふふふっ」

浮かれた様子の彼女を見るシィアの表情は、「こやつ、頭が春になっておる」といった呆れたものであった。この原因と思われるオウカへ視線を合わせようとすると、巧みに逸らされるので間違いないだろうと、彼女は確信をより深める。

シィアは小さな声で、「この無意識女たらしめ」と忌々しげに毒づいた。尤も、これで戦う理由が新しく出来た。この溜まった鬱憤を全てこの一戦で晴らせてくれようぞと、彼女が企んでいるなど当人は知る由もない。

「すまぬが娘よ、これを預かってもらえぬか？」

「オツケー」

シィアは羽織っていたケープコートを脱ぐと、ミレットに手渡した。これで現在彼女が着ているのは先程のショッピングで購入し

た黒のワンピース一枚だけになる。まだ季節は秋になったばかりなので問題ないが、雪のように白い肌をした二の腕を惜しげもなく晒しているのは、男であるオウカにとって何だか目のやり場に困る。

現におやつさんもケープコートを脱いだ彼女の容姿を眺めて、別の意味で眉を顰<sup>しか</sup>めていた。その理由は、本当にこの線の細い身体で戦う事が出来るのかと疑問に感じているからだ。彼も数多くの開拓者を見てきたのであれば、肉体的な要素よりも保有するギフトによって戦況が大きく変わる事は十分理解しているはずなのだが、それでもシィアの身体つきを見れば疑問に思ってしまうのも無理はない。きつとミレットが心配している理由も、ここにあるのかもしれない。

基礎が出来ていないと、全ての行動が稚拙なものになってしまう。それは一般的な常識でもある。故に開拓者の主な訓練とは基礎体力の向上と、反復的な型や技の繰り返しと地味なものになっている。

身体能力を鍛え上げることは無駄なことではない。おやつさんは言わずもがなだが、オウカやミレットも常人では歯が立たないレベルには鍛えている。例を挙げると、オウカの肉体はしなやかな筋肉をしており、獣のような鋭い動作と攻撃を可能としている。そしてミレットは女性特有の柔らかく味を帯びた肉体で、柔軟な対応と重さを感じさせない動きが出来るように鍛え上げられている。おやつさんは完全に攻防重視の筋肉の付きをしているため俊敏性に関しては劣るだろうが、その攻撃には一撃必殺が秘められており、中級クラス<sup>ス</sup>の魔物の攻撃を受けても張り合える防御力を誇っている。

おやつさんの視線を感じたのか、シィアは二の腕を後ろにまわして抗議した。

「そうジロジロと不躰な視線を送るでない。これは主のものじゃ」  
「……坊主、お前もしかして」

「いやいや、ないから！ あんたが考えていることは一切ない。それだけは断言しておく。というか、シィア、頼むからそういう冗談は人前で言わないでくれ」

軽蔑の眼差しを向けるおやつさんに、慌てて弁論するオウカはシィアに注意するが、彼女は「別に間違っておらんのじゃがのう」と言つて、より場を混乱させるのであった。

本当にこれから戦う気があるのか心配になつてくるのだが、それはそれとして余裕を持つている会話だった。後のない戦いではない、次に繋げる戦いである。オウカとシィアの二人はそれを踏まえた上で、気負うことなく普段通りのやり取りを行う。

「お前ら、ここがレンタル制だつてこと忘れてんじゃねえだろうな。時間もあんまねえんだぞ」

呆れたようにおやつさんは禿頭を掻きながら言った。この部屋をレンタル出来る時間もそうだが、現在彼の店は『一時外出中』と出入口にプレート掲げている状態である。商売をする者としては、グダグダとやっている時間が勿体無いのだ。時は金也である。

バージェンズ・オオギは堅物で短気な人物であるが、それでも『アタック&ガード』を利用する客は少なくない。ブルドオムスには珍しいのだが、彼は販売と製作を両立させている。一般的に武器や防具を製造するためには市場に出回っている素材だけでも十分だが、この都市では個性というものが無い場合、衰退も早い。

そのため封印区域に入り、自分で新しい素材や素材になりそうな物を探索することもある。常識で縛られない独創的な素材と製作過程によつて出来上がった装備には多くの開拓者が魅了されており、その効果は語るまでもないだろう。

だからこそ、店を空けるといふのはビジネスチャンスが無駄にする行為に近い。だが、彼も譲れないものはある。それは、誇りだ。今回こういう事態になつたのも、シィアが装備に関して無知であったために言つてしまつた言葉が原因となつていゝる。

「早く、どっちが俺と戦うのか決めてくれ」

言葉の通り、オウカとシィアのどちらか勝つた方がおやつさんと戦い、事の終結を図るのが目的で彼らはここにゐる。

「そつだな、行くか」

「了承した」

二人は頷くと、ミレットたちから離れた場所に移動した。距離としては百メートル程の離れた位置になる。ここまで距離が開けば、彼らの戦いの影響を受けずにミレットたちも観戦出来る距離にしたのだと分かる。

オウカとシーアは、お互いに一足飛びで相手を捉えられるように向き合う形となった。両者は特に構えることもせず、ただ自然体で立っている。

この勝敗のルールはシンプルなもので、相手を気絶させるか、降参させることだ。それ以外は互いに己の持てる全ての力を以って、最後まで戦いに挑むだけである。

離れた場所ではミレットが不安を隠しきれないように、両手の拳を握ってオウカたちを見つめていた。隣にはおやっさんが立って、彼らを眺めている。

視線をオウカたちから外さずに、おやっさんはミレットに呟いた。「後悔してんのか？」

急に言われた事に理解できなかったミレットだったが、それが自分への問いかけということに気付いた。

「後悔は……してないけど、不安はあるかな」

彼女も視線を逸らさずに答える。きつとこの一戦でどちらかが多少なりとも傷を負うのだと思うと、心が締め付けられるように痛い。二人とも昨日初めて会ったばかりの人たちなのに、もう仲間だから、彼らが傷つくのを見るのは辛い。

（だけど、オウカと約束したから　わたしは、最後まで見守らなきゃいけない）

ミレットの瞳と心には不安と、それを耐えようという強い意志が闘ぎ合っている。それを感じ取ったおやっさんは一言だけ、普段の無骨さが消えた声で相槌を打った。

「そうか」

まるで父親のような声に、ミレットは内心微笑みながら、これから始まる戦いを待つ。

そして戦いは、始まった。

先の攻撃を取ったのは、オウカだった。彼は瞬速でシィーアとの間合いを詰めると、腰に帯剣した二振りの片刃剣を抜くと同時に二連撃を高速で放つ。彼女は悠然と立ったままで、動く様子もない。

開始早々に決着がつくかと思われたその瞬間、異質な音が鳴り響いた。

ギギーン……

「なるほどな、それがシィーアの特徴か」

「そのようじゃ、主がシィーアの依り代に神木を用いてくれたお陰じゃの」

二人の距離はあと一メートルというところで、地面から生えた大量の茨が壁になって立ち塞がっていた。先程のオウカの攻撃を防いだのも、この茨である。普通ならば簡単に斬り裂くことの出来る植物のはずなのに、その硬度は鉱物をも凌ぐ程であり、植物としての柔軟性にも長けていた。

シィーアは右手を胸元まで上げると、水平に左から右へと振り切った。一見、何の変哲もない動作に嫌な予感がして、オウカは素早く後ろへと大きく回避した。そして着地すると同時に、自分の直感が正しかったと実感する。それまで彼がいた場所には無数の茨から放射状に棘が伸び、地面を貫いていたのだ。軽く回避するぐらいでは、あの植物の餌食になっていたであろう。

オウカとシィーアの間合いは初めの頃よりも大きく離れ、八メートル程に開いた。これでもお互いに問題なく攻撃出来る範囲である。

再度彼女が手を振ると、その強固な茨は一瞬で枯れ果て、吹いた風によって跡形もなく消え去った。

「今度はシィーアの番じゃな」

彼女はそう言うと、片膝立ちになって地面に両手を着ける。彼女の周囲がざわめいたと思うや否や、その両手両足には先程と同じ茨が包み込むように覆っていた。立ち上がった彼女の両手は茨と棘で鉤爪を形成されており、両足はロングブーツのように茨が編み込まれている。確かにこれならば、武器も防具も不要のものである。

遠くからミレットたちの息を呑む気配を感じたが、オウカは冷静にシィーアの弱点を見破った。

「正直ここまでとは思わなかったが、それ自然の少ない場所だと威力落ちるだろ？」

「もう見破ったか、流石は主よ」

シィーアがこの封印区域に酷似した部屋を希望した理由は、自分の力を最大限に発揮出来る場所を求めたからであった。もしなければ、その時は臨機応変に対応するつもりだったが、幸いにして十全に戦う事が出来る。

「シィーアを卑怯と思うか？」

「まさか、全力でやらないとお互いにすつきりしないだろ」

オウカはあっさりと言い切った。シィーアが元式神で、そしてシンフルベアの転生体であるならば、元の能力を受け継いでもおかしくない。

シンフルベアの姿はその巨体を茨で覆っており、鋭い爪と牙が特徴的であった。彼女の転生前はその魔物の女王と言っただけあって、非常に凶暴でいて強靭な肉体と魂を宿していた。また式神を顕現させるためにオウカが依り代として用いたのは、樹齢の判断がつかない程に成長した霊木である。この二つは非常に相性が良かったらしく、負傷した開拓者を運ぶために最短距離を走らせたところ、彼の狙い通り、樹木に影響する力を行使することが出来ていた。

だからこそ、この場所に来た時点で理解していたのだ。シィーア



は全力でこの戦いに挑むのだと。

オウカは四肢に闘気を満たしながら、『俊敏』と『見切り』のギフトを同時に併用する。こちらの準備が終わるまで律儀に待つてくれているシィアに感謝しつつ、オウカは対峙する彼女に告げる。

「これで二度目か、お前と戦うのも」

「そうじゃな、場所もあの時と酷似しておるし言う事なしじゃ」

二人して顔に浮かべるのは、好敵手と巡り合えた事で抑える事の出来なくなつた獰猛な笑み。

こうして異能者同士の本当の戦いが幕を開ける。

戦う二人を見ていたおやっさんは、身体中を鳥肌が立っていることに今初めて気付いた。こんな事は有り得ないのだと心の中で否定しても、現実は何の前で繰り広げられているため、悔しいが信じざるを得ない。

シィアといった少女が草の生えた地面に手を着けてから、この戦闘はより人外の領域へとシフトした。彼も以前は開拓者として活躍した頃があり、今でも装備品製造のためにパーティを雇って封印区域に素材探しで入ることもある。だがこんなまともじゃない戦闘を見たのは初めてだ。

（これが普通だつてんなら、俺らのやってきたことはお遊戯じゃねえか……）

オウカが無数の高速斬撃を繰り出せば、それまで果敢に攻めていたとしてもシィアは一転して身に纏う茨を消し、攻防一体の茨の壁を作り出す。『見切り』を使用しても残像を追うのがやっとの高速移動をオウカが行えば、シィアも負けじと脚に施した茨のロングブーツの棘で地面を踏みしめながら加速する。

彼らの戦闘にも随分誇りを傷付けられたが、一番おやっさんの職人魂を傷付けたのはシィアの装備だった。あれを装備と呼んでいいものか判別が付き辛い、身に着けているのだから装備と分類し

ても間違いでないはずだ。

何なんだ、あのちっこいのが身に着けている装備は。既におやつさんの身体はその感情の昂ぶりから『鬼化』している。それ程までに、あの装備から目を離す事が出来なかった。

『装備者の動きを阻害することなく、且つ最大限に応用の利く装備』という言葉が、ふとおやつさんの頭に浮かんだ。これはまさにシィアが要望していた装備であり、機能だったはずだ。歯軋りしてしまいそうになる激情を無理やり抑えながら、全てを見逃すまいと必死に見つめ、構造を読み取るうとする。

シィアの手を覆う茨は時折、その棘を伸ばして彼女の一撃の範囲を広げる。脚に纏った茨はその裏がスパイクの役目をしており、両者が拮抗する瞬間、体重の軽い彼女の身体を踏み止まらせることに成功している。勿論、こちらも攻撃に応用出来ており、脚主体の攻撃ではそれ自体が凶器のため、相手は剣で捌くしか方法がない。

身体の震えを止めるのももう限界のようだ。あれを見た瞬間から、二つの眼はシィアを見逃すまいぞと追い続けていた。だから、ここが限界だ。

「何が『人間が身に着けておるあの邪魔な物はいらん』だッ！あれこそ、完璧な装備じゃねえかッ！！」

もう抑えていられないとばかりに、おやつさんは怒号を上げた。あそこまで機能美に富んだ装備を、彼は未だに造り得たと思ったことがない。職人としての羨望と、何より悔しさが彼を苛む。

（あれは何のギフトだ！？ どうすれば、あれが造られる！？ どうすれば あれを越えられるッ！？）

初めてだった。自分が怒りでなく、今まで待ち望んでいた装備に出会えた高揚感と羨望で完全に『鬼化』することは、本当に初めての出来事であった。今すぐにでもあそこに割り込んで無理やりでも彼女の装備を奪い去りたい、という感情が沸々《ふつつ》と沸き上がってくる。

（いかん、感情が『鬼化』に引つ張られている……。だが、それで

も俺はッ)

ギフト『鬼化』の一番怖いところは、その暴走の残虐性にある。一度暴走してしまつたが最後、周囲に人がいればまずその人たちの命の保障は出来ない。潜在能力としては『肉体強化』に勝るギフトであるが故に、全てを破壊するまで止まらない。そのため、『鬼化』の保有者の末路は、肉体の限界まで破壊の限りを尽くして絶命するか、他の開拓者の手によつて殺されるしか道はない。勿論、暴走前に精神鎮静剤を摂取することで『鬼化』を最小に抑えることが出来るのだが、それが今の彼には出来ない。長年怒りという感情を適度に発散することで薬物に頼ることなく暴走を防いでいたのだが、ここではそれが致命的な仇となつた。

『怒り』の感情は時間が経てば冷静に見つめ直す機会が生まれるが、今回は『羨望』。これが厄介なもので、蓄積すればする程に心を蝕んでゆく。

熱に浮かされたように、激闘する二人へ一歩一歩足が前に進む。  
(あれは、俺の、物だ……あれこそが俺の望んだ)

夢遊病患者のように歩き、視線の定まらないおやっさんの前に、小さい影が飛び込んだ。

パン

一瞬、何をされたのかおやっさんには理解出来なかつた。『鬼化』された肉体は既に感覚を鈍くしており、僅かな衝撃ではびくともしない。だが、この目の前にいる女　ミレットは落ち着いた様子でこちらを見上げていた。

「少しは落ち着いた？」

「ミレ……？」

ミレットは自分に視線が定まったのを確認すると、彼に何がしたいのか聞いた。

「おやっさんは、今どうしたいの？」

この質問に対する答えはされず、僅かに残った理性で彼女にこの場から逃げるように指示するが、

「そんなことどうでもいいから、わたしの質問に答えて。」

おやつさんは、今何がしたいの？」

と、その言葉を跳ね除けた。

この一戦が始まる前に見た強い意志の光が、ミレットの瞳に宿っている。何が彼女をここまでさせるのか、今の彼には知る由もないが、それでも言葉を紡ぎだすのが義務だと感じさせることに成功した。

「……俺は、あいつが持っているものを、知りたい。奪いたい」

「知ってどうするの？」

「あれを越える、ものを、俺の、俺の手で、造り出す……。」

「そうだ……そうだッ、俺が、造り出すんだッ！！」

羨望、欲望、願望、希望。緋ない交ぜになった感情は悲しいくらいに歪んでいたが、彼の本心をミレットも知ることが出来た。

完全に暴走寸前となったおやつさんの体温は、もう常人の生きていられる体温を越えていた。赤熱と表現出来るまでに赤々とした握られた左拳に、ミレットは優しく右手を伸ばす。熱した鉄にでも触れたような痛みを感じながら、それでも人を安心させる微笑を崩さずに話しを続ける。

「だったら簡単な方法があるよ」

「……何だと？」

彼は訝しげに聞き返した。まだ理性の火は消えていない。ならば後は、信じるしかない。

「お願いするんだよ。シィアに、それを見せてくれないかって」

おやつさんは無言のまま、彼女を凝視する。魔物に敵意はあっても、殺意を感じることは少ない。だが人は感情を持った生き物だ。

彼の見開かれた眼は、純粹な殺意を孕んでいた。

「下手なことを言えば、ミレットの命はない。」

「お願いする、だと？」

「そう、お願い。シィーアがあのだを身に着けたのは、きっとおやつさんの言葉があったからだよ。だから、発案者であるおやつさんには見せて貰う権利がある」

「何を言ってるんだ、あいつは」

「うん、初めは装備なんてって馬鹿にしてたよね。でも現に今、彼女は装備と言えるものを纏ってオウカと戦ってる。」

『全ての装備が、無駄なんて言葉で一括りにされる謂れは絶対にねえんだよ』、これはおやつさんがあの子に言ったことだよ」  
「……」

おぼろげな意識の中で、彼は思い出していた。確かにあの時、少女は自分の話を聞いて、謝罪した。それは、認めたということになるのだろうか。

それが本当かどうか分からない。分からないが

おやつさんは赤熱した右腕を振り上げると、彼に比べて小柄なミレットに告げた。

「ミレ、そこを動かすなよ」

「分かった」

彼女も視線を逸らさずに、首肯する。

そして、彼の無慈悲で凶悪な拳は振り下ろされた。

ドゴオツ

人を殴る音にしては重厚な響きが、辺りを浸透する。おやつさんの振り下ろした拳は、ミレットではなく自分の顔面に向けられていた。流石に『鬼化』した自分の攻撃には堪えるものがあったのか、少しよろけていたが頭を軽く振ると早くも持ち直したようだ。

「だったら、あの娘に確認しねえとな。俺が発案者なら、あの装備の構造をじっくりと納得いくまで拝ませてもらっても、責められる謂れはねえな」

そう言うおやつさんの鼻から赤い血が二筋流れ落ちる。そのどこ

かシユールな姿に、ミレットは笑いながら賛同した。異常なまでの体温は常温にまで下がり、暴走しかけた『鬼化』は無事に沈静化出来ていた。

もう大丈夫だと、ミレットはおやつさんの拳から手を離す。彼に触れていた右手は火傷による水脹れでかなり痛むが、彼女も開拓者である。多少の傷には慣れてるし、いざとなればギルドの医療機関に頼んで治療してもらえば問題ないと結論付けた。しかし、仮にも加害者であるおやつさんはそういう訳にはいかなかった。

「ミレ、すまない。面倒をかけた。それにその火傷……」

「大丈夫だよ。この仕事してれば、怪我なんて日常茶飯事だからっ」  
明るく返すミレットは大した事無いと、右手をひらひらと振った。時折、その頬が微弱ながらも引き攣っているのは、痩せ我慢している証拠である。おやつさんは自分のカーゴパンツにある複数のポケットをしばらく探っていると、目的の物が見つかったのが、ミレットにそれを手渡した。

「これ……」

「まあ、無いよりはマシだろ。いちお、微弱ながらも『治癒』が付与されているから巻いておけ」

ミレットが受け取ったのは、包帯であった。それも『治癒』のギフトが付与された品であれば、その価値は普通の物よりも当然高価なものとなる。購入するならば、一束三百ダルは下らない。

ミレットの口から、咄嗟に「貰えない」と言いそうになったが、何とか思い直して有り難く頂くことにした。これはおやつさんの謝罪の形なのだ。それを無下にするのは、折角落ちいた彼の心に『罪悪感』という名の楔を打ち込むことになる。今後とも変わらぬ関係である店を利用したいのなら、ここは受け取るのが正解だと思えた。手早く右手に包帯を巻くと、確かに痛みが引いていくのを感じた。これで雑念無く、オウカとシーアの一戦を見守ることが出来る。

ミレットが視線を二人の方に戻すと、いつの間にか彼らは激しい攻防を止めて慎重に相手の出方を窺っていた。両者とも拮抗した状

態で無駄に体力を使うよりは、相手の僅かな隙を誘って一撃で仕留めるつもりなのか、まったく動く様子が見られない。

これはミレットの主観で実際には身体の微細な動きで相手の出方を窺ったり、目線で牽制したりと静寂の激闘が繰り広げられていた。両者起死回生の奥の手を隠しているためか、安易に動く事が出来ない。だからこそ、この場は凍りつく。

見ているだけのミレットも何が起きているかは分からずとも、オウカとシィアの発する闘気にじわりと背中に汗が流れるのを感じる。自分が少しでも動けば、それを機に流れが変わってしまうような気がして、迂闊にも金縛りに似た痺れが身体中を這い回る。

だが黙っていることに耐え切れず、ミレットはおやつさんに声をかけた。

「おやつさんはこの勝負、どうなると思う？」

問いかけを受けたおやつさんは、硬直する二人を眺めながら答えた。

「冷静に考えて、あの坊主が勝つだろうな」

てつきりおやつさんの先程の行動からシィアと答えると思っていた彼女は、驚きを隠さずに率直に応じる。

「意外、おやつさんはシィアって答えると思っていたけど？」

「同じ体格ならそう言っただろうが、あの坊主とちっこいのじゃ体力に差があり過ぎる。よく見れば分かるだろうが、ちっこいのそろそろ限界がくるぞ」

オウカとシィアの間合いは三度離れていた。それもこれで終わりだと、冷静に見つめる自分が告げる。

繰り返す攻防によって自分の体力が思った以上に削られている事を、シィアは戦況の一つとして判断していた。この小さな身体では、以前のように無尽の体力にものをいわせて戦うことも出来ない。このままでは悔しいが、負けることは明らかである。

(……ならば、一つの打開策をここで出すしかあるまい)

幸いにして、この身は植物を操る術を持っている。そして今までの戦闘で、ただ闇雲に戦っていた訳ではない。全てはこの瞬間のために、布石を打ってきた。後はそれを気取られぬままに、主を倒すのみ。

……もし気取られていたとしたら、この戦術は無に帰す。体力が尽きかけている所為か軟弱な心が囁くが、シィーアはその弱さを汗で額に張り付いた前髪と共に拭い去る。

(雌雄を決する時じゃ、主よ)

シィーアは前へ、オウカのもとへと歩みだす。その距離、一五メートル。

オウカは、まだ動かない。こちらの意図を探るようにシィーアを見続ける。

一四……一三……一二メートルと次第に距離は縮むが、彼はまだ動く気配を見せない。

シィーアの主であるオウカは、人間にしては強靱な肉体を持ち、その精神力にも同様のものを持っている。そして、日常では自分の言葉やフオウト姉妹とのやり取りに日々慌てたりする人間らしさも兼ね備えた人間であった。しかし、見ていて危うい脆さも同時に潜んでいるのも彼女は知っていた。

この人格形成にはオウカの過去にも関わりがあるのだろう。彼から命を分けてもらった自分だからこそ、彼を尊敬し、対等でありたいと願う。しかし、人は自分自身のこと、ましてや自分以外のことをも理解するには未熟で発展途上の存在だ。今回の一件も、元々は彼が全ての罪を一人で引つ被ろうとしたことが原因だ。彼女はそれが悲しかった。何故、自分の罪を自分で償わせてくれないのか。それはまだ自分が、彼に認められていないからかもしれない。そう思うと、彼に対してシィーアは

(絶対に勝って、認めさせるのじゃ。我は守られるだけの存在でなく、主の隣に立つに値するということを)



シィアにとって、もうおやつさんとの争いは関係ない。これは自分の誇りのための戦いだ。だから、勝つ。それだけだ。

そしてオウカとの距離が十メートル圏内に入った瞬間、シィアは空高く跳んだ。彼女を追うように、オウカの周囲である半径五メートルの場所から一斉に大量の茨が天へと伸び上がる。

瞬時に反応してまだ回避出来る空間を『見切』ると、オウカはシィアの待ち構える空へと雷速で跳躍した。しかし死中に活を求める彼の迅速で的確な行動は、あと一步のところまで及ばなかった。

茨の檻からオウカが抜け出す寸前、シィアは纏った全ての茨を棘を開放し、彼に射出した。茨は網状に広がり、彼の進行上に襲い掛かる。これには流石のオウカも空中にて方向を変えることが出来ず、双剣にて最小限のダメージで受け止めるしか方法はなかった。

シィアが開戦から今まで繰り返した布石が功を成す。彼女の入念な刷り込みによって、オウカは茨を身に纏うことと茨の壁を同時に発生させることが出来ないと思わされていた。それと同時に戦うときは徹底して接近戦のみで対応していたため、飛び道具として茨を使用したことがこの結果を導く大きな鍵となったのである。

オウカが地面に着地すると同じく、頭上の茨も彼を覆い隠すように、ドーム状にそれぞれを絡ませて強固なものとしてゆく。剣でも斬れない植物の檻は、ここに完成した。

「ハア……ハア……主よ、負けを認めよ」

時間にして一秒にも満たない刹那の攻防の勝者であるシィアは、その檻の天辺に着地すると息を切らせながらもオウカに降伏を促した。

この時のために温存していた体力は最早風前の灯火となり、息も絶え絶えとなっていたが、その顔はどこか満足気であった。

「この檻 敢て名付けるならば 蝕縛の園 は、時間が経つと共に内側へと侵食を始める。これに囚われた時点で、主の負けは決まっております。だから素直に降伏するのじゃ」

「……………」

降伏勧告をしても、中からは無言の返答のみ。つまりオウカは負けを認めていないということである。シィーアは、「仕方がないのう」と呟くと 蝕縛の園 へと僅かな力を注ぐ。活力を得た茨は徐々にだが、確実に内側への侵食を始める。

「主の意志は分かった。そうであれば、シィーアもそれに応じよう。主が気絶するのが先か、私の体力が尽きてこの 蝕縛の園 を維持出来なくなるのが先か、勝負じゃ」

茨は絡まり、初めは網目状に開いていた隙間も次第に小さくなってゆく。蠢くように、獲物を狩るように内側にいるオウカとの距離は狭まる。

そして、 蝕縛の園 は 外界からは一切の光が入らない真なる暗闇と化した。

## 第八話 再戦の行方？（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第八話 再戦の行方？

そこは光の入る余地のない漆黒の場所だった。そして周りを囲むように聞こえる蠢くものの這いずる音。常人であれば、一瞬でもいれば発狂してしまいそうな空間に、オウ力は一人平然と立っていた。彼にしてみれば、よく見る夢の場所と酷似した空間であるため、心が壊れることはない。いや、何も感じない事から既にどこか壊れているのかもしれない。

現状のオウ力はシーアの攻撃でダメージを受けていた。右頬と左腕に小さな裂傷が生新しく出来て、血を滲ませている。無傷で終わる戦いだとは彼も思っていなかったが、完全に僅かな隙を見破られ、彼女に一本取られた状態だ。

「しかし、シーアのやつこんな奥の手を隠していたとはな」

答えのない呟きを口にする。その色合いは感嘆に彩られていた。茨の剣でも斬れない頑強さもそうだが、その操作の汎用性に感心していた。武器にもなれば、防具にもなる。近接戦が主体かと思えば、遠距離戦もこなす。これほど戦いに向いた能力はない。

この都市ではそのままでも実力者としてトップランクに入るのではないかと自分では思っていたが、それは過大評価だったようだ。自分もまだまだ経験不足だと、身を以って実感させられた。それでもシーアとの戦いは楽しい。まるでびっくり箱のような意外性を持っている。もつと戦いたいと思うのだが、時間がないのは確かだ。オウ力の周りには確実に距離を狭めて、その圧倒的な物量を以って蹂躪しようとする茨の壁が徐々にだが迫っている。周囲の音から推測するに、彼との距離まであと二分くらいしかない。それまでにこの窮地を脱する術を見出さなければ、死ぬことはなくとも戦闘の継続は不可能となる。

オウ力は静かに呼吸を整えると、現在使用しているギフトを全て解除した。勝負を投げ出したかに見えるこの行為は、彼がこれから

やろうとしている事に必要不可欠のものである。

手探りで普段は服の中に隠すようにしている四本のネックレスの中から、目的の一本を探し出す。周囲が暗闇で閉ざされようが、瞳を閉じていようが慣れ親しんだ感覚の前では、間違える要因が見当たらない。オウカは目的のネックレスを取り出すと、先端に取り付けてある物を意識したが肝心なその先が続けられない。手が震えるのを彼は止めようとするが、止まらない。先程の戦闘の高揚感がどこかへ行つて、代わりに泥にも似た負の感情が入り込んでしまったかのようにオウカの思考は沈んでゆく。

嫌悪しているこの力を使えば、この程度の壁など紙屑同然に消し去る事が出来るはずだ。それは解りきつた事実なのだが、ミレットたちに自分の秘密を覚さとられる可能性がある。もし覚られなくても、きつと疑問に思うだろう。彼はどうやってこの危地を乗り越えたのかと。そして、その力の秘密は何なのかと。

それに対して、ミレットなら自分の都合の良い嘘を信じてくれる、と思ってしまう辺り最低な人間だと思う。過去にこの力で散々な目に遭い心に傷を負った自分が、今度は仲間を騙すために相手の心を利用する。これ程、滑稽な事があるだろうか。

ネックレスを握るオウカの手から力が抜け、シヤランと軽い音をたてて胸元で微弱に揺れる。自己嫌悪に浸っている時間は無いのに、踏ん切りがつかないまま彼は立ち尽くすしかなかった。

接触まで残り時間が一分を切った時、棒立ちのオウカの脳裏に昔の事がふと思い浮かんだ。『いくら無双の力があるうが、使う者の心が弱ければそれは無用の長物であり、持てぬ者からすれば立派な罪となる』と。これは剣を指南してくれた師が、以前オウカに言った言葉だった。師は清廉潔白を信条とし、その言葉に恥じぬ生き方をしていった。師事を受けながら、オウカもそうなれたらと何度思ったか分からない。結果、彼には無理だと理解出来た。

人に自分自身の過去をそして秘密を知られることに恐怖を感じる者が、清廉潔白を謳うとは片腹痛い話だ。既にこの身は墮ちている。

生まれ出でた時から、それは変わらない。

オウカは誰もいない空間で愚かな自分を自嘲しながら、このまま茨の壁に呑み込まれるのも悪くないと諦めかけた瞬間、その声は聞こえた。

『主は、それでよいのか？』

姿は見えないが、その声からシィーアだと分かった。オウカは周りを見渡すが、どこもかしこも闇一色。特にこの 蝕縛の園 を解いた訳ではないようだ。未だに茨の蠢く音は響き、侵食は続いている。つまり彼女の声だけがここに届いているのだ。

「……何がだ？」

彼の質問はひどく簡素なものだった。それでもシィーアは再び聞き返す。

『主はあの時、シィーアに言ったであろう。全力でやらないとお互いにすつきりしない、と。だから、もう一度聞く。主は、それでよいのか？』

暗にシィーアはオウカに言っている。彼が最後まで実力を出さずに終わるのなら、それはこの一戦の価値が無意味であるのだ。お前はそれでいいのかと、彼女は聞いているのだ。

良いか、悪いかで答えるのならば、それはもちろん後者だ。しかし、自分の中の恐怖が全身に絡まって前に進む事が出来ないのだ。忌々しいと思いつながら、どこかで仕方がないと納得している自分がある。

「情けない話だが、俺は……」

『そんな事は聞いておらんツ！ オウカ・ライゼス、我はお主の気持ちに問うておるのじゃ。そこに一切の戯言は不要である。だから言え、オウカツー！』

オウカは自分の中を、シィーアの言葉とそこに込められた裂帛の気合いが通り抜けるのを感じた。同時に、身体を縛っていた迷いも吹き飛んだ気がする。

（俺が悩んでいたことはシィーアから見れば、ただの戯言か……）

何だか、ウジウジ悩んでいるのが馬鹿らしくなってきたな)

そう思うと後は切り替えるのが早かった。今この場で必要な事は、悩むことじゃない。行動する事だと、自分の心を鼓舞する。

「シィーア、すまなかつた。この詫<sup>わ</sup>びはここを出た後に必ずする。だから、そこで待つてろ」

『ふふ、やれるものならのう。楽しみに待つておるぞ』

本当にどちらが主か分からなくなってくる。オウカとしてはいつか、主従が逆転しそうな気がして苦笑いを浮かべた。だが、それは今ではない。今すべき事は自分の力を使ってここを抜け出すことだと、四肢と心に喝を入れる。

胸元で頼りなく揺れていたペンダントを手に取り、強く握る。もう残り時間は十秒もないだろうと、間際まで迫った重圧を感じながらオウカは冷静に判断した。しかし、それだけの時間があれば十分だ。イメージは解放、自分の中を流れる力を瞬間的に解放すること。オウカはこれから発する言葉に言霊を宿らせ、それを口にする。

オウカがシィーアの放った攻撃に閉じ込められてから、二分程の時間が経過した。ミレットはそれをただ見ているしか出来なかつた。隣にいるおやつさんもシィーアの作り出した 蝕縛の園 を見て、絶句しているようで無言のまま時間が過ぎるかと思われた。

「すげえな……。あのちっこいの、本当に開拓者になつたばかりか？」

口を開いたおやつさんの言葉には、驚嘆と尊敬の入り交じつた感情が含まれていた。あそこまでの大技を使用したのだから、能力者の負担は並み大抵のものではない。それも体力的に限界が近い状態なのもそうだが、針の穴を通すような一瞬の隙を見出しての攻勢で

ある。精神的負担も大きいものだと思される。

「ええ、シィーアもオウカも、今日登録をしたばかりなだけで…  
…これを見たら間違いだと思っよね」

能力者の中でも、彼ら程にここまで熟練した戦闘が出来るものは、ブルドオムスでも数が限られる。候補は勿論、都市警備隊長ゴルデイエス・ハーグランと彼が率いる都市警備隊などの百の歴戦を乗り越えた強者たちくらいだろう。

「ここまでくると、尊敬の念しか沸いてこねえな……」

ミレットもおやっさんが言いたいことは分かった。ここまで人外の域の戦いを見せ付けられれば、人によっては恐怖よりも畏怖と尊敬の念を抱く場合がある。それが開拓者であれば、程度の差はあれ、オウカとシィーアの二人に強く惹きつけられるに違いない。斯<sup>か</sup>くい彼女も、オウカの強さと、それに反比例するかのように偶に見せる弱さに惹かれる一人だ。

オウカの奥底に隠された過去を知りたいとも思うが、彼が今は口を閉ざすのであれば無理に聞こうとは思わない。知るには相当の覚悟が必要になるはずだ。だが不思議な事に、それもそう遠くない内に訪れる予感が自分でもしていた。

ミレットは再び、蝕縛の園へと視線を戻す。今もシィーアはその茨の上に立ち、中にいるオウカの様子を窺っているのだろう。彼女はそこから動かずに、じつと一点を見つめ続けている。こちらとしてはこの戦いの進行状態が分からないため、彼女の様子から推測するしか方法は無いのだが、その表情からは何も読み取れない。

何も出来ない事に対するもどかしい気持ちだが、ミレットの心に沸き上がってくる。

自分はどうして何も出来ずにここにいいのか、正直言って分からなくなってくる。オウカに「見ていてくれ」と言われ、逃げ出したい気持ちを抑えながら、気持ちを奮い立たせて見守っていた。途中、おやっさんの能力暴走も何とか落ち着かせる事が出来たのは、奇跡に近い僥倖であった。



オウカの安否が気になるが、これは戦いなのだ。あの 蝕縛の園の中はきつと、閉じ込めた相手を完膚なきまでに傷付けるものに違いない。仲間が傷付くのは苦しいのに、彼との約束がミレットをそこに踏み止ませる。

（きつとわたしは、二人が戦う意味を知らないといけない。じゃないと、この先も一緒にはいられない）

何か理由があるからオウカは自分と約束したのだと、ミレットは思った。火傷の痛みが薄れた右手の小指が温かい熱を持って、待つしか出来ない彼女の支えとなる。

「オウカ……」

ミレットは右手を抱きしめながら、今も戦い続けている彼の名前を呼んだ。彼女もまたオウカと同じく決意を強くした瞬間 ドクンと、大きな脈動を 蝕縛の園 の方角がら感じた。

その上に乗っていたシィーアも異変を感じ取ったのか、素早い動きでそこから離脱した刹那 蒼い光が 蝕縛の園 の内側から噴き出して、あれだけ剣戟を振るおうともまるで歯の立たなかった茨の壁を音も無く消し去ってゆく。そして遅れてやってきた豪風に思わずミレットは吹き飛ばされそうになるが、おやつさんの豪腕が間一髪のところまで彼女の身体を受け止めた。

「一体、何が起きてんだっ！」

「分からないよ！」

あまりに強い風の勢いに二人は目を開けていられず、ただこの豪風が止むのを待つ。それでもミレットの瞼の裏には、しっかりと蒼い光の輝きが映っていた。

あれからどれくらいの間が経過したのか、いつの間にか周りには嵐が過ぎ去った後のように、一帯が凪いだ状態となった。

恐る恐るミレットが瞳を開けると、 蝕縛の園 があつた場所にはその形跡は一切無く、代わりに濛々と土煙の立ち上がる景色が広がっていた。僅かな時間であの茨の壁が消え去ってしまったことにも衝撃を覚えたが、彼女が懸念しているのは別の事だった。

（オウカ！ オウカは無事なの！？）

思うよりも先に足が動いていた。何が起きたのか分からないが、多分オウカが何かしたのだ。いくら強靱な肉体を持つ彼でも、自分の目でその姿を見るまでは安心出来ない。今にも泣き出しそうになる身体に叱咤をして、ひたすら走ることを考える。後ろでおやつさんの声が聞こえるが、感情が上手くコントロール出来ない所為か、彼が何を言っているのか分からない。

（無事でいて、オウカっ）

ミレットはオウカの姿を求めて、走る。

土煙の立ち込める空間で、オウカは立っていた。一時的に開放した切り札となるギフトの発動は、蝕縛の園が消滅するのと同時に解除している。常時発動するにはあまりにも凶暴な力の為、そうおいそれと使用することが出来ないのだ。また武器に与える負荷も尋常なものではなく、一時的とはいえ力を使った影響で双剣には刃は毀こぼれが生じていた。だがそれも瑣末な事である。

オウカの視線の先にはいつものように、少女が悠然と佇んでいた。

「シーア……」

「よくぞ、蝕縛の園を破ったのう。やはり主はシーアの主に相応しい存在じゃ」

そう言う彼女は心身を限界まで酷使させた反動の所為で、立っているのもやつとの様子だった。それでも、この戦いの決着が付くまでは倒れることを許さない気概を感じる。

「しかし欲を言ってもっと主らしく、気随気儘きずいきほんに生きてもいいと思うのじゃがのう」

「おい、それじゃただの暴君だぞ。だがシーアに言われたように、もう少し俺は楽に生きてもいいのかもな」

オウカの言葉にシーアは満足気に頷くと、続く彼の言葉を待った。これは二人の意地を通すために始まった戦いのなのだ。最後に

はどちらが勝者が決めねばならない。

前に足を進め、シィーアとの距離を縮める。自分を見上げるその眼差しはどんな状況であろうと輝きを失わない。

オウカはせめて彼女の主らしく、泰然たる態度で告げた。

「主として命じる。降伏しろ」

「仰せのままに」

シィーアは従者の礼を取り、片膝立ちになって頭を伏せる。

こうして意地の張り合いは幕を閉じたのだが、シィーアの態度に驚いたオウカは慌てたように言葉を付け加えた。

「そんな堅っ苦しいのはいいって！ お前は俺の仲間だし、これからもずっと一緒にいるんだから頭を上げるよ」

「今……なんと？」

「ん？ 堅っ苦しいのはいいって」

「そうではないっ。その後と言ったことじゃ」

「その後って、お前は俺の仲間だし、これからもっておいっ！」

身体中の疲労や倦怠感も忘れて飛びついたシィーアに、オウカは完全に不意を突かれた形で押し倒されてしまう。突然のことに思わず彼女を一旦退かそうとしたが、耳元で聞こえた呟きに手が止まる。

「仲間、シィーアは主の仲間っ。ふふふ、ずっと一緒っ」

まるで何か腫れ物が落ちたかのようにシィーアの声は優しく、ぎゅっとオウカに抱きついていて。とりあえず今はシィーアの好きにしておくかと、力を抜いて天井を見上げた。

ここで終われば全て丸く収まったのだが、タイミングがいいのか、悪いのか、土煙が晴れた場所に一人の人物が立っていた。言わずもがな、ミレットである。息を切らした彼女の髪は所々乱れ、額には汗が滲んでいた。

そしてミレットの姿を見たオウカも、何故か冷や汗が止まらない。何も悪い事をしていないはずなのに、その心境は浮気現場を妻に見られた夫に近いものがあつた。絶対零度の突き刺さる視線に何か言

わなければと、生物としての本能が警鐘を鳴らす。

「よ、よお……」

考えあぐねた末に出たのが、これだ。更に警鐘は、警戒レベルから危険領域に突入する。相変わらず、シィーアは抱きついたままで離れようとしめない。

ぴくつと整った眉を震わせ、ミレットは微笑んで聞く。

「何してんの？」

微笑んでいるはずなのに、その眼は決して笑っていないのが非常に恐怖感を煽る。固まるオウカの顔を見ながら、ミレットは近づいてもう一度聞く。

「ねえ、な・に・し・て・ん・の？」

ザクツザクツと安全靴の大地を踏みしめる音が、言葉の一音ずつ刻まれる。このコースは不味いと判断したオウカは、シィーアから抱きつかれたまま急いで飛び退いた。

ガスツと最後の一步がオウカの頭があつた場所を踏み抜く。瞬時に避けていなければと思うと、それだけで背筋が凍る思いだ。先程までの風格など知らぬとばかりに、オウカは必死にミレットへと今の状況を弁明しようとしたのだが、

「言い訳は聞きたくないっ！」

と、拒絶の一刀両断で切り捨てられた。まるで今までの抑制から開放されたように、ミレットの感情は爆発した。

「わたしがどれだけ心配していたかつ。オウカと約束したから、逃げ出しそうになるのを我慢して見てたのに、それなのにあんたはシィーアとベタベタしちゃって！ 何これ？ 何なのこれ！？ もう訳が分からないよ！ わたしが悩んでいたことって、あああもうっ！  
……………決めた」

まったく口の挟めない舌鋒の鋭さに、オウカは先を促すしか出来ない。

「き、決めたって何を？」

「とりあえず、殴る。後のことはそれから……あ、そういう

ことか」

何やら一人で納得するミレットに、オウカは少しずつ距離を開けながら逃げ道を探すのだが、途中で視界に入ったものにこの状況も忘れて溜め息をつきたくなかった。安心した事で一気に疲れがきてしまったのかシィーアは、オウカに抱きついたまま眠ってしまったのだ。その表情はとても満足したもので、起こす事も憚はばれる気がする。

しかしその余裕が彼にとって最大の間になったのは確かだ。

絶好のチャンスを見逃すことなく、ミレットはオウカの顎にすつと左拳を添えると渾身の一撃をお見舞いした。

「マキシмум・インパクト  
衝撃最大出力　ッ」

先手必勝　隙をつくタイミングも絶妙であれば、思いつきりの良さもある一撃であった。空を舞いながらオウカは、ミレットのギフトに『衝撃』があつたことを思い出していた。的確に狙われた顎からの衝撃は脳を大きく揺さぶり、意識を朦朧とさせる。彼自身もシィーアとの一戦で疲労が蓄積していたこともあり、これ以上意識を繋ぎとめることが不可能だと判断したオウカは、げ実に恐ろしきは怒った女性であると、心に刻むのであつた。

ところで彼に抱きついていたシィーアはというと、舞い上がる途中に眠ったままの状態でおウカから離れ、ミレットの方へと飛び込むように落ちてきた。今回の怒りの矛先はおウカだけが対象だつたようで、彼女もそれを優しく抱きとめて起こさないようにする。

「しかし、こんなことでおウカたちが戦つた理由が分かるなんて何だか虚しいような悲しいような……はあ」

ミレットは一人、世の中の理について考えるのであつた。

「このヨーカンというものは誠に美味じゃのう。オオギよ、あの苦

「い茶をもう一杯頼む」

「仕方ねえな。ちよつと待ってる」

周りの騒々しさにオウカが目を覚ますと、見慣れない鋼鉄製の天井が視界に映った。どうやら『フリーフィールド』ではないようだ。ソファの上で横になっていた身体を起こすと、それに気付いたのかミレットが甲斐甲斐しく近づいてきた。

「あゝ、その……大丈夫？」

「まあ、大丈夫だ。ここは？」

どこかの控え室なのか、部屋の中にはダンボールなどが色々置いてある。テーブル側にはシーアが羊羹に夢中になって、一本丸ごと栗鼠のように食べているのがシュールだ。誰かあいつに食事のマナーを指摘してくれ。

オウカの返答にほつと胸を撫で下ろしたミレットは、よく冷えたおしぼりを渡しながら教えてくれた。

「ここは『アタック&ガード』にあるスタッフルームで、オウカとシーアが眠っちゃったからここまで連れてきたの」

シーアが疲労により眠ってしまったのは事実だが、オウカについてはかなりオブラートに包んだものの言い方である。何だか釈然としない気持ちをつくつと抑えて、オウカはソファから立ち上がった。オウカから見れば、ミレットは今回の戦いの勝者である。乱入気味の一戦とはいえ、ある意味オウカは試合に勝って勝負に負けたということになる。だからこそ、勝者の意見には従うしかない。

「そういえば、あのおっさんはどこに行っただ？」

「あ、それはね」

「俺ならここにいるが」

湯気の立っている湯飲みを片手に、おやつさんはスタッフルームに戻ってきた。相変わらずの捻り鉢巻に禿頭の巨漢である。

おやつさんそのままシーアの方へと歩き、テーブルの上に湯飲みを置いた。

「ほらよ、抹茶だ。結構高いんだから、あんまりガバガバ飲むんじ

やねえぞ」

「うむ、感謝する」

と、何だか二人の関係が緩和されているのは気のせいだろうか。オウカの疑問を感じ取ったのか、ミレットは事の顛末を話した。

「　　と言つ事なの」

「つまり、おっさんがシィーアの能力に惚れ込んで、謝罪したと？」  
気絶している間にそんなことがあったのかと、オウカは嘆息した。  
「まあ、そういうことだ。実際俺がシィの字に苛ついていたのは、  
装備に関する理解がなかったからだ。それがなくなつたんなら、次  
に筋を通すのは俺の番だろ」

男らしいおやつさんの判断にオウカは、このおっさん無愛想なだけ  
で根は真面目なんだなと、評価を改めた。元々はシィーアとおやつ  
さんの争いから始まった事なので、それが解決するのであれば特  
に言う事はない。

「すると、これからもミレットはこっちの店を利用出来るってこと  
でいいのか？」

「ああ、問題ねえな。むしろ、シィの字と合わせてくれたんだ。こ  
れからはVIP待遇で迎えてやるぜ」

もう一つ懸念していた事も然<sup>さ</sup>したる問題もなく解決したことにオ  
ウカは安堵するのだが、新たに気になる事が発生した。

それはシィーアに対するおやつさんの呼称である。ミレットはミ  
レ、シィーアはシィの字と、このおっさんは気を許した者にあだ名  
をつけるらしい。自分もおオギに『おっさん』と呼んでいるが、苗  
字で呼んだ方がいいのだろうかと聞いてみたところ、

「んなもん気にすんな。俺の方はオウカと呼び捨てにすつから、お  
前さんはそのまま『おっさん』で呼んでくれて構わねえってか、呼  
べ」

と、あっさりとしたものだった。人の出会いとは斯くも不思議な  
ものである。昨日の敵は今日の友とまでは言わないが、それに近い

関係をオウカはおやつさんと築く事が出来た。

そこに抹茶を啜りながら、食後の余韻を楽しんでいるシィーアが口を開く。

「実に美味じゃった、感謝する。」

ところでオオギ、お主が先程言っておった件じゃが……正直言うて難しいかもしれん」

「何だと」

雰囲気少し和んだところでの一言に、おやつさんは訝しげに確認した。これもまたオウカが気絶している間に、シィーアとおやつさんとで既に何か話をしていたようだ。つくづく話のついていけない状態に彼もシィーアの方を見る。

「シィーアの能力は自然、つまりは植物の多い場所でその効果を發揮する。それは分かっておるな？」

シィーア以外は黙ったまま頷く。彼女が何を言いたいのか、おおそよの予測が立つ。

「となればじゃ、この場所やそれに類する場所では 蝕縛の園 はおろか、茨の一本も生み出すことはままならんのが現状じゃ。これではオオギの言う『万能の装備』とやらには、到底なり得るものではない」

「……」

確かにシィーアの能力には制限が課せられている。植物が多く生息する封印区域であれば最大限に高められた力を行使出来るため、中位の魔物でも触れることも出来ずに終わるだろう。それを事前に見破ったオウカだったが、流石におやつさんたちには予測も出来なかつたらしい。

悔しそうに拳を握り締めるおやつさんに、シィーアは説明を続ける。

「仮に植物のある場所で能力を発動すれば、このような場所でもある程度の茨を持ち込むことが出来るのじゃが、事実それは不可能だと思っただ方がよい」



「……どういうことだ？」

「簡単なことじゃ。シィーアが能力を解除すると同時に、力の供給の止まった茨も枯れて消え去るからよ」

「畜生め、そんな落とし穴があつたのか」

おやっさんは苛立たしそくに頭を掻きながら、肩を落とした。

スタッフルームに気まずい雰囲気立ち込める中、オウカはテーブルの上に開かれた装備品カタログに目をやる。

(……そういえば、あのカタログを見て気になる事があつたんだよな)

暫し何が気になつたのか思い出そうとするが、上手く考えがまとまらない。一先ず気になつたことだけでも確認しておくかと質問をすることにした。

「一つ、いいか？ このカタログに載っている商品なんだが、結構珍しいものもあるようだけどこれってこの店じゃ普通なのか？」

オウカは打撃装甲のページを指差す。そこには魔物のものと思わしき爪が三本装着されている手甲が掲載されていた。

「ああ？ そんなわけねえだろ、これは俺の店でも秀逸の武器だ。

素材にサーベルウルフの爪を使つてるから、その攻撃力も折り紙付きの商品だ」

おやっさんの言葉を聞いて、一つの閃きが頭を過ぎった。

オウカが今まで購入してきた武器のほとんどは、通常の素材を用いた剣が多かつた。勿論それは磨耗品を前提として購入してきたからなのだが、それでも自分の命を預ける物である。カタログにはしっかりと目を通して、所持金と武器などの損耗具合を照らし合わせて吟味することは必要最低限の行為だ。しかし他店ではこの店のように、魔物の素材を使った装備品を扱っているのを見たことが無かつた。

閃きは形となって、オウカに確信を持たせる。

「ということは、これらの商品はおっさんの店でしか買えないってことでいいか？」

「当たり前だ。ブルドオムスでは、俺以外にも開拓者から装備屋になる奴はいるが、素材集めも自分でやってるのは俺くらいだろうよ」  
「なるほどね。あと確認したいんだが、もしシーアの持つている能力と同じ素材が手に入るとして、あんたは何をしたいんだ？」

この回答次第ではオウカは解決策を言わないつもりでいた。おやつさんの人柄にはある程度の理解が出来たつもりだが、金や名声のためであれば、それを支援する必要性を感じないというのが本音である。

こいつは何を言っただとてやがんだという表情を浮かべたおやつさんは、  
「決まってるじゃねえか、武器や防具を造んだよ。尤もそれは、シイの字だけのオーダーメイドだ。赤の他人に売り捌くつもりは一切ねえな」

商人である前に職人らしく、自分の信念を述べた。

あれだけシーアの能力に陶醉した人物なのだ、オウカにとってもこれは予測の範疇だったに違いない。ただここにいる皆に宣言出来るほどの心構えなのか聞きたかっただけなのだ。

「だったら、俺に考えがある」

「考え？」

オウカの発言に反応したのは、黙って話を聞いていたミレットだった。彼女はオウカが横になっていたソファに座っており、たくさんの疑問符が顔に書いてあった。

「簡単なことさ。俺たちがその素材を採ってくればいいんだ」

「何言ってるのよ、オウカ。第一シーアの話聞いてたの？ 能力には制限があるし、その茨は彼女が能力を解く事で枯れちゃうのよ」  
ミレットの言い分は尤もである。しかしオウカは首を左右に振るとおやつさんを除く仲間に分かるように聞き返した。

「だから、シーアの能力を見てミレットは何も思い出さなかったのか？ つい最近の事だぞ」

オウカの言葉を受けて、ミレットは記憶を振り返る。彼を開拓者として素質があるか試験するために封印区域に入り、そして……

「あつ、もしかして……」

「そう、素材はある。だからあとは採ってくるだけだ」

オウカが解決策として導き出し、ミレットが脳裏に思い浮かべたのは、シンフルベアの身体を覆う茨と棘であった。元がシンフルベアだったシィーアだからこそ派生した能力である。それ故に素材としては申し分ないだろう。

「ふむ、それならば可能性はあるのう」

オウカたちの話を聞いていたシィーア本人も解答に至ったようだがあとに残ったのは一人答えの見つからないおやつさんだけとなった。信用していない訳ではないのだが、シィーアの正体はおいそれと話しているものではない。噂というものはどこで広がるか分からないからだ。

おやつさんは両手を広げて意味が分からないとジェスチャーで示す。

「おいおい、お前らだけで納得するな。俺にも分かるように話してくれ」

「だから近い内にシィーア的能力に似た素材を封印区域まで行つて採ってくるってことだ。それならおつさんも念願の装備が造れるつてもんだろ」

「……心当たりはあるみてえだな」

オウカの確信を持った眼を見ながら、おやつさんは腕を組んだ。何やら考えている様子だったが、決断したのか口元をニヤッと広げた。小さい子供が見たら一発でトラウマになりそうな笑みである。

「よし、俺も連れて行け」

「はあ!?!」

おやつさんの突然の物言いに、オウカとミレットは同時に呆れた調子の声を出していた。急に何を言い出すんだこのおつさんとはと、オウカが無礼な事を考えていると、彼はオウカが横になっていたソファの脇から双剣を取り出した。

おやつさんはそのままオウカの双剣を鞘から抜き出すと、両方と

も刃毀れが生じているのが分かりやすいように水平に構えてみせた。「いくらあの茨の壁をぶち壊すためとはいえ、ここまで劣化しちまっただなら買い換えるしか方法がねえ。そこで俺からの提案だ。ただ連れて行けというのは虫が良すぎるだろうから、お前さんの剣をこつちが無料で用意してやる。安心しな、こいつよりも良い業物を造ってやつからよ」

職人の次は商人として提案するおやつさんに、オウカは溜め息をついて了承した。

「分かったよ、ついてくればいいだろ。ただし、自分の身は自分で守ってくれよ」

「当たり前だ」

おやつさん程の実力者であれば、下手を打たない限り危機的状況に陥る事は無いだろうと判断した。オウカとしてはミレットの心配をするのだが、彼女も自分の枷を一つ外せたらしく、『フリーフィールド』での一撃は中々のものであった。

次回封印区域に入った際にはミレットの戦闘技術などを把握し、更に向上させることも必須事項として新たに項目に付け加える。勿論一日でそう強くなるはずはないのだが、実践は一番効率のいい修行である。

「ミレットも、シィアもそれでいいか？」

聞くまでもなく、二人はオウカの決定に賛成の意思として首肯する。

こうしてシィアの装備造りに必要な素材採集のメンバーは、オウカにミレット、シィア、そしておやつさんことバージェンス・オオギの四人に決まった。

あとはいつ封印区域に入るかだが、それにはおやつさんの方から希望があった。

「こいつに代わる双剣を用意するのに三日は必要になる。だから、その翌日にしてえんだが予定とかはねえか？」

ブルドオムスに来て、開拓者になっただばかりのオウカとシィア

には特に予定があるはずもない。またミレットもパーティのメンバーが現在治療中のため、スケジュールは空いている状態だ。

「問題ねえみたいだな。じゃあ、早速俺はこれから武器造りに入るから、その間こいつを借りてても大丈夫か？」

おやつさんはオウカに双剣を掲げながら確認するが、武器として破損する可能性のあるものを使うのは愚の骨頂でしかない。オウカもそれを分かっているから、「四日間程度なら大丈夫だ」という返答に留めておいた。

先にミレットとシーアが『アタック&ガード』を出て、オウカが店外に出る寸前、後ろから声が掛かった。

「オウカ、お前さんの持っている剣、オーダーメイドだろ？ 中々面白いギミックがあるじゃねえか」

少し見たただけであの双剣の秘密に気付いたらしいおやつさんは、早くも何を造るか楽しんでるようだ。

「……流石は職人だな。俺の希望としてはその機能は新しく用意してもらおう武器にも付けてもらいたいんだが、出来そうか？」

そう言われたおやつさんは憤然としたように筋肉を盛り上げらせ、腕を組む。そして不敵の面構えをした。

「馬鹿言え、俺を誰だと思っていやがる。俺は『アタック&ガード』の店長だぞ。黙って俺に任せておけ」

「ああ、頼んだ」

自信満々に言い放つおやつさんに満足しながら、オウカは夕方に移り行く景色へと足を踏み出し、外で待っていたミレットたちと共に帰路を辿るのであった。

## 第八話 再戦の行方？（後書き）

いつも読んでいただいている皆様、そして初めてここまで一気に読んでいただいた皆様、誠にありがとうございます。

毎回毎回、どうすれば執筆のスピードが上がるのかと悩んでおります水々火々です。

今回は少しいつもより短めになっている感じですが、また皆様が予想していた展開とは違っていたかもしれないですが、おやっさんの魅力は魔物との戦闘で十分に書き表したいと思っています。

おやっさんファン（？）の方々には期待していただければと思います。

誤字脱字やご意見・ご感想などございましたら、お気軽にご指導いただければと思います。

## 第九話 初依頼（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

## 第九話 初依頼

四日後の早朝、オウカとミレット、そしてシィアの三人はフォント邸の広い庭にいた。ブルドオムスでも広大な敷地を持つ彼女の庭も、それに違わぬ面積を誇っている。浅く整えられた芝生が広がっており、周囲の壁には外部からの視線を遮断するための木々が生え揃っていた。

清々しい空気の中、朝日がゆっくりと昇ろうとしている時間に何故三人は表に出ているかというところ、

「次は 風水流葉 ふうすいりゅうは のお浚いだ おひ。ミレット、やってみてくれ」

「……はいっ」

主にミレットの戦力強化のための早朝特訓である。既に一時間以上動き続けている彼女の全身は汗でびしょ濡れになっているが、決して自分から弱音を吐く様子がない。というのもも三日前、オウカが外で型の稽古をしているところにミレットがお願いをしたのが事の発端である。彼女でも分かっていたのだらう、オウカたちの中では自分が一番弱いことに。

初日の内はミレット自身慣れない動作に戸惑いの方が多く失敗も重ねたのだが、開拓者としての吸収力の高さから徐々に伸びて行き、今現在見れるレベルにまでは到達する事が出来た。

オウカの指示に従い、ミレットは身体の芯を崩さないことを心掛けながら歩く。彼女の歩行は流麗となり、もし見る者がいれば感嘆の溜め息をつきたくなってくるに違いない。

しかしオウカはミレットの動きを見ながら、こっそりとシィアに手のサインで指示を出す。無言で頷いたシィアはミレット目掛けて、一切音を立てずに跳躍した。そして頭上を通り過ぎる瞬間、身体を捻って振り下ろしの蹴りを放つ。狙いはミレットの右側頭部。

不意の攻撃に流れるような歩みが乱れ、足が絡まってしまったミ



レットは「ちよ、それ反則っ」と言いながらそのまま転倒してしまつた。べちゃつと音を立てて顔面から倒れた彼女の傍を、シィーアは跳躍時と同様に音も無く降り立つ。

「うう、いったあ……」

「ふむ、ミレットもまだまだじゃのう。お主の胸の養分を減らせば、もちつとバランスよく動けると思ふのじゃが、どうじゃ？」

「どうじゃって、これはそんな簡単に小さくならないのよ。あー、自信あつたのになあ……」

涙目になるミレットに手を貸しながら、シィーアはそう評価した。別にシィーアは彼女を卑下している訳ではない。オウカとシィーアの一戦を機に、ここ数日の間でミレットとの仲が深まるちよつとした出来事があつた結果、互いに気楽に言い合える間柄になつたのだ。それはまた別の話である。

立ち上がつても軽くへこんでいるミレットにシィーアは、むんずと目の前にある二つのふくよかな胸に手を密着させた。

「な、な、何すんのよっ！ シィーアってもしかしてそっちの趣味があつたの！？」

「違つわい。しかし、誠にミレットは集中力が長続きしないんじゃない。後ろを見てみいな。」

「？ 後ろ？ ……」

ミレットが訝しげに振り返るとそこには茨が一本地面から生えており、彼女の後頭部があつた辺りに狙いを定めて先端を向けていた。その距離、およそ三十センチ。一步後ろに下がるだけでその鋭い棘が刺さるには十分な間隔だ。

青褪めながらミレットはシィーアの方へと向き直る。

「どういつつもりよっ」

「どうもこうもない。ただ単に集中しておれば前後からの同時攻撃を回避することも出来たのに、それを怠つた結果がこれじゃ。一度の失敗で全てを投げ出しては、必ず死ぬぞ？」

それが戦場であれば尚の事、何が起こるか予測がつかない故、最

大限に神経を研ぎ澄ませ続けることが大切じゃぞ、ミレットよ」

「うもつともです、はい……」

武の領域で言えばシィーアの方がミレットよりも格上であるため、彼女は現在オウカの臨時的な助手としてミレットを鍛える立場でもある。そのため、こういった不意打ちなどに対しては対応出来ないミレットが修行不足として苦言をいただく姿も、ここ最近よく見られる風景の一つだ。

これも偏ひんに戦力増強とミレット自身の生存力の向上を図るためとして、オウカは割り切っていた。何も躓つまずかずに成功する事など一つもありはせず、自己の修練を重ねる事でしかそれを克服することは出来ないのだ。それはオウカが昔に身を以って学んだ事でもある。

「ミレット、俺が実際にもう一度手本を見せるから、今度は見るこ  
とだけに集中してくれ。シィーア、好きなように攻撃してくれ」

言うのが早いのか、オウカの気配は希薄に景色に解け込むかの如く霞む。しかしその姿は見る者の眼を離さない不思議な魅力があった。相反する現象の中、オウカはゆっくりと遠回りに二人の方向へ歩みだした。

「そうさのう、ここは一つミレットに分かりやすい戦術でいくかの。  
よく見ておれよ」

シィーアは両手を地面に着けると同時に、オウカの左右に二本の茨が出現する。一本は真横から胴を薙ぎ払うため、もう一本は相手が上に回避したところを追撃するための二段構えとなるはずだったが全ては空振りに終わる。素手であるため、剣で防ぐことは不可能ならばどうやって全ての攻撃を避けたかという点、茨が出現しきる前を通り過ぎただけである。

範囲の広い攻撃で一番厄介なのはそのリーチの長さであり、その威力が発揮される以前の段階で対応するのが一番効果的である。

次に来たのはオウカの事前回避不能な位置から生えた三本の茨が、突き殺さんとばかりに槍の形状となって真っ直ぐに伸びてくる。もし真ん中の一撃を左右のどちらに回避したとしても、その僅かな隙

をつかれて残る二本の槍で貫かれるのが落ちだ。

（嫌な攻撃だが、確かに俺の意図を汲んでよく考えている。これならミレットの参考にはなるな。それならば）

茨の槍が身体に接触する寸前、シンフルベア戦で見せた柳の体術で紙一重で捌く。今のは失策とばかりにもう一本の茨が牙を剥くが、その攻撃もオウカに触れる事も出来ずに通り過ぎる。彼はただ流れに逆らわず、足捌きだけで避けきったのである。

風水流葉 とはその名の通り、風や水の中を流れる木の葉の如く、勢いに逆らわずあるがままに攻撃を受け流す事を理念とした歩行である。故に相手の攻撃に勢いがあればある程、術者にとって非常に回避しやすいものとなる。

ではミレットがシィアの不意打ちを回避出来なかったのは何故かと言うと、周囲の微細な変化に神経を研ぎ澄ませるよりも自身の歩行に集中し過ぎたことが大きな要因となっている。内部よりも外部への変化を鋭敏に感じる事が、風水流葉 にとって必要不可欠となるのだ。

周囲への警戒をしながら、オウカは残り八メートルとなった先にいるミレットに目をやった。彼女は言いつけ通り、オウカの一挙手一投足に全身全霊で気を配っているらしく、文字通り見学している。残りの距離も僅かとなり、ここいらで大技が来るだろうかと、オウカの考えた瞬間、眼前に無数の茨が壁となって立ちはだかる。フオウト邸の庭という場所の影響から流石に 蝕縛の園 とまではいかないが、それでもこれまでみたいに進むのは困難といえる状況だ。

茨が蠢きながら進入する者を捕え、貫き、磨り潰さんとする光景に、オウカは後退した。あのまま進んでも開かれる道はない。それは一目瞭然である。

だから距離を開けたのは序僧距離をかせぐための行為。疾走するのに十分な位置に立ったオウカは、『俊敏』『見切り』『高速思考』の三つのギフトを同時に発動させる。

常時発動型である『高速思考』は、能力者の思考能力を補助するための役割を担っているのだが、これを意識的に発動させると瞬間的にだが体感時間を遅らせる事が出来る。つまり周囲で起きる物事の流れが緩慢なものとなり、優位に次の行動に移る事が出来るのだ。ならば何故このギフトを始めから使用しなかったのかというと、代償としてギフトを解除した時に発生する思考と動作の不一致が戦いでは致命的なものとなるからであった。それは継続して発動している時間が長ければ長い程、解除した際に能力者への対応を遅らせる。だからこそ、このギフトは無意識で発動している状態であるのがセオリーとなっている。

オウカがこの場で『高速思考』を意識的に発動したのは、それだけこの状況が険しいことを意味しているのだが、反面彼はこの状況を生み出したシィーアに感謝もしていた。

ありとあらゆる悪環境に対応特化した体術を最大限に発揮してこそ、風水流葉の極意をミレットに教授出来ると言えよう。一時的にも師という立場に立ったからには、ブルドオムスの『種』を破壊するまでミレットを導くと決意している。

ならば今やるべき事は一つしかない。

( 行くか )

オウカは初動から雷速に入り、この茨の壁を越えるのに必要な間合いに踏み込む。外敵の侵入に反応した茨の群れが無数の手の如く、オウカを捕えようと一切の容赦なく伸びる。正面は回避の出来ない危地に彼がとつた行動とは、空への道であった。加速した勢いはそのままに上方へと大きく跳躍する。また一度の跳躍で足りない距離に関しては、向かい来る茨や伸びる棘の非殺傷能力部分を巧みに足場にして、一陣の風となって駆け上がる。

すぐ真下では茨の壁が波となって、オウカが先刻までいた場所を蹂躪する。もしこの場にイリアがいれば、荒れ狂う我が家の庭を見て卒倒するに違いない。

冷静になってみれば朝練が終わった後、変わり果ててしまった庭

をどのようにイリアへ弁解するか考えていなかった。不味い……非常に不味いと、体感時間が遅くなっているため、今は考えなくてもいい事を思案してしまう。

それがいけなかったのか、最後の砦にはこれらの茨の主であるシィアが女王の風格を以って待ち構えていた。これが何かの冒険譚であれば十二分にその役割を果たしていると言えよう。

「よくぞここまで来た、主よ。しかしこの先に進むのならば、このシィアを倒してからにしておう」

既に彼女は両手両足に茨の武装を施しており、万全の臨戦状態となっていた。それもオウカの着地予想地点にいたので、応戦は免れない。

「よく言った！ 存分に戦おうじゃないかッ！」

普段のオウカではここまで血気のある言葉を口にはしないであろう事を、シィアはこの時に気付くべきだった。

オウカの猛攻に耐えるべく深く構えたシィアは、両者激突の瞬間に読みを誤った事を知る。言葉では威勢のいい事を言いながらも彼女が繰り出した溜めの鉤爪の上に木の葉のように降り立ち、勢いを殺さずに跳び去る。振り返った時には遅く、もうミレットの立つ場所に辿り着こうとしていた。

「……してやられたとは、このような事を言うのかのう。我もまだまだ修行不足じゃな」

戦術としては分かるのだが、戦う気満々だったシィアは遣る瀬無い溜め息をつきながら能力を解除する。

オウカが行った事といえは単純で、崩せない状況があるのならそれを更に強固にし、相手の攻撃手段を絞らせたことである。臨機応変にして、時には自分から変化を投じるのが 風水流葉 の基本を突き詰めたものであり、極意でもあった。

攻撃とは物理的なものに限らないということをおウカは身を以って体現し、ミレットの前に大した音もなく着地した。

背後でシィアの能力が解除されたのを感じ取り、発動していた

ギフトを解除すると、『高速思考』の反動が少ない内にミレットに声をかけることにした。

「これがお手本だな。まあ、三日で出来ることじゃないから地道に鍛錬するしか方法はないだろうなって、どうした？」

「まあ、何というかね。オウカが普通じゃないのは分かっていたけど、改めてそう感じたただけだから」

ミレットが呆れながら応えるのも無理はない。オウカが行ったのはお手本なんて生易しいものではなく、実戦を想定しての動きであった。それも間違えれば、すぐ傍に死が隣り合う想定でだ。

「でも勉強になったのは確かだし、感謝してるよ。ご指導ありがとうございますっ」

礼を忘れずに頭を下げるミレット。

そんな彼女を見ながらオウカは早朝特訓を終わる事にしたかったのだが、後ろを振り返って後悔した。

この三日間、ミレットの基礎能力を向上させることを念頭に置いていたため、シーアの能力を使用した模擬戦を行った事がなかったのである。ここに到達するまでの間もオウカの進行を妨害するために、彼女の茨はその能力を遺憾なく発揮させていた。

その結果がこの惨状である。茨の生えていた芝生は土が剥き出しになっており、いつその事ここを造園にした方が早いのではないだろうかと思わせる荒れ具合だった。

ミレットもオウカの隣に立って、「これ見たら、お姉ちゃん何ていうかな……」と冷や汗を浮かべていた。

「二人とも呆けた顔をしてどうしたのじゃ？」

シーアは肥やした土の上を歩いてこちらに来る。

そんなことをしたら靴が汚れるのではと思ったが、どういつ訳か土で汚れた形跡がない。

「まあ、俺とシーアが後先考えず暴れたせいなんだが、これをイリアにどう謝ればいいかと考えていたんだよ」

「何じゃそんな事を考えておったのか」

「おい、そんな事ってお前も一緒に謝るんだぞ」

「呆けたか、主よ？ シーアの能力を知っておればこのような瑣末な事、気にせんでもよからうに」

「……そうだったな。どうやら頭が上手くまわってないらしい」

シーアに言われるまでまったく気付かなかった解決策。確かにシーアの能力は自然を操る力を持っているため、この荒れ果てた庭を元通りに戻す事など朝飯前であろう。

普段のオウカであれば簡単に行き着く答えであるだけに、やはり意識的に発動した『高速思考』の反動が大きいと見える。

「早速で悪いが、元に戻してくれないか？」

「お安い御用じゃ、ほれっ」

シーアがぱちんと指を鳴らすと直ぐに変化が起きた。盛り上がった土から大量の新芽が生えたと思うと、見る見るうちに成長して周りと同じ背の高さに揃う。また地面が窪んだ場所には茨が足りな分分の土を運んで均し、何度か繰り返し返す事で作業は完了した。

「ホント、シーアの能力って便利よね。攻撃だけじゃなく、こうした細かい作業も出来るんだから、おやっさんが気に入るのも無理ないよ」

「そう褒めるでない。条件が整わねばこの力も真価を發揮出来んんじゃないから」

「だから今日、おっさんと封印区域に素材を採りに行くんだろ。何はともあれ、まずは汗を流して、それから朝飯だ」

三人とも朝から動いて空腹の状態である。皆、異論はないようである。本日の早朝特訓は終了となった。

「オウカにシーアちゃん、二人とも手を出してみて」

朝食も終わり、食後のティータイム時にイリアは話を切り出した。オウカとシーアは別段疑う様子もなく、イリアに手を差し出す。

「はい、ではこちらをどうぞ。無くさないように身に付けておいて

「くださいね」

イリアから渡されたのはシルバーのネックレスで、先端に親指大のプレートが取り付けられていた。プレートには何やら幾何学模様が刻まれているが、どういう意味があるのかさっぱり理解出来ない。「これは？」

突然の贈り物に、感謝よりも先に戸惑ってしまふ。

「これは開拓者になった方々にはお渡ししているギルド会員証です。本当は依頼を初めて受けるときにお渡しするんですけど、昨日私の終業時間に出来上がったと報告があったもので直接持つてきました。

あと形状に関してですが、定形はありません。理由はギルドでしか発行出来ない記号を印字していることもあって、複製は困難となつているからです。だからこそ各々が保有しやすい形状が一番安全だと考えられていて、ギルドに所属される方々に合わせて会員証の形状も千差万別となっています。ただし場所によっては本人確認として会員証の提示が求められることもありますので常に携帯してくださいね」

つまりこのネックレスがあれば、ギルドに所属している証明になるという事だ。

オウカはある理由からネックレスを常時身に着けているが、シィアも同じ形状を渡したのは何故なのか。

「それは前にも言った通り、二人は兄妹として登録されています。疑われないためにも、同じ形状である事が一番自然だと思つたからです。ふふ、それにシィアちゃんも喜んでくれているようだし」隣席に座っているシィアを見ると、彼女は嬉しそうに自分のネックレスとオウカのを交互に見て微笑んでいた。お揃いというのがいたくお気に召したらしい。

「でもつてわたしの会員証は、これよ」

ミレットはカーゴパンツのポケットから財布を取り出すと、中から一枚のカードをオウカたちに見せた。

どこにもあるキャッシュカードと同じサイズの大きさだが、異



なる点はその表面に幾何学模様が刻まれていることか。

「ミレットはよく会員証を無くしてしまうから、特例で形状を変化させたの。これなら絶対に無くさないでしょ」

「お、お姉ちゃん！ そんなこと言わなくていいよっ！」

初めは自慢する感じで会員証を掲げていたのだが、真っ赤になつて抗議するミレットは背中に隠してしまった。

「なるほどな。で、前の会員証の形状つて一体何だつたんだ？」

「ちよつとオウカまで！」

「いいじゃないの、減るもんじゃないんだし」

「減るの！ わたしの心の耐久力が減るの！」

「なら仕方ないわね……」

「ほっ……」

「でも本当に意外よね。ミレットが猫のぬいぐるみを会員証にするだなんて、この都市では誰も真似出来ない事だわ」

「うわああん、お姉ちゃんのバカああああああああああああああああああ……っ！」

もう顔面から湯気が出るんじゃないかと思うほどに、ミレットは顔を赤くして部屋から飛び出してしまった。たぶん暫くは帰ってこないに違いない。

そんな状況を生み出してしまったイリアはというと、お腹を抱えて笑っていた。

「ふふふ、ごめんなさいね。あの子つたら今でもよく物を無くすのよ。だから忘れた頃に釘を刺しとかなないと自分で気をつけなくなってしまうから、たまにああやってね。ふふふ」

仕事場では決して見せない表情に、オウカは彼女の安らぎを垣間見た。やはり家族がイリアを飾らない状態でいさせてくれるみたいだ。

「ちなみに猫のぬいぐるみとは何じゃ？ そんなに恥ずかしい形をしておるのか？」

自分の中にある知識からは理解出来なかったのか、シィーアは不

思議そうな顔をしている。

シィアの出生を知っているイリアは、優しく説明した。

「ぬいぐるみっていうのは、動物などを模った布の中に綿を入れたものよ。そしてミレットが持っていたのが、猫のとっても可愛らしいぬいぐるみだったの」

「ほう、可愛らしいのか。……ん？ ならば何故ミレットは恥ずかしがっておったのじゃ？」

また思い出したのか、イリアは笑いを抑える仕草をした。

「実はミレットがギルドに登録したのは十三歳の頃だったの。その頃のあの子って今と違って凄いい気だね。いつも持ち歩いていたのが、猫のぬいぐるみ……。」

ある日、家族の誰にも相談せず出掛けたつきり、夕方になっても帰ってこないから心配になって探しに行こうとしたところで、玄關で立ち尽くすあの子を見つけたわ。両手には、いつものぬいぐるみと新しいぬいぐるみの二つを持ってね。

結局ミレットは両親に叱られたんだけど、最後まであの子は理由を言わなかった。私もあそこまで怒っている父と母の姿を初めて見たけど、それでも何も言わなかった。きつと子供だったミレットには何か大きな決意があったんでしょね。

それから段々とオウカたちも知るあの子になっていったんだけど、今でもこの話をするとかあの時の事を思い出すのか顔を真っ赤にして逃げちゃうのよね」

昔を懐かしむイリアの表情は姉としての包容力が溢れていた。

あまり知られていない事だが、ギルドの登録は年齢制限というものがない。本人の入会の意思さえあれば、子供でも老人でも登録することは可能である。ただし、登録するからには相当の理由が必要となってくる。本人がそれを将来的にでも実行出来るか、否かでその結果は決まる。

まだ小さい子供であったミレットに開拓者になるための決意をさせた理由は何なのか、それは本人しか知りえるはずもない。しかし

それまで内気だった彼女が全く異なる道を進む決意をしたのは、決して並大抵のものではなかったはずだ。

イリアもそれが分かっているからこそ、その決意が揺らいでいないのか確かめるように、姉として度々発破をかけているのかもしれない。

「あと最後に一つだけ注意をしておきますね。お渡しした会員証をもし無くされると再発行に一千ドルかかりますので、くれぐれも無くさないようにお願いします」

「でも、ミレットのやつは無くしてみたいだけど？」

「ええ、当時は登録したばかりのあの子には支払えるほどの実力がなかったから、両親には秘密で私が代金を立て替えておきました。尤もあの父と母のことだから知っていたのかもしれないですけど」と、イリアが言ったところで廊下からバタバタと走る音が近づいてくる。

パンツと勢いよく開いた扉の先には、初めて会った装備で身体を覆ったミレットが立っていた。

「オウカにシィア、さっさとおやつさんのところに行くわよ！先に外で待つてるからね！」

言いたいことを言うと、登場時と同様にバタバタと走り去ってしまった。余程姉であるイリアと顔を合わせたくないらしい。

オウカとシィアはイリアに朝食の礼を述べると、急いで玄関へと向かった。特に部屋に戻ってまで準備するほどの事もない。もし必要な物があるとすれば武器となる剣だが、それはこれから向かう『アタック&ガード』で受け取るので問題はない。

オウカたちが外に出るとミレットは邸宅の門で待っていた。横に並ぶや否やミレットは無言で歩を進めだしたので、オウカとしては時間が解決してくれる事を願いながら後に続いた。

（悪乗りした俺も不味かったが、イリアも少しくらいフォローしてくれても罰は当たらないと思うぞ……）

三十分程で着く店までの距離が、今日は長く感じそうである。

店に到着する頃にはミレットの気持ちも落ち着いたみたいで、入店する時には「おやっさん、準備はできたー？」と明るいい声を出していた。

「当たり前だ、こっちは準備万端だぜ」

店内に入ると、オウカはあまりの驚きに固まってしまった。というのも、おやっさんの装備がかなり本格的な状態になっていたからである。

頭には二本の角が生えた兜に、胴には大鎧、手足には籠手と具足を身に付けており、それぞれに魔物の素材をあしらった彼オリジナルの防具で全身を固めていた。一言で表すと、戦国甲冑という言葉がしっくりとくる。

それも巨漢がこの戦国甲冑を装備するとより一層迫力があり、シンフルベアでさえ可愛く思えてくるから不思議だ。だが相変わらずミレットはおやっさんのこの姿に違和感を感じないようで、普通に今日のスケジュールを話している。

おっさんが開拓者として前線に立っていた時代はこの格好が普通だったのだと、現実逃避していたオウカは袖を引っぱられる感覚で我に返った。

「あ、主よ。あれは何じゃ？」

「シィーアも思ったか。あの格好はないよな」

身近にいた味方に嬉しさが込み上げてくる。しかしそれもシィーアの続く言葉を聴くまでの間であった。

「……主もそう思うか。どうやってここまで来たかは知らんが、やはりあの地から抜け出して来たのであるう。見た目からも分かるように中々手強いじゃろうが、主とシィーアであれば倒せるはずじゃ。しかしミレットのやつは何を考えておるのじゃ、あれでは無防備すぎるぞッ」

シィーアはいつでも踏み込めるように、半身を少し前に傾ける。

話のついてゆけないオウカはもう一度、臨戦体勢になるシィーアにおやつさんを指差して確認した。

「シィーア、あれって何に見える？」

「何って、主たちの言うところの魔物であろう。シィーアがいた時には見たこともない奴じゃから、新種かもしれん」

もしかしたらあの装備をした開拓者を見た事がないのかもしれないと思っていたら、まさにその通りであった。確かに現代の装備品では非常に珍しい部類に入るのであるが、おやつさんが身に纏うと妙にしっくりと似合っているため、ややこしい勘違いをさせてしまったようだ。

「言っておくが、あれは魔物じゃなくておっさんだぞ。身体を覆っている装備は無視して、気配だけを確認してみろ」

オウカがそう指示するとシィーアは訝しげながらも体勢は崩さずに、じつと戦国甲冑を凝視した。

「……………本当じゃ、あそこにおるのはオオギじやのう。あやつは何をしておるのじゃ？」

「あれも装備の一つだから、多分あの格好で封印区域に入るんじゃないかな」

「何とも面妖な…………人間とは色々と思議な物を生み出す生き物じやのう。しかしそれでもこの我のために力を貸してくれるのは有難い事よ」

呆れた声を出すシィーアはおやつさんのところまで近づいて、その甲冑に触れた。

「ん？ シィの字か、どおした？」

「此度はオオギにも迷惑をかけるが、宜しく頼むのじゃ」

「おいおい、頭上げろって！」

深く頭を下げたシィーアに、おやつさんは慌てた。彼本人の中では、既に四日前の話し合いで全て終わったと思っていたのだ。だから互いに協同関係として今回の素材採取に臨むと思っていたから、こうして改めて御礼を言われると非常に困ってしまうのであった。

「そういえば、オウカの武器をまだ渡していなかったなつ。ちよつくら取ってくるぜっ」

わざとらしい程に声を上げて、『鬼化』とは別の意味で赤くなつたおやつさんは室内奥へと入っていった。

「今日の夕飯はたこの姿焼きにしようかな……」

無意識だと思つミレットの眩きに、オウカとシーアの両名は無言で賛同した。

暫くして戻ってきたおやつさんの両手には、二振りの剣が握られていた。

「待たせたな、これが前回に約束していたオウカの双剣だ。抜いてみてくれ」

鞘のままですずは手に馴染むか確かめてみる。両手それぞれにくる重さは、今までと比べると若干重くなった。それでも剣技が鈍るとかの悪影響が出ない程度なので、大した事ではない。

続いてオウカは腰に帯びた帯剣ベルトの左右に剣を取り付けると一息で抜剣した。すらりと真つ直ぐに伸びた片刃の剣。その剣身から感じるのは清澄な光を閉じ込めたような質感を伴っており、今まで通り斬撃や刺突などを行つても抵抗感が少ないに違いない。明らかにこれまで使用してきた剣とは別物の業物である。

「実際にこれを振ってみても？」

「何言つてやがる、それ以外でどうやって確かめるつてんだ？」

「ご尤もである。」

店内奥にある通称『試着室』と呼ばれる部屋へと入ったオウカは、室内の中央へと進む。

ミレットたちはおやつさんに連れられて別室のモニタールームにて、室内のオウカの様子を見ているはずだ。

オウカは剣を持ったまま両手を前に突き出すようにした。剣の自重で下がる剣身をそのまま下に下ろし、左方向へと回る。小さな弧

を描いていた剣は、翼を広げるように天上を斬り裂く。

緩慢だった動きが、次第に早くなつてゆく。右手と左手はお互いを別の生き物として不干渉を働くように、接触して剣戟を打ち鳴らす事もなく整然と舞う。最早この中で剣筋を目で追う事の出来るのはオウカか、シーアの二人くらいしかない。

「破ッ！」

最後は瞬間移動したかに思えるほどの高速移動をしながら、左右の袈裟斬りを斬り放った。対衝撃・斬撃用特殊炭素加工された繊維を幾重にも重ねているにもかかわらず軋む壁面に、彼の斬撃がどれ程の威力を秘めているのかよく分かる。

残心のためか、オウカは再び両手を前へと伸ばして構えをとる。

そして抜き出した時と同じく、一息で剣を鞘に収めた。

「ふう……。おっさん、ありがとな。こんなにいい剣を使ったのって初めてだ」

満足そうにオウカは感謝の意を表すと、部屋に取り付けてあるスピーカーからおやつさんの照れ臭そうな声が聞こえた。

「へっ、俺が造った剣だぜ？ 当たり前前に決まってるんだろ、ったく」

「ところで、例のあれは希望通り付いてるんだよな？」

「ああ、勿論だ。造っている最中、こんな事を考える職人がいるのかと思うと楽しくて仕方なかったぜ」

おやつさんの声に職人特有の造る上での面白さが滲み出ているを耳にしながら、オウカは双剣の一部を確かめた。

「……確かに問題ないみたいだ。おっさん、借りっぱなしは嫌いなんだ。この礼は絶対すぐに返すからな」

「ふん、そうと決まればさっさと行くぜ。扉のロックは解除したから外で集合だ」

スピーカーからの音はそれだけを伝えたと、モニタールームの方で電源を切ったのかパツンと小さく鳴って静かになった。

オウカが『試着室』を退室した後も、軋む音は奏で続けられた。

装備屋『アタック&ガード』を出発した一同は、まずギルドへ向かう事にした。

何故ギルドに向かうのかというと、実は開拓者個々の業績評価も一定の期間にどれ程の依頼を受けたのがギルドにて記録されているからである。

そして数ある依頼をどれだけ依頼主の希望に沿って達成出来たのか、そこが重要な判断基準となっている。まったく依頼を受けていない開拓者と、受けて達成する開拓者ではその待遇も変わってしまう。簡単にいえば、上位ランクの開拓者でなければ見る事の出来ない資料や施設などが、ほぼフリーパスで利用可能となるだ。これはかなり魅力的である。

ミレットが所属するパーティは中位ランクの部類に入るため、『フリーフィールド』などの大型施設の利用に関しては施設利用費が三割引で対応してもらえるので、開拓者になったばかりであるオウカたちが上位を目指すのは損ではない。

つまりおやつさんが今回の依頼を正式な形でギルドを通じて、オウカたちに依頼をする

事で彼らの実績を補助してくれる手筈となっている。これが何もせずに評価だけをもらうのは不正行為だが、実際に封印区域まで行って素材を採取する事は確定内容となっているので問題はない。ギブアンドテイクの関係だ。

そうしてギルドに着いた一同は予め決めていた通りに依頼の申請と受諾を行い、封印区域への入り口となる門へと向かった。

「しかし、開拓者っていうのも色々としがらみがあるもんなんだな。正直、もっとシンプルだと思ってた」

「まあね、でも今回の依頼は利害が一致しているから、内容としては優良のカテゴリに入ると思うよ」



「なあに言つてやがる。今回ののは優良も優良、最優良の話だぜ」

オウカの呟きに、ミレットとおやつさんが反応する。前々から開拓者として生計を立てている彼らからすれば、今回のような指名での依頼は知名度が上がらない限りまず有り得ないのだ。普通はもつと雑用に近い依頼を選び好みせずを受けて、着実に実力を伸ばしていくのがセオリーである。

「ところでオウカ、門に着く前に一つ聞きたい事があるんだがいいか？」

「どうした、おっさん？」

「いや、四日前は俺も浮かれてて肝心な話をしていなかったのがわりいんだが、素材はどこで手に入るんだ？」

おやつさんの疑問は尤もだ。これから封印区域に入るからには、事前の情報の共有は必要不可欠となる。それが念願に思い描いていた装備品の素材であれば尚の事である。

「そういえば言つてなかったか。シーアの装備造りに必要な素材を持っているのは、シンフルベアという魔物だ」

「……何だと？」

それまで重量のある甲冑を物ともせず歩いていたおやつさんの歩みが、オウカの一言で止まった。

シンフルベアはブルドオムスの抱える封印区域の中でも、上位の魔物で認識されている。その凶暴性や巨躯でこれまで多くの開拓者が犠牲になっているのは周知の事であり、もし万が一遭遇した場合は可能な限り逃げの一手を打つ事が常套手段となっている。

過去におやつさんも仲間の開拓者たち八人とパーティを組んでシンフルベアを討伐した事があったが、その時は三匹を狩るのにかなしの苦戦を強いられた経験がある。

オウカはそれをまるでちよつと買物をするみたい感覚で答えたのだから、おやつさんの心情は如何様なものか火を見るより明らかである。

「ちよつと待て。お前さん、本気で言つてんのか？」

「ああ、本気だ。現に俺はその魔物を何匹か討伐している。嘘だと思うのなら、ミレットに聞いてみたらいい」

真偽を問いかけるおやつさんの視線に、それまで黙って話を聞いていたミレットは曖昧な表情で応えた。

「オウカが言ってる事はホントだよ。その場にわたしもいたから間違いないし、依頼主に嘘を言っても仕方ないしね」

「……分かった。だが相手がシンプルベアだつてんなら、安全第一だ。危険だと思ったら残念だが、依頼は取り消すからな」

その言葉の含みには、ミレットやシーアの心配をしている事が分かる。普段は無愛想な態度を装っているおやつさんも、今回の依頼が危険なものだと理解しているようだ。

「そこは俺も考えているから安心してくれ」

「ったく、どこからそんな自信がくるんだか知りたいもんだぜ」

呆れて自分の頭を掻こうとしたのか、おやつさんはいつもの癖で手を持ち上げたのだが装着していた兜に遮られていた。一見すると滑稽な姿であるが、オウカが連続で討伐したシンプルベアの個体数を知らないのでは仕方がないのかもしれない。もし知ったとしても実際にその目にするまでは、眉唾ものだと思ってしまうはずだ。

「とにかく、ここでじっとしてても始まらないよ。先に進め？」

ミレットもおやつさんの気持ちが分かるのか、これ以上何も言わずに先を促すだけに終わった。

そうこうしている内に、オウカたちは門の前に辿り着いていた。

## 第九話 初依頼（後書き）

いつも読んでいただいている皆様、そして初めてここまで一気に読んでいただいた皆様、誠にありがとうございます。

今回の話の投稿まで非常に時間が掛かってしまい、誠に申し訳ございません。この場を借りて謝罪させていただきます。

皆様、親知らずという名の魔物（奥歯に生息しております）に気をつけて下さい。……奴らは獅子身中の虫です。

結果からいうと無事に抜く事が出来たのですが、その前後のメンタル的にやる気を殺されるのはもう勘弁してほしいです。

次回からはいつも通り更新出来ればと思いますので、宜しくお願い致します。

誤字脱字やご意見・ご感想などございましたら、お気軽にご指導下さいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6483w/>

---

Chaos Blood

2011年11月8日05時08分発行